

UCHINONO

内野々遺跡

林業試験場建設に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

1992.3

宮崎県教育委員会

序

埋蔵文化財の保護・活用に対しまして、日頃より深い御理解をいただき、
厚く御礼申し上げます。

このたび宮崎県教育委員会では、林業試験場の建設に伴い、記録保存のため西郷村内野々遺跡の発掘調査を行いました。今回の調査では、縄文時代の集石遺構、弥生時代の堅穴住居址をはじめ、大量の土器や石器を発掘しました。それらの遺構・遺物によって、縄文時代の地域間交流や、弥生時代から古墳時代にかけての人々の生活の様子を垣間見ることができたことは、大きな成果と言えるでしょう。

本書が学術資料としてだけではなく、社会教育や学校教育の場で活用され、埋蔵文化財の保護に対する認識と理解の一助となることを期待します。

なお、調査にあたって御協力いただいた関係諸機関をはじめ、御指導・御助言をいただいた先生方、並びに地元の方々に心からの謝意を表します。

平成4年3月

宮崎県教育委員会

教育長 高山義孝

例　　言

1. 本書は、県林業試験場の移転建設に伴い、宮崎県教育委員会が実施した西郷村内野々遺跡の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は、平成2年3月7日から3月30日、同4月16日から8月7日まで行った。
3. 本書に使用した位置図は、国土地理院発行の5万分の1図をもとに作成し、遺跡周辺地形図については、宮崎県土地開発公社作成の千分の1図をもとに製図、作成した。
4. 現地での図面作成は、調査員の他に、文化課埋蔵文化財係職員の応援を得、また一部は測量会社に委託した。
5. 遺物・図面の整理は、宮崎県総合博物館埋蔵文化財センターで行い、遺物の実測・拓本・製図等は、東憲章のほか小野信彦氏（北方町教育委員会）、整理補助員の協力を得た。
6. 2号住居址出土の長頸壺内部に見られた炭化物について、東京大学総合研究資料館松谷暁子氏に識別を依頼し、玉稿を賜った。
7. 石器の石材については、宍戸章氏（元文化課職員）に御教示いただいた。
8. 本書に使用した写真は、東が撮影した。
9. 本書に使用した方位は、位置図・周辺地形図については真北、他は全て磁北である。レベルは、海拔絶対高である。また、本書で使用した記号は、S A が堅穴住居址、S C が土坑、S 1 が集石遺構を示している。土器の色調については、「新版標準土色帖」に掲った。
10. 本書の執筆・編集は、東が行った。
11. 遺物は、宮崎県総合博物館埋蔵文化財センターに保管している。

本文目次

第Ⅰ章 はじめに

第1節 調査に至る経緯	1
第2節 調査の組織	1
第3節 遺跡の環境	2

第Ⅱ章 調査の概要

第1節 調査の経過	4
第2節 番序	7

第Ⅲ章 調査の記録

第1節 縄文時代の遺構と遺物	8
第2節 弥生時代の遺構と遺物	33
第3節 時期不明確な遺構と遺物	57

第Ⅳ章 まとめ

まとめ	65
-----	----

挿図目次

第1図 遺跡位置図	3
第2図 周辺地形図	4
第3図 遺構分布図	5~6
第4図 土層断面図	7
第5図 集石遺構実測図(1)	9
第6図 集石遺構実測図(2)	10
第7図 集石遺構実測図(3)	11
第8図 土坑実測図(1)	12
第9図 縄文土器実測図(1)	14
第10図 縄文土器実測図(2)	15
第11図 縄文土器実測図(3)	16
第12図 縄文土器実測図(4)	17
第13図 縄文土器実測図(5)	19
第14図 縄文土器実測図(6)	20
第15図 縄文土器実測図(7)	21
第16図 縄文土器実測図(8)	22
第17図 縄文土器実測図(9)	23
第18図 縄文土器実測図(10)	25
第19図 縄文土器実測図(11)	26
第20図 S A I · S A 2 実測図	34
第21図 S A I · S A 2 出土土器実測図	35

第22図	S A 2 出土土器実測図	36
第23図	S A 2 出土石器実測図	37
第24図	S A 2・S A 3 出土土器実測図	38
第25図	S A 3 実測図	39
第26図	S A 4・S A 5・S A 8・S A 10 実測図	40
第27図	S A 4・S A 8 出土土器実測図	41
第28図	S A 8 出土土器実測図	42
第29図	S A 8 出土石器実測図	43
第30図	S A 6 実測図	44
第31図	S A 6 出土土器実測図	45
第32図	S A 6・S A 7 出土土器実測図	46
第33図	S A 6 出土石器実測図	46
第34図	S A 9 実測図	47
第35図	S A 9 出土土器実測図	48
第36図	遺構外出土弥生土器実測図(1)	49
第37図	遺構外出土弥生土器実測図(2)	50
第38図	遺構外出土弥生土器実測図(3)	51
第39図	B 区出土弥生土器実測図	52
第40図	遺構外出土石器実測図	53
第41図	土坑実測図(2)	57
第42図	石器実測図(1)	59
第43図	石器実測図(2)	60
第44図	石器実測図(3)	61
第45図	石器実測図(4)	62
第46図	石器実測図(5)	63
第47図	石器分類図	64

表 目 次

集石遺構一覧表	11
縄文土器觀察表	27~32
住居址一覧表	47
弥生土器觀察表	54~56
付論	
内野々遺跡出土炭化物の識別 (松谷曉子)	82

第Ⅰ章 はじめに

第1節 調査に至る経緯

内野々遺跡は、宮崎県東臼杵郡西郷村大字内野々に所在する。

この地は、以前より縄文時代から古墳時代にかけての遺物の散布が知られていた。平成元年7月、県林業試験場の建設計画に伴い、県林業振興課長より県文化課に埋蔵文化財の有無の照会があった。同年8月、現地踏査を行った結果、建設予定地内に縄文時代及び弥生時代から古墳時代の遺跡の所在が確認され、建設により遺跡に影響が及ぶことが予想された。そこで、文化課と林業振興課、宮崎県土地開発公社による協議を行い、施工上現状保存が困難な部分について記録保存のため発掘調査を行うことになった。

調査は、宮崎県土地開発公社の依頼により、宮崎県教育委員会が主体となり、平成2年3月7日より同年8月7日までの間実施した。

第2節 調査の組織

内野々遺跡の調査組織は次の通りである。

調査主体 宮崎県教育委員会

教育長 児玉郁夫

文化課長 久徳東雄（平成元年度）

梨岡孝（平成2年度）

課長補佐 片野坂次彥

埋蔵文化財係長 岩永哲夫

庶務係長 小倉茂

調査担当 宍戸章（平成元年度）

東憲章（平成2年度）

調査協力 河瀬正利（広島大学文学部助教授）

松谷曉子（東京大学総合研究資料館） 面高哲郎

菅付和樹 谷口武範 長友郁子（文化課埋蔵文化財係）

小野信彦（北方町教育委員会） 黒木進 野田和美 杉尾肇子

杉尾愛恵 永峰まり子 金子悦子 藤崎順子 杉尾直子 稲元光恵

清水由紀子 芝元泰子

西郷村教育委員会 宮崎県土地開発公社

第3節 遺跡の環境

西郷村は宮崎県の北部、日向市から耳川沿いを遡る椎葉街道の中間点に位置し、周囲を珍神山、加子山、日陰山などの九州山地に属する標高700~900mの山々に囲まれている。山々の間を蛇行しながら東流する耳川と、その支流によって形成された河岸段丘と小規模な沖積地には、多くの遺跡の存在が知られている。

内野々遺跡は、耳川の支流である田代川の左岸、標高約116mの東向き緩斜面に位置する。遺跡と川との比高差は約15mである。遺跡周辺は、昭和30年代に栗園に造成されており、表土の移動にはかなりのものがあると思われるが、基本的地形は大きく変わらないものと考えられる。

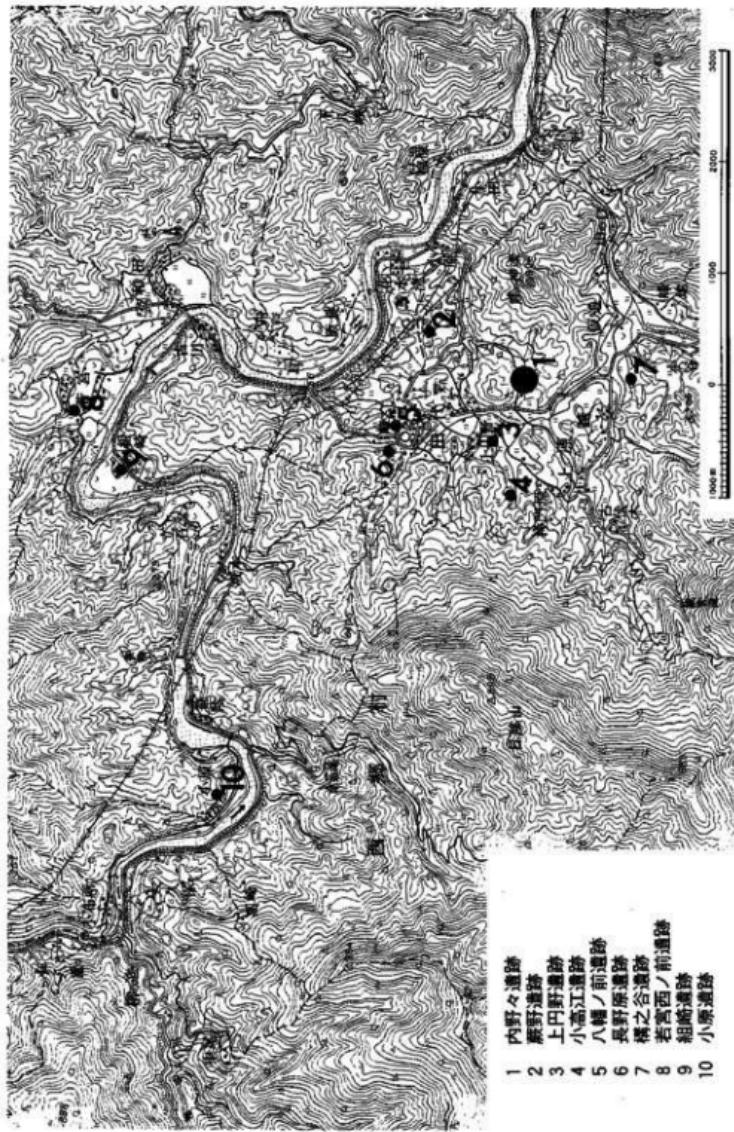
西郷村内には30余りの遺跡が確認されている。内野々遺跡と田代川を挟んで向い合う丘陵上には、上円野遺跡と小高江遺跡が所在する。上円野遺跡からは、吉田式・塞ノ神式・轟A式といった繩文時代早期の土器群や須恵器が、小高江遺跡では、須恵器が表採されている。内野々遺跡の北約1kmの丘陵上には、蕨野遺跡が所在する。この遺跡は、内野々遺跡と同じ繩文時代から古墳時代にかけての複合遺跡で、縦縫痕を有する押型文土器や格子目押型文土器、弥生時代後期の甕型土器や磨製石器など内野々遺跡に共通する遺物が見られる。そのほか繩文時代では、草創期の隆蒂文土器・前期の曾畠式土器・後晩期浅鉢・尖頭器・石匙等が見られる長野原遺跡、押型文土器・塞ノ神式土器・轟B式土器が見られる八幡ノ前遺跡・後晩期の浅鉢や組織痕土器・孔列文土器が見られる組崎遺跡・早期の貝殻条痕土器・後期の鐘崎式土器が見られる小原遺跡が知られる。弥生時代では、組崎遺跡・西ノ八峠遺跡・峰ノ前遺跡から石包丁が出土している。このうち峰ノ前遺跡のものは、掠り切り技法による穿孔が見られ注目される。古墳時代では、通称「鳥の巣塚」と呼ばれる県指定の西郷古墳がある。この古墳は径10mの円墳で、発掘された箱式石棺には鉄剣、直刀、鐵鎌等が副葬されていた。現状では一基のみ見られるが、付近から箱式石棺が発見されており数基が群をなすものと思われる。そのほか村内各地で土器器・須恵器等も表採されている。歴史時代では、上月野城（今城）・鳥の巣城・上野原城といった中世の山城が知られているほか、板碑が各地に点在している。

〔参考文献〕

『西郷村の文化財』2 1986 西郷村教育委員会



第1図 遺跡位置図

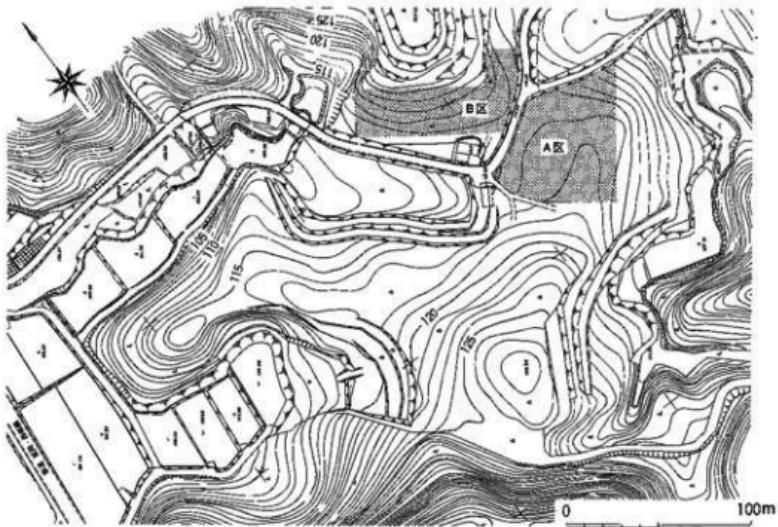


第Ⅱ章 調査の概要

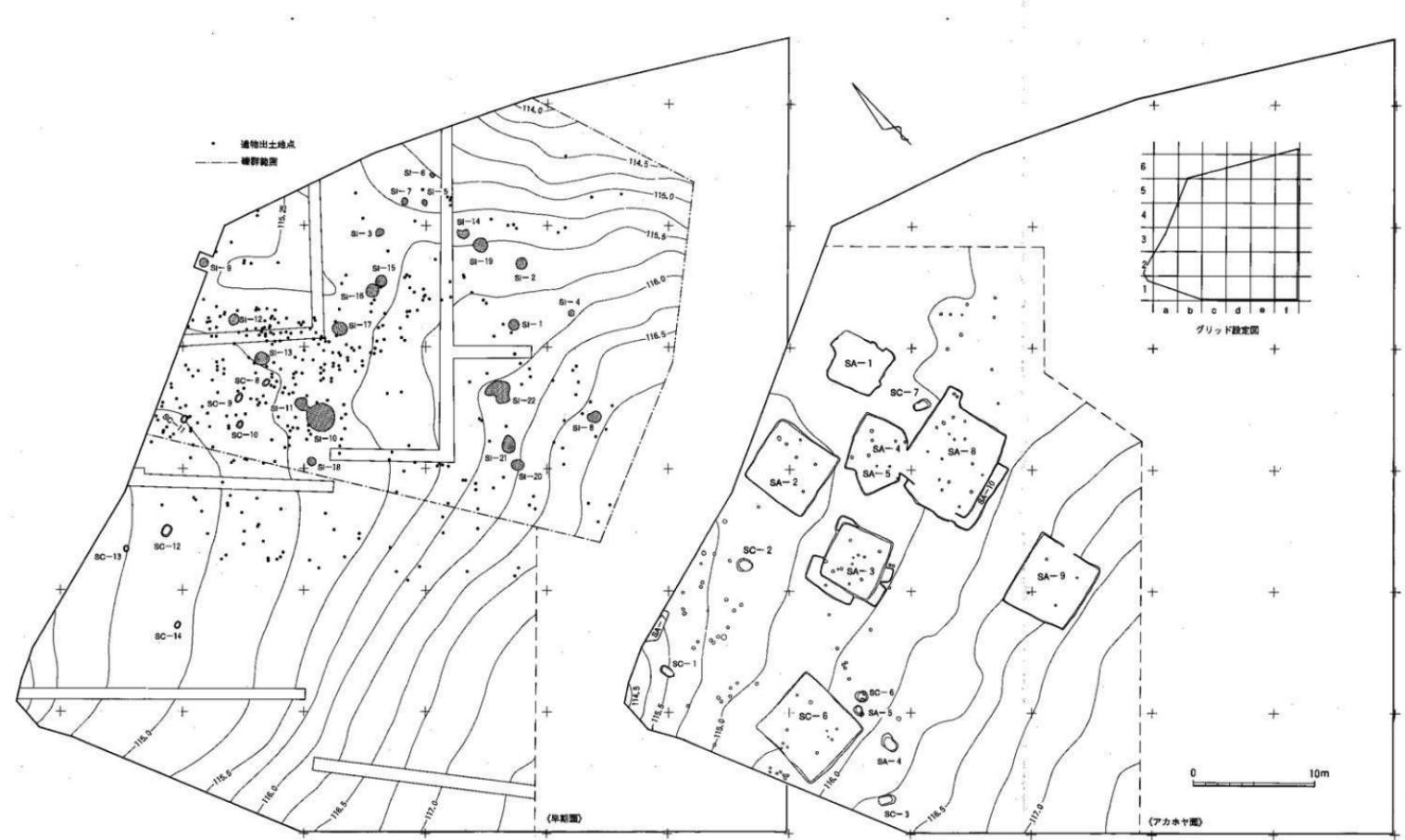
第1節 調査の経過

本調査は、事前の踏査で遺物の散布が見られたA区から開始した（第2図）。調査に先立ち、地形に沿って10mグリッドを設定し、アルファベットと整数で表示した。重機による表土の除去作業を行うと、比較的浅い部分から遺物の混入が見られたため極力浅く刻ぐに留めた。丘陵の尾根部付近は、表土下に灰白色粘土（地山）が現れ、調査範囲から除外した。表土の一部及び第II層（包含層）を掘り進めると、当初の予想どおり縄文時代前期からの各時期の土器や弥生土器、石鎌や石錐等の石器が出土した。縄文前期の森C・D式土器、中期の船元式土器、晩期の孔列文土器、石包丁、磨製石鎌等の出土は注目される。遺構の検出はアカホヤ上面で行い、アカホヤ層が見られず下層中の礫群が表出している部分については、並行して整査を行った。その結果、アカホヤ層上で弥生時代後期後半から終末期の堅穴住居址10軒、時期不明の土坑7基、僅かなピットを検出した。検出遺構の多くは、標高約115m～116mの比較的平坦な部分に集中している。

アカホヤ層上の調査が終了した時点で、B区及びC区（A区の南西側緩斜面・トレンチ調査）の表土剥ぎを行ったが、両区ともにアカホヤ層下まで擾乱を受けており遺構は確認されなかつた。栗園造成の際に擾乱されたものと思われる。遺物は、B区で磨製石斧、石錐、磨石、櫛撻波状文のある複合口縁壺などが見られたが、C区では僅かな土器小片が見られただけであった。



第2図 周辺地形図 (1/3,000)



第3図 遺構分布図 (1/300)

以後、調査はA区のみに絞り、アカホヤ層を除去し砾群の検出をおこなった。表土剥ぎの時点から一部表出していた砾群は、掘り下げるに伴い範囲を広げ、1,000m²以上にも及んだ。砾群内に集石造構23基（うち1基はA・B区間道路法面で確認）を、砾を除去した下層に土坑7基を検出した。砾群内には押型文土器や貝殻文円筒形土器、チャートや黒耀石の石錐・チップ等が散見された。

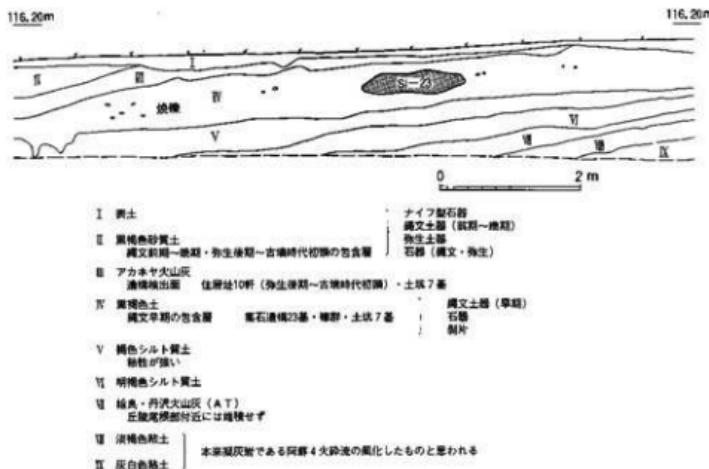
A区表土中よりナイフ型石器1点が出土している（第42図1）。チャート製で、横長削片の一側縁を加工し孤状の刃部に対し直線的な背部をなす。延岡市赤木遺跡第1文化層出土のナイフ型石器に類似するものが見られる。

砾群除去後、土層及び旧石器の確認のためトレンチを設定した。傾斜に沿って安定した土層堆積が見られたが、遺物の出土はなかった（第3図）。

第2節 層序

内野々遺跡の基本層序は、A・B区間道路法面で確認した（第4図）。

第Ⅱ層は、縄文時代前期から晩期、弥生時代後期から終末期の包含層であり、その厚みには位置的な偏りが見られたが、遺物の出土状況に明確なレベル差は認められない。第Ⅲ層のアカホヤ及び第Ⅳ層の船良・丹沢火山灰（AT）は、場所によって堆積が見られない部分もあり、傾斜地での堆積・二次的移動の様子を示している。第Ⅳ層で検出した砾群は、レベル幅約10cmで層の中程に見られ、集石造構はその同レベル及び下位で検出されている。



第4図 土層断面図（1/80）

第Ⅲ章 調査の記録

第1節 繩文時代の遺構と遺物

縄文時代の遺構としては、アカホヤ層下で集石遺構23基、土坑7基を検出した。時間的制約の中で、可能な限り実測を行ったが、S I 10・11は平面図のみ、S I 22は写真撮影のみ、S I 23は断面観察のみを行った。

遺物は、第Ⅱ層（包含層）より前期から晩期に至る各時期の土器、第Ⅳ層疊群内から早期の土器が出土し、石器は、石鏃・石錐・磨石・石皿・石錐・石匙・打製石斧・磨製石斧・スクレイバー・石核等がある。なお、石器については、遺構に伴うものが少なく時期を決定する要素に乏しいため、第3節の時期不明確な遺構と遺物の中でまとめてふれる。

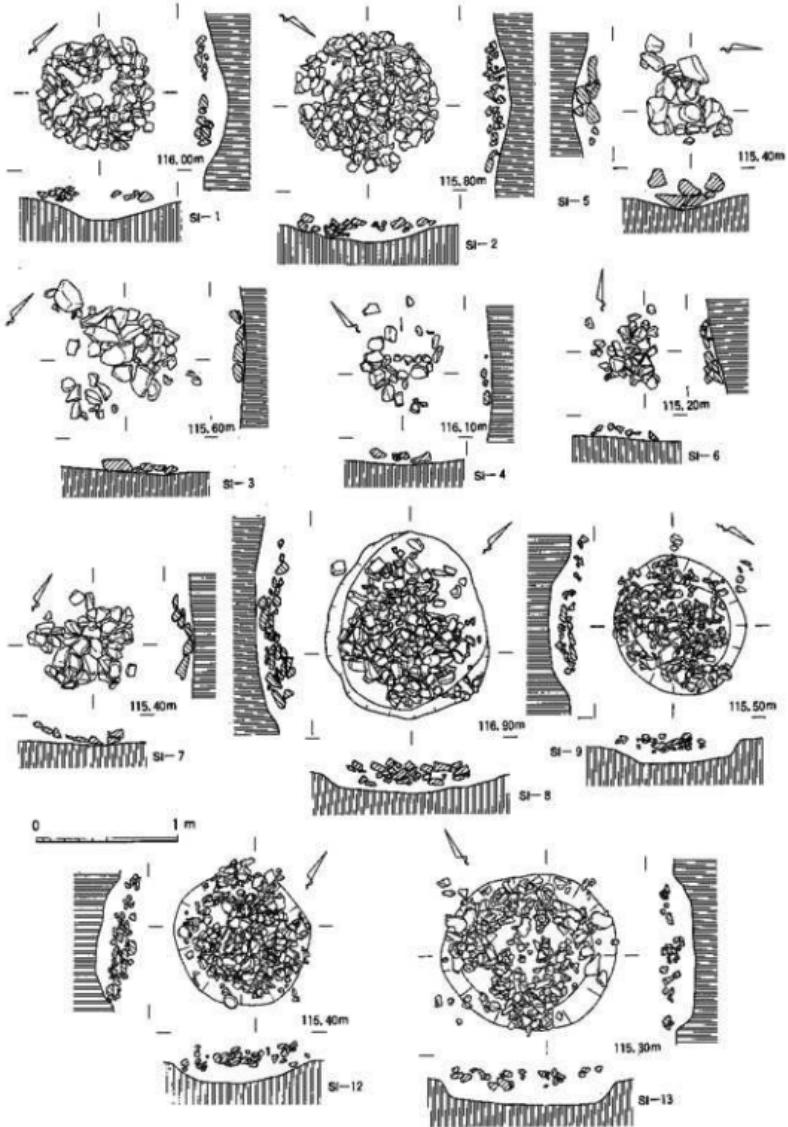
疊群及び集石遺構

表土剥ぎの時点から一部表出していた疊群は、第Ⅳ層を掘り下げるにしたがって範囲を広げ、1,000m²以上に及んだ。疊は、砂岩（河原石）・頁岩・チャート等が見られ、そのほとんどが焼けて赤変し脆くひび割れるものも多かった。疊群内からは、押型文・貝殻文・無文の土器類や石鏃・磨石・スクレイバー・剝片等の石器が出土した。

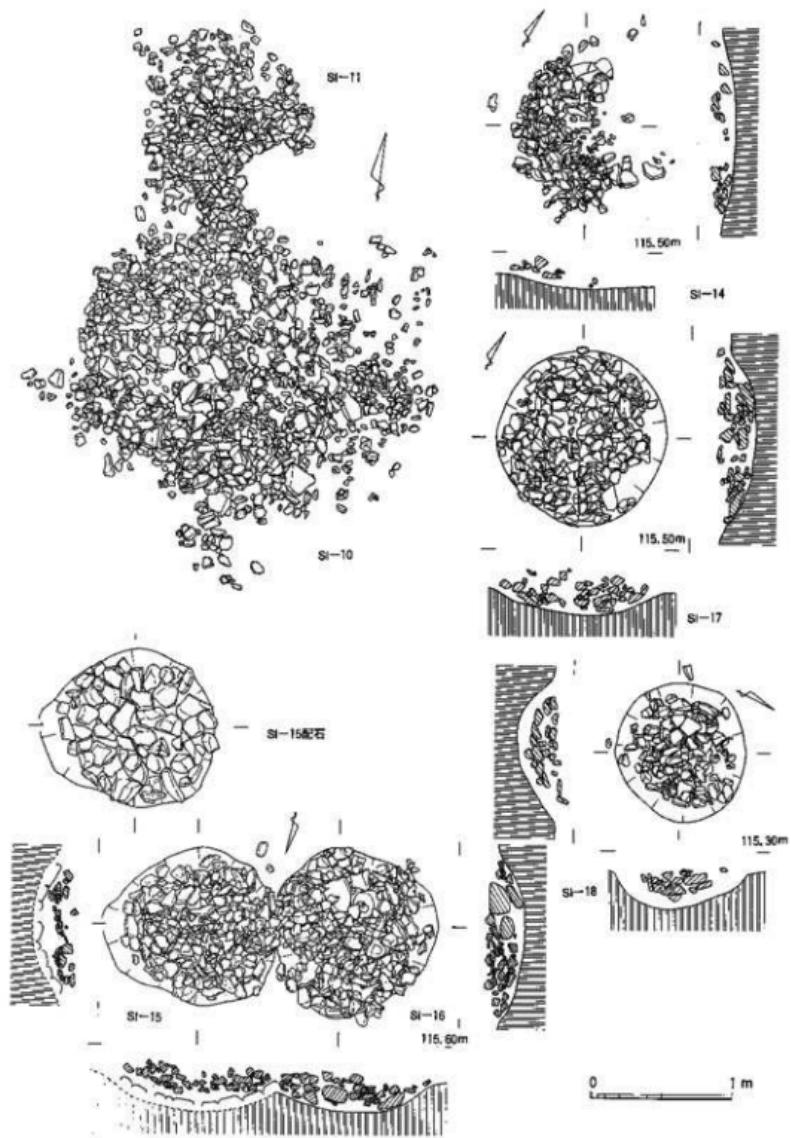
集石遺構は、疊群検出中に同レベルで検出されるものと、疊群を除去した後にその下層より検出されるものとが見られた。また、掘り込みと配石の有無で次のような形態的分類が可能である。掘り込み無し（I類）、掘り込み有り（II類）、配石無し（a類）、配石有り（b類）、部分的に配石有り（c類）。これらの組合せで、I a類・II b類の様に分類した。

S I 1～9・12・13（第5図）

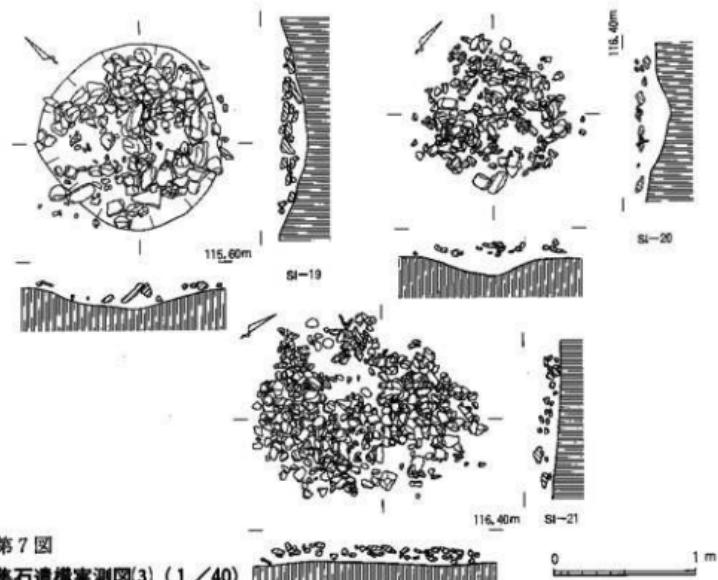
S I 1は、河原石を用い径80cmの正円形である。石は赤変し割れたものが多い。石間に炭化物が見られた。I a類であるが、石を取り除くと皿状のくぼみとなった。S I 2は、赤変したものが多い石に、タール状の黒色付着物が見られるものがあった。I a類。S I 3・4は、共にI a類であるが、大きめの石が平らに並んでおり遺構の配石のみが崩されずに残った可能性もある。S I 5は、殆どが大型の石でチャートの原石も見られた。I a類。S I 6は、I a類で黒色付着物が見られた。S I 7は、I a類であるが、S I 3・4と同じく大きめの河原石が面を揃えるように置かれており、それ自体配石である可能性が高い。中央部の石はほど赤変し脆くひび割れていた。S I 8は、集石遺構の中で最も尾根に近い位置に検出された。掘り込みを持ち、その底付近には多くの炭化物が見られた。赤変し角ばった石が多い。配石はない。II a類。S I 9は、5cm以下の小さく角ばった石が多く、皿状の掘り込みの底付近には炭化物が多く見られた。II a類。S I 12は、掘り込みを持ち、その底付近では特に炭化物が多く土と混じり漆黒となっていた。角ばった石が多く、黒色付着物も見られた。石間に貝殻腹縁刺突文を施す土器片が一点見られた。II a類。S I 13は、皿状の掘り込みをもつが石の密度は低く配石も見られない。石はかなり



第5図 集石造構実測図(1) (1/40)



第6図 集石構造実測図(2) (1/40)

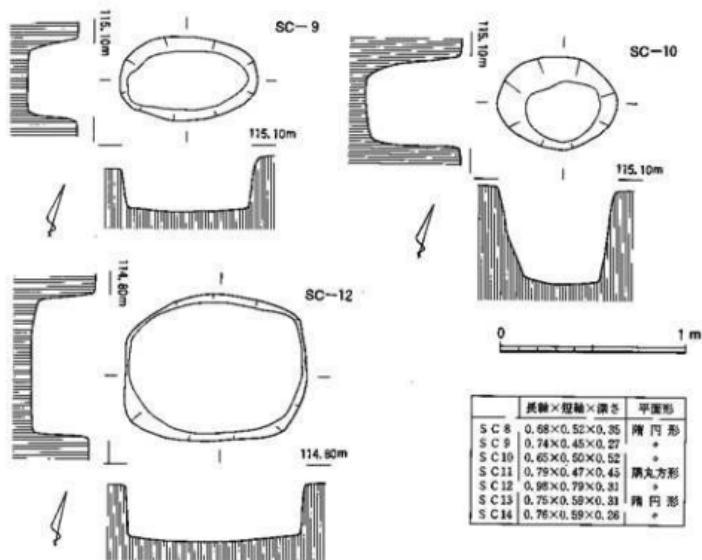


第7図

集石遺構実測図(3) (1/40)

内野々遺跡集石遺構一覧表

遺構番号	検出地点	規格(cm)		sondage	堆積の規模(cm)			配石 大きさ (cm)	分類	備考
		長径	短径		高さ	幅	深さ			
S I - 1	d - 5	83	81	5-20	×	-	-	-	Ⅰ a	炭化物多
2	c - 5	100	99	3-15	×	-	-	-	Ⅰ a	黒色付着物
3	c - 5	94	80	5-25	×	-	-	-	Ⅰ a	配石か?
4	c - 5	66	61	5-15	×	-	-	-	Ⅰ a	*
5	c - 6	62	60	10-25	×	-	-	-	Ⅰ a	*
6	d - 6	60	47	5-10	×	-	-	-	Ⅰ a	黒色付着物
7	c - 6	76	68	10-20	×	-	-	-	Ⅰ a	配石か?
8	c - 4	118	100	5-15	○	132	115	14	Ⅱ a	炭化物多
9	b - 5	105	86	3-15	○	101	90	15	Ⅱ a	*
10	c - 4	280	233	5-20	×	-	-	-	Ⅰ a	*
11	b - 4	130	120	5-15	×	-	-	-	Ⅰ a	*
12	b - 5	100	93	3-10	○	96	91	16	Ⅱ a	炭化物多・貝殻火土器
13	b - 4	123	110	5-15	○	123	109	17	Ⅱ a	炭化物多
14	d - 5	124	110	3-15	×	-	-	-	Ⅰ a	黒色付着物
15	c - 5	110	102	3-20	○	125	110	20	Ⅱ b	*
16	c - 5	120	110	3-20	○	120	115	18	Ⅱ c	*
17	c - 5	130	110	5-20	○	123	120	20	Ⅱ b	黒色付着物・炭化物多
18	c - 4	80	80	5-15	○	98	93	26	Ⅱ b	*
19	d - 5	130	127	5-20	○	131	128	18	Ⅱ c	*
20	d - 4	112	105	3-15	×	-	-	-	Ⅰ a	*
21	d - 4	166	128	5-10	×	-	-	-	Ⅰ a	炭化物多
22	d - 4	200	190	5-15	×	-	-	-	Ⅰ a	写真のみ
23	B区	147	-	5-15	×	-	-	-	Ⅰ a	断面観察のみ



第8図 土坑実測図(1) (1/30)

赤変しており、炭化物のまつよりも見られた。II a類。S I 1~9・12・13は、礫群と同レベルで検出された。

SI10・11・14~18 (第6図)

S I 10・11は、つながるように隣接して検出された。S I 10は、長径260cm・短径233cmで最も規模が大きい。石は平面的に広がっているが、赤変したものが多く炭化物や黒色付着物も見られた。石間に、貝殻文土器や石縫が見られた。石を除去すると浅いくぼみ状になったが、明確な掘り込みとは言いがたくI a類と思われる。S I 11は、10cm前後の大きさのはほそろった河原石を用いている。赤変した石は見られるが、割れたものは少ない。掘り込み・配石はない。I a類。S I 14は、割れて角ばった石が多く黒色付着物も見られる。I a類。S I 10・11・14は礫群と同レベルで検出している。S I 15・16は、つながるように隣接して検出された。S I 15は石の密度が高く、10~20cm大の石の間に5cm以下のものが入り込んでいる。掘り込みを持ち、比較的大きめの石で整然とした配石を持つ。(遺構は、配石を検出した状態で切り取り発砲ウレタンで梱包し埋蔵文化財センターに持ち帰った。) II b類。S I 16は、掘り込みを持ちS I 15とはほぼ同様なあり方を見せたが、中にひときわ大きな石(砂岩・チャート原石)を配していた。また、配石は中央部には無く遺構を囲むような形で円状に見られた。II c類。S I 17は、皿状の掘り込みを持

ち配石も有する。石間には炭化物が多く、黒色付着物も見られた。II b類。S I 18は、径80cmでやや小さめの遺構であるが、すり鉢状の掘り込みを持ち配石も見られる。II b類。S I 15~18は、礫群を除去した下層から検出された。

SI19~21 (第7図)

S I 19は、礫群を除去した下層から検出された。比較的大きめの河原石を用いており、赤変したものや黒色付着物のついた石が多い。炭化物も多く見られた。浅い皿状の掘り込みには、「コ」字形の配石も見られた。II c類。S I 20は、小さめの石が多く密度は低い。炭化物は多く見られた。平面的に広がる石を除去するとくぼみが見られたが、明確な掘り込みとは言いがたく配石も見られなかった。I a類。S I 21は、小さめの石が平面的に広がる。赤変は見られるが黒色付着物は見られない。掘り込み・配石はない。S I 20・21は礫群と同レベルで検出された。

S I 22は、礫群と同レベルで検出された。栗の木根により多少崩されているが、S I 10同様2m前後の大規模を持つ。赤変した石が平面的に広がる。I a類。S I 23は、土層確認のためA・B区間の道路法面を削った際に検出された(第4図)。断面観察のみのため詳細は不明であるが、掘り込みを持ち配石を持たないII a類である。

土坑 (第8図)

礫群を除去した第IV層最下部で7基の土坑を検出した。椭円形又は隅丸方形で、遺物を持たず埋土は明褐色粒(A T)を若干含む黒褐色土の単純層であった。性格は不明である。

土器 (第9~19図)

第IV層から早期、第II層から前期~晚期と各時期の土器が出土している。それらは全て小片での出土であり、また、出土レベルに大きな差違は認められなかったが、文様、形態などから分類が可能である。各時期、各類の特徴的なものを図化した。なお、個別の出土地、観察所見については観察表を作成した。参照されたい。

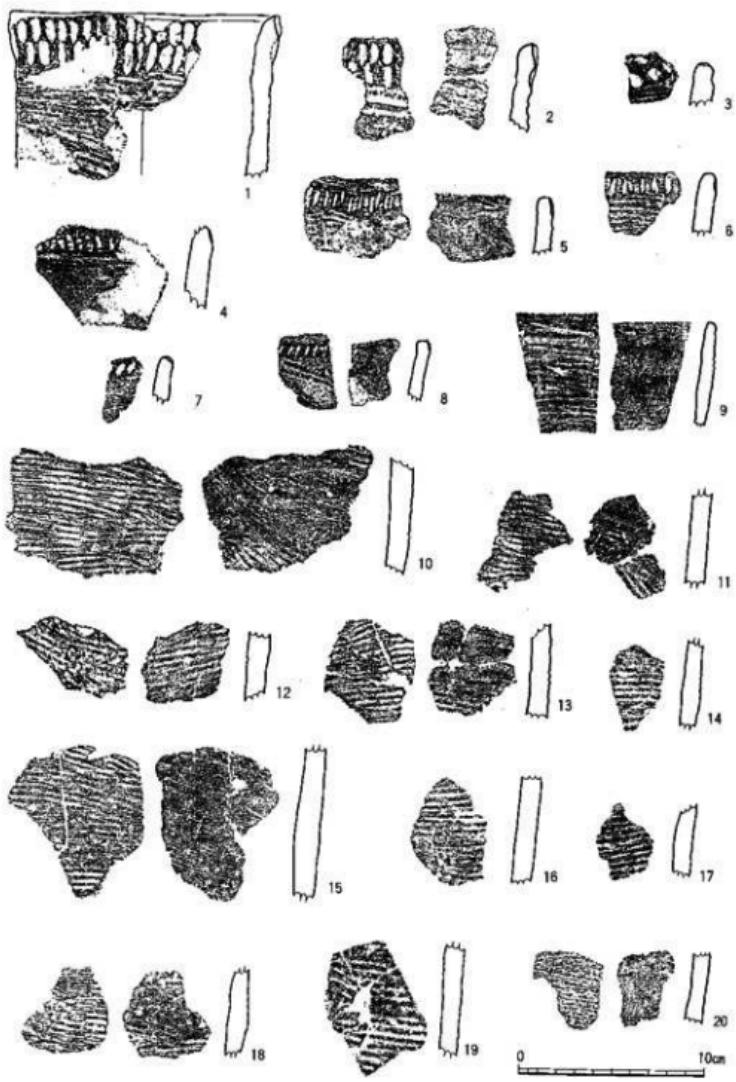
早期の土器

I類 (1~29)

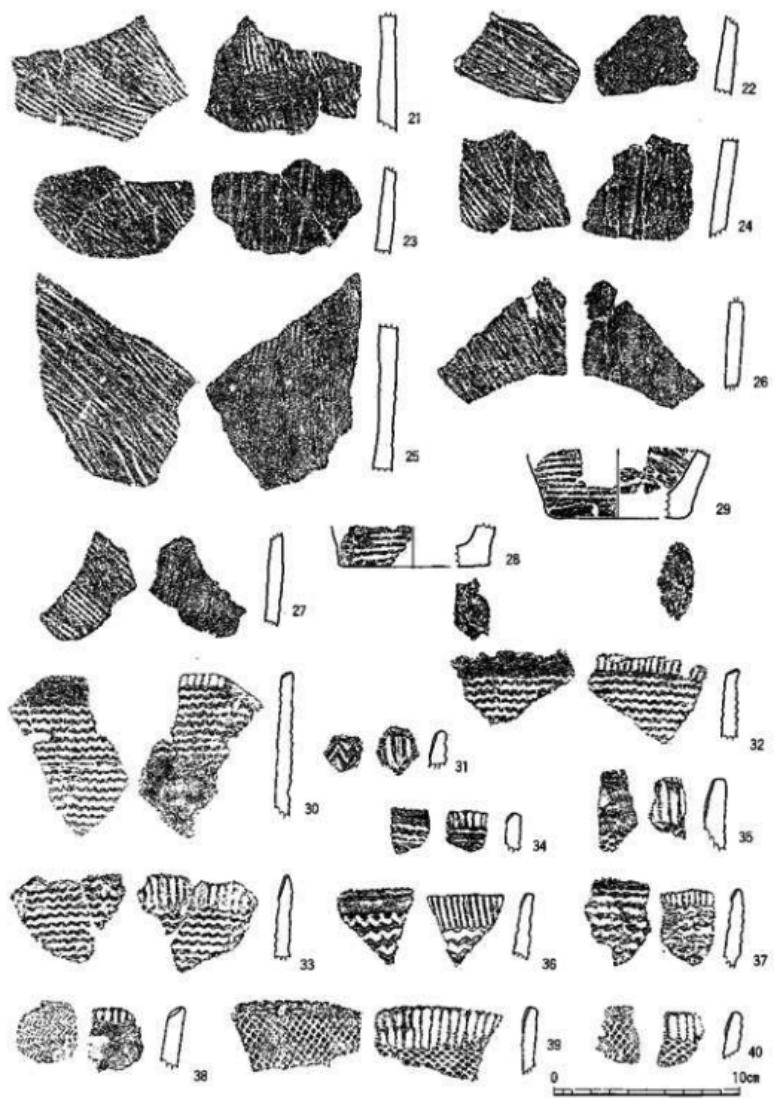
バケツ状の円筒形をなし、貝殻腹縁による条痕文を横あるいは斜め方向に施すものである。口縁部には一段あるいは二段の連続押圧文を施す。いわゆる「前平式土器」と思われる。内器面はナデまたは削りで、条痕文を残すものもある。

II類 (30~96)

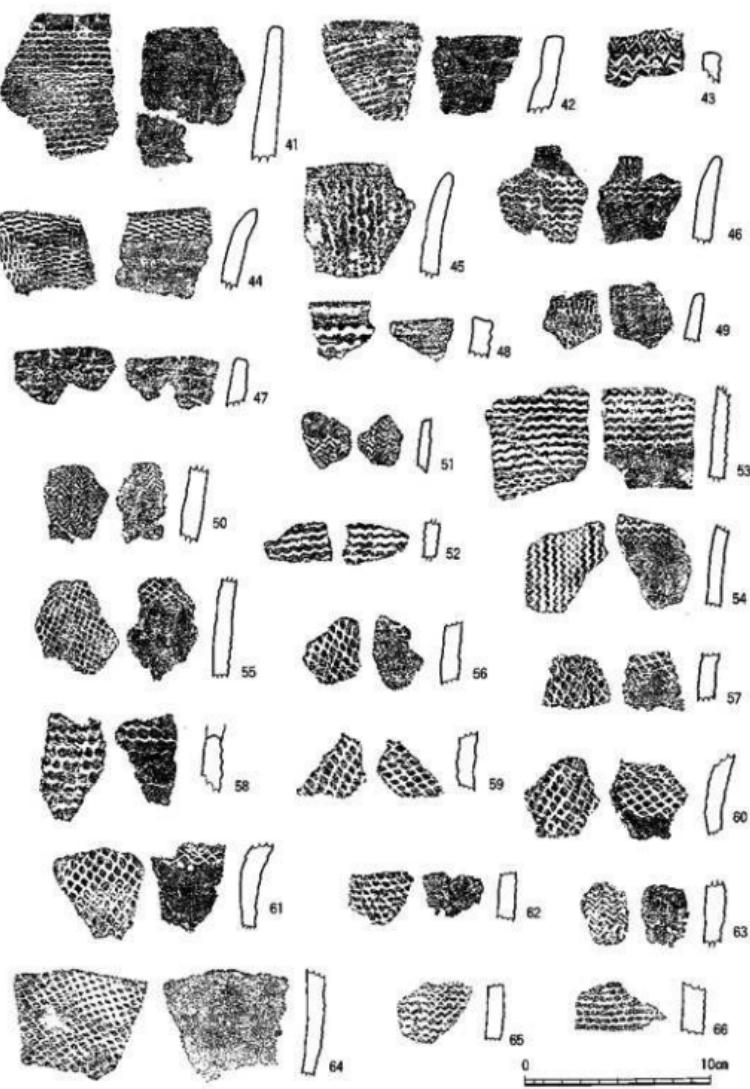
押型文を施すものである。山形、椭円、格子目が見られる。口縁部内面は原体条痕を施し、その下に押型文を持つもの(30~40)、ナデ調整だけのもの(41~43・47~49)、押型文だけのもの(44~46)が見られる。また、口唇部に押型文をもつもの(43)もある。一般に押型文土器は施文方向が横位から縦位へ、文様が細かいものから粗大なものへ変化し、口縁部は直立に近いものから外反するものへ変化するが、やや外反する口縁部に横位、縦位の押型文が混在するものが見



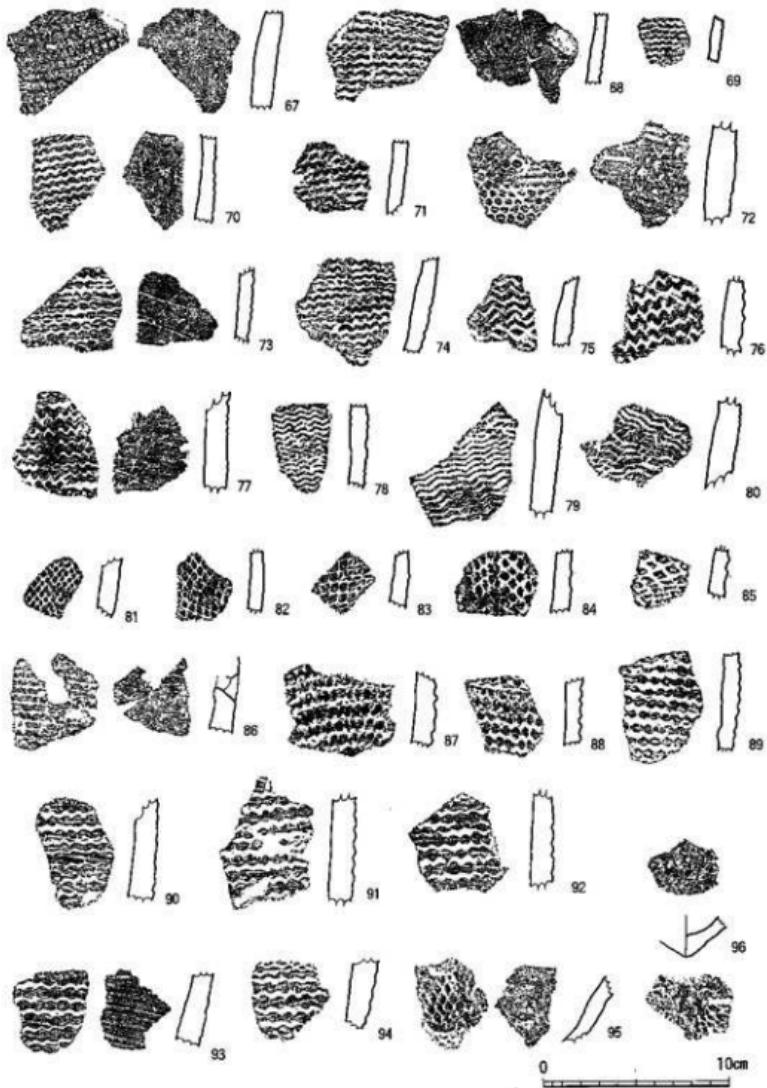
第9図 縄文土器実測図(1) (1/3)



第10図 縄文土器実測図(2) (1 / 3)



第11図 繩文土器実測図(3) (1/3)



第12図 桜文土器実測図(4) (1/3)

られた(44)。格子目押型文は1点のみ見られた(67)。底部は尖底である(95・96)。また、この類の土器には繊維痕を有するものが多く見られ注目される。

III類(97~102)

無文土器で、押型文土器に共伴するものである。穿孔が見られるものもある(97)。底部は尖底になると思われる(100・101)。102は一部に沈線と爪による刻みが見られるがとりあえずこの類に入れておく。II類同様繊維痕を有するものが見られた。

IV類(103~134)

貝殻文系の土器群である。器形は円筒形をなす。いわゆる「吉田式土器」の影響を持つ押し引き文を持つもの(103~105・109~112・114)が見られる。また、ロッキングの見られるもの(115~117)や、貝殻腹縁刺突により綾杉文を施すもの(118~127)、貝殻腹縁刺突文とヘラ状工具による綾杉文を施すもの(128~130)も見られ、これらはいわゆる「下剥峰式土器」と思われる。

前期の土器

V類(135~188)

地文にケシ状工具または貝殻状の工具による縦位の細線文を持ち、その上に2本単位の沈線を横位あるいは波状に施すもので、いわゆる「森C・D式土器」と呼ばれるものである。直口あるいはやや外反する口縁部には、その内面にも沈線を施すものもある。口唇部に刻みあるいは刺突文を持つ(135~146)。また、口縁部内側や脇部に刺突文を持つものも見られる(144~146・157~160)。底部は丸底になる(187~188)。

中期の土器

VI類(189~197)

地文に纏文を持ち、刻目突帯を貼り付けるもので、器形は口縁部が内湾するキャリバー状をなす。口縁部内面にも纏文が施される。「船元II式土器」にあたると思われる。口唇部に刺突文を持つもの(189)、若干肥厚した口唇部に爪形状の刻みを施すもの(192~195)が見られる。

後・晩期の土器

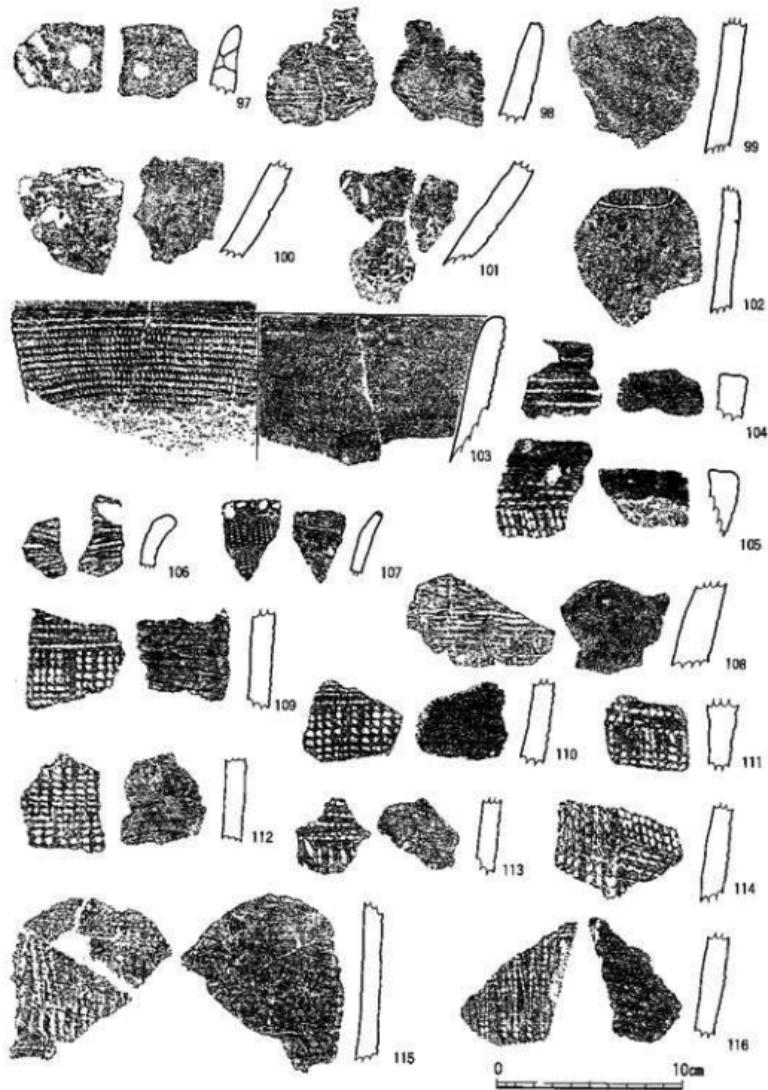
後期・晩期の土器については、一部の特徴的なものを除いては明確な時期区分が困難であり、形式についても確立されているとは言いがたい。ここでは後・晩期としてまとめて取り扱う。

VII類(198)

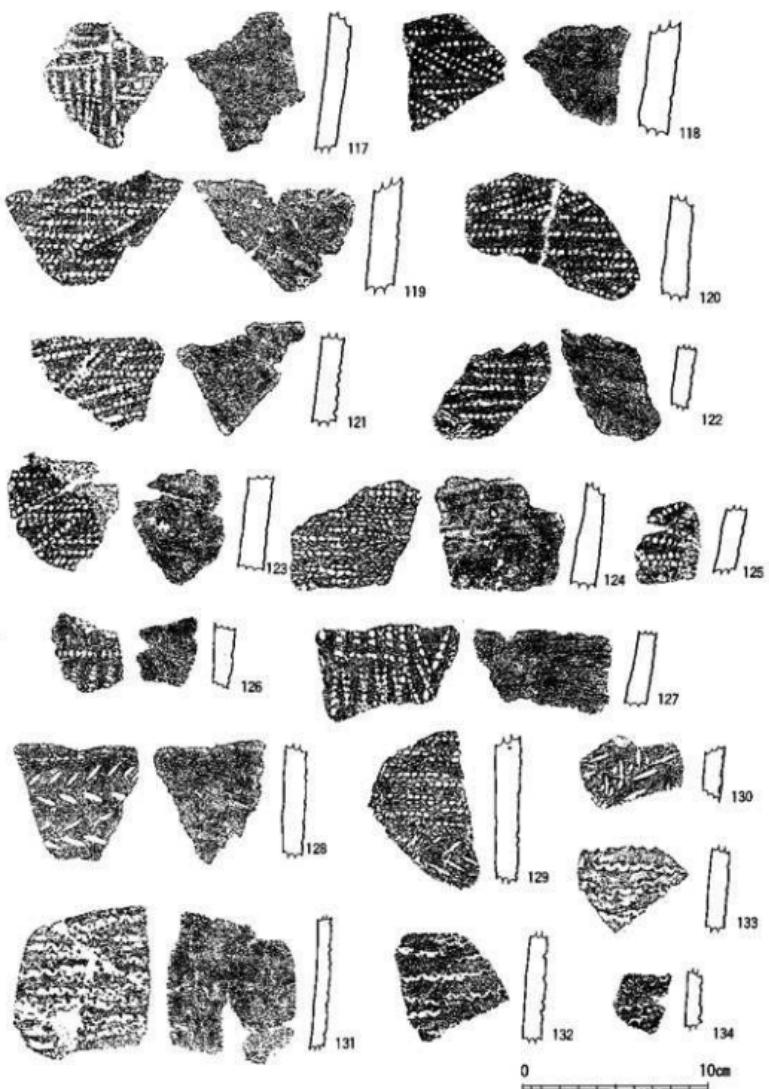
一点のみの出土であるが、屈曲した頸部に連続刺突文が見られ、その下に3本の横沈線が走り縫間には磨消纏文が地文として施されている。いわゆる「西平式土器」と思われ、器形は球形の胴部と明瞭に屈曲した頸部、口縁部は幅広の波状口縁が多く見られる。

VIII類(199~201)

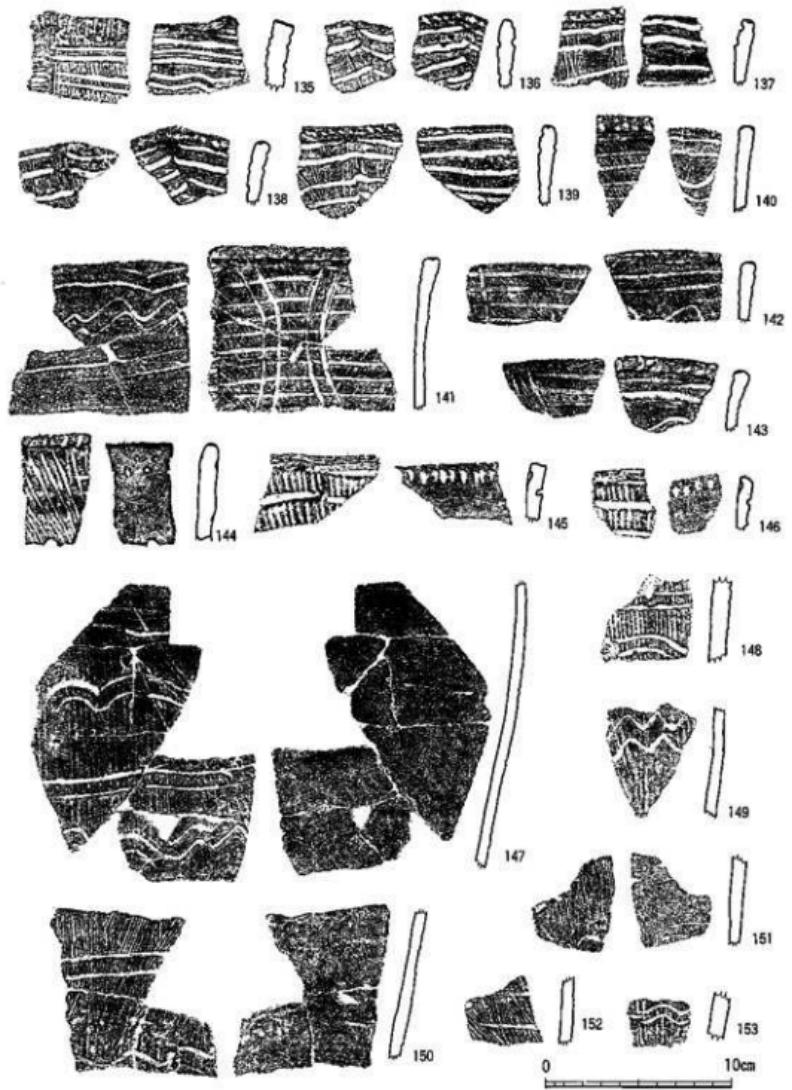
口縁部内面の横沈線以外は無文で、外傾する素口縁はナデ調整である。いわゆる「三万田式土器」と思われる。



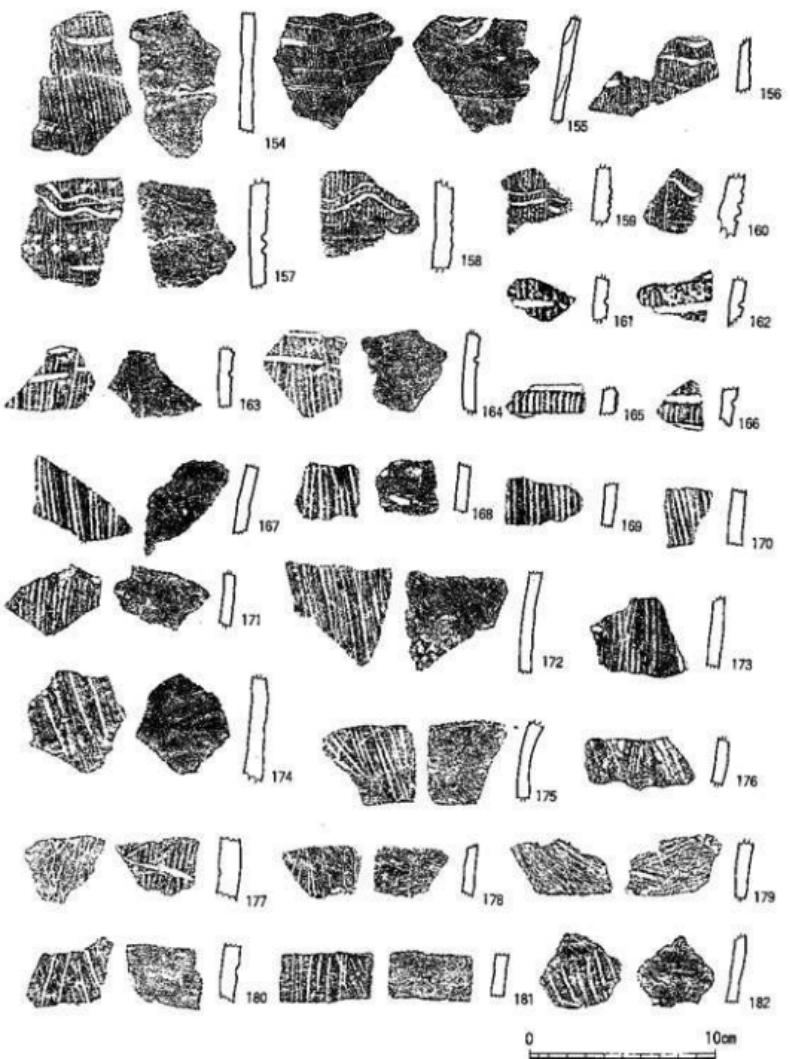
第13図 繩文土器実測図(5) (1/3)



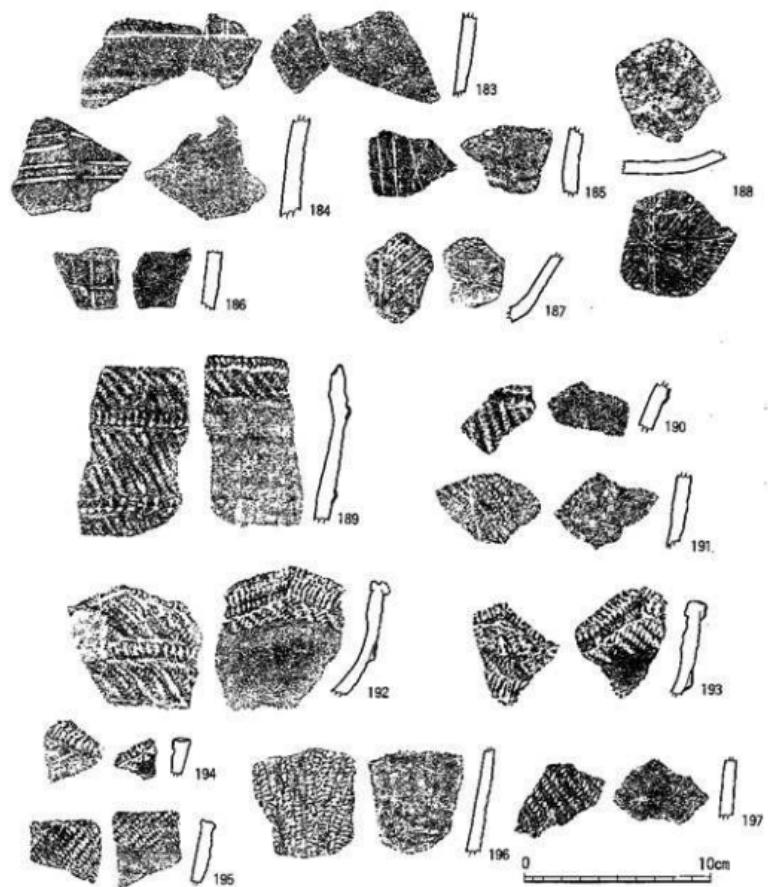
第14図 繩文土器実測図(6) (1 / 3)



第15図 繩文土器実測図(7) (1／3)



第16図 繩文土器実測図(8) (1/3)



第17図 縄文土器実測図(9) (1/3)

IX類 (202~218)

粗製深鉢形土器の中で口縁部を一括した。形態・手法によって細分した。

a類 口唇部に棒状工具による押圧刻みがあるもの (202)。

b類 素口縁で無文のもの (203・204)。

c類 具殻条痕と沈線が施されるもの (205)。

- d 類 口縁外部を肥厚させた口縁帯を持つもの (206~209)。
- e 類 突帯を持つもの (210~218)。刻目をもつものは見られず、刻目突帯出現の前段階であろうと思われる。この中には突帯下に孔列文が見られるもの (212~214) もあり、さらに分類も可能である。

X 類 (219~221)

組織痕を有するもので、型造り成形されたものである。外器面に継あるいは横方向に連なる組織痕が認められ、内器面は丁寧なナデ調整である。

X I 類 (222~226・230)

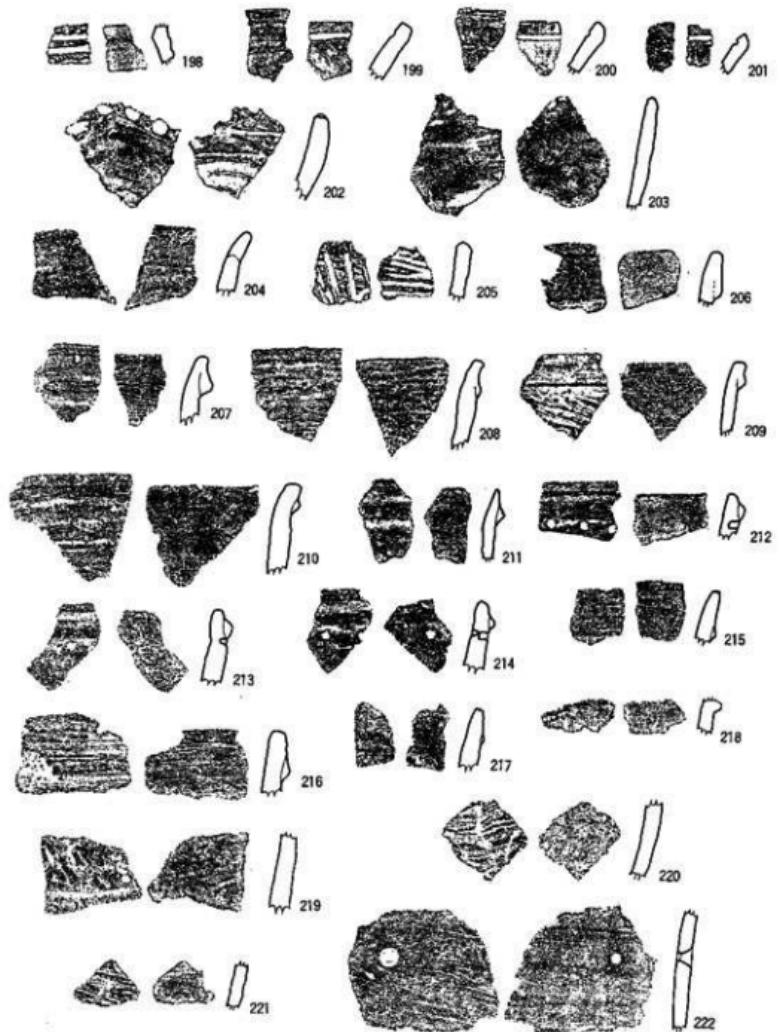
口縁部以外の粗製土器を一括した。222には外面からの穿孔がみられる。

X II 類 (231・232)

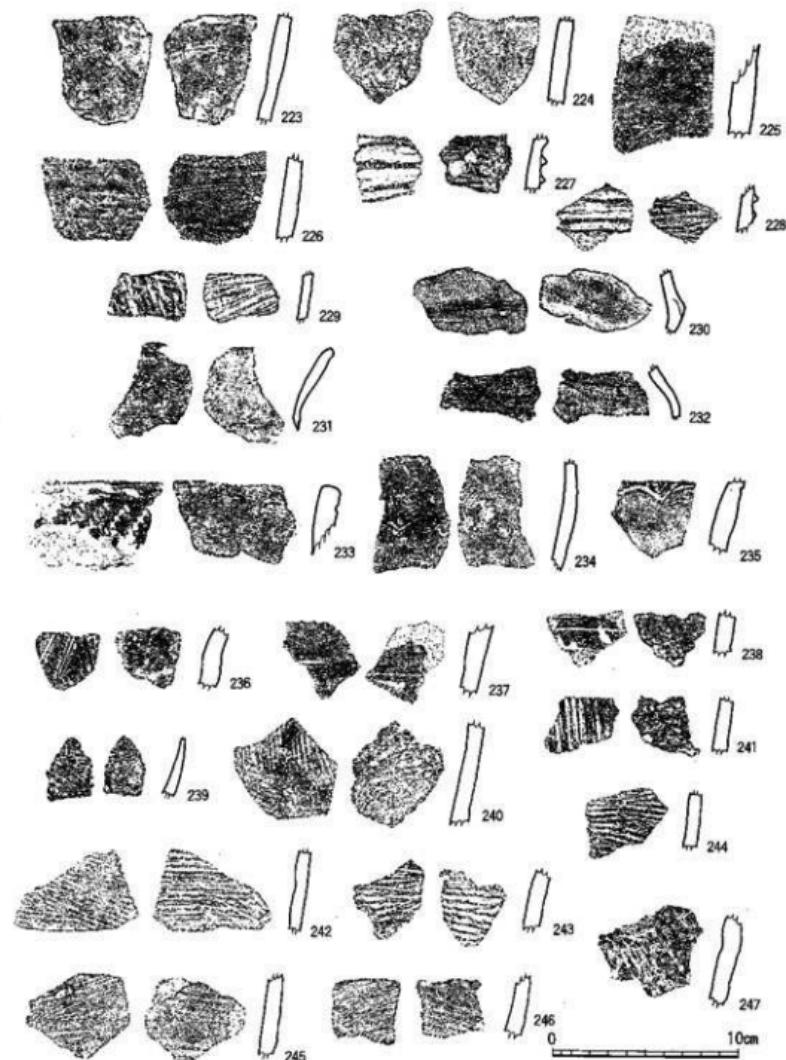
精製磨研土器である。いずれも浅鉢形と思われる。器壁を薄く仕上げている。

時期不明の土器

これまでに分類したもの以外に時期の判別が困難なものが数点見られた。227・228は2条あるいは3条の突帯を持つ。器面は粗いナデ調整である。233は比較的厚手の口縁部外面に巻き貝による押圧文がみられる。器面はナデ調整で、胎土に黒く光る長方形の粒を多く含む。234・235はミガキ、ナデ調整の器面に波状の沈線文が施される。236は放射状の沈線が見られる。239は薄手の作りでハケ目調整、ススが厚く付着する。240~247は比較的薄手の作りで貝殻条痕が施される。



第18図 繩文土器実測図(10) (1 / 3)



第19図 繩文土器実測図(1) (1 / 3)

縄文土器観察表(1)

図番号	出 土 地 区	文 様 及 び 形 態	外 面	内 面	色 調	地 土 の 特 徴	備 考
1	b - 3 b - 4	連續押印文、貝殻条痕文(横)	横ナデ、貝殻条痕文	にぶい 黒 緑	にぶい 黒 緑	0.5mmの黑色で光る砂粒 3~5mmの小塊	
2	b - 4 e - 5	連續押印文、貝殻条痕文(横)	横ナデ、貝殻条痕文	にぶい 黒 緑	にぶい 黒 緑	0.5~2mmの砂粒	
3	b - 4	押印文、連續押印文、貝殻条痕文(横)	貝殻条痕文	灰 白	灰 白	0.5~3mmの砂粒多	
4	e - 6	貝殻条痕押印文、貝殻条痕文(横)	横ナデ	明赤褐	明赤褐	0.5~4mmの砂粒、黒 色で光る砂粒	
5	c - 4	横ナデ、貝殻条痕文(横)、貝殻条痕押印文、 えぐ付痕	ナデ	灰 白	にぶい 黒 緑	にぶい 黒 緑	2~3mmの砂粒
6	a - 4	横ナデ、荒文(底)、貝殻条痕文(横)	横ナデ	にぶい 黒 緑	にぶい 黒 緑	1~2mmの砂粒 3~4mmの砂粒	
7	b - 5	ナデ、連續押印文、横ナデ	貝殻条痕文のあとナデ	暗赤褐	黒 緑	0.2~2mmの砂粒、黒 色で光る砂粒	
8	d - 5	横ナデ、連續押印文、貝殻条痕文(斜)	横ナデ	にぶい 黒 緑	明 褐	0.2~1mmの砂粒	
9	b - 3	ナデ、貝殻条痕文(横)	ナデ	赤	明黄褐	0.5~2mmの砂粒、黒 色で光る砂粒	織錦痕
10	b - 4	貝殻条痕文(横)、斜	貝殻条痕文のあとナデ	棕	棕	1mmの黑色で光る砂粒 2~6mmの砂粒	織錦痕
11		貝殻条痕文(横)	貝殻条痕文のあとナデ	棕	棕	1~5mmの砂粒	
12	b - 4	貝殻条痕文(横)	貝殻条痕文	明赤褐	明 褐	1~6mmの砂粒	
13		貝殻条痕文(横)	貝殻条痕文	棕	棕	1mm以下の黑色で光る砂粒 2~5mmの砂粒	
14	b - 4	貝殻条痕文(横)	横ナデ	明赤褐	にぶい 黒 緑	0.3~1mmの砂粒	
15	b - 5	貝殻条痕文(横)	貝殻条痕文のあとナデ	棕	棕	1mmの黑色で光る砂粒 2~6mmの砂粒	織錦痕
16	b - 4	貝殻条痕文(横)	貝殻条痕文のあとナデ、 炭化物付痕	棕	暗赤褐	0.5~2mmの砂粒	織錦痕
17	a - 3	貝殻条痕文(横)	ナデ	明赤褐	暗赤褐	0.5~3mmの砂粒	織錦痕
18	b - 3 d - 3	貝殻条痕文(横)	貝殻条痕文のあとナデ	にぶい 黒 緑	にぶい 黒 緑	2mmの砂粒	
19	a - 4	貝殻条痕文(斜)	ナデ	棕	にぶい 黒 緑	0.3~1.5mmの砂粒	
20	b - 4	貝殻条痕文(横)	ナデ	棕	にぶい 黒 緑	0.3~1.5mmの砂粒	
21	c - 5	貝殻条痕文(斜)スス付痕	貝殻条痕文のあとナデ	にぶい 黒 緑	黒	0.5~4mmの砂粒、黒 色で光る砂粒	
22	b - 3	貝殻条痕文(斜)	ナデ	にぶい 黒 緑	にぶい 黒 緑	0.3~1.5mmの砂粒	
23	b - 3	貝殻条痕文(斜)	貝殻条痕文のあとナデ	棕	にぶい 黒 緑	0.3~1mmの砂粒	
24	b - 3	貝殻条痕文(斜)	貝殻条痕文のあとナデ	にぶい 黒 緑	淡黄褐	0.2~1mmの砂粒	
25	b - 3	貝殻条痕文(斜)スス付痕	貝殻条痕文のあとナデ	明黄褐	にぶい 黒 緑	0.5~3mmの砂粒、黒 色で光る砂粒	織錦痕
26	b - 3	貝殻条痕文(斜)	貝殻条痕文のあとナデ	にぶい 黒 緑	黒 褐	1mm以下の砂粒	
27	b - 3	貝殻条痕文(斜)	ナデ	にぶい 黒 緑	黒 褐	2mm以下の砂粒	
28	b - 3	貝殻条痕文(横)ナデ	ナデ	明赤褐	にぶい 黒 緑	1mm以下の砂粒	
29	b - 5	貝殻条痕文(横)ナデ	貝殻条痕文	明赤褐	黒	1mm以下の砂粒	
30	d - 6	刻み、ナデ、山形押型文	山形押型文、ナデ	にぶい 黒 緑	黒 褐	0.5~3mmの砂粒、黒 色で光る砂粒	
31	S A 6	ナデ、山形押型文	原体条痕	にぶい 黒 緑	にぶい 黒 緑	1~2mmの砂粒	
32	c - 5	刻み、ナデ、山形押型文	山形押型文	にぶい 黒 緑	黒	0.5~4mmの砂粒、黒 色で光る砂粒	
33	d - 3 d - 4	ナデ、山形押型文	原体条痕、山形押型文	にぶい 黒 緑	黒	0.3~1mmの砂粒、黒 色で光る砂粒	織錦痕
34	b - 3	ナデ、椎円押型文	原体条痕、椎円押型文	にぶい 黒 緑	黒	0.5~4mmの砂粒	
35		ナデ、椎円押型文	原体条痕、椎円押型文	淡黄褐	淡黄褐	2mm以下の砂粒	
36		横ナデ、山形押型文	原体条痕、山形押型文	にぶい 黒 緑	明赤褐	1mm以下の砂粒、黒色 で光る砂粒	
37	a - 4	椎円押型文	原体条痕、椎円押型文	灰 赤	暗赤褐	0.5~5mmの砂粒多	
38	b - 5	山形押型文	原体条痕、ナデ	明赤褐	にぶい 黒 緑	1mm以下の砂粒	
39	a - 4	椎円押型文	原体条痕、椎円押型文	にぶい 黒 緑	黒 褐	0.5~2.5mmの砂粒、黒 色で光る砂粒	
40		ナデ、椎円押型文	原体条痕、椎円押型文	にぶい 黒 緑	にぶい 黒 緑	3mm以下の砂粒、黒色 で光る砂粒	
41	c - 4	ナデ、椎円押型文	ナデ	にぶい 黒 緑	にぶい 黒 緑	0.5~8mmの砂粒多	織錦痕
42	b - 4	ナデ、山形押型文	ナデ	暗 褐	灰 褐	1~3mmの砂粒、黒色 で光る砂粒	

縄文土器観察表(2)

国番号	出 土 地 区	文 様 及 び	調 査			色 調	動 土 の 特 徴	備 考
			外 面	内 面	外 面			
43	b-5	山形押型文、スヌ村窓	ナデ		にぶい 質 感	明赤褐色	0.5mm以下の砂粒、黒色で光る砂粒	
44	a-3	横円押型文	ナデ、横円押型文、黒底		にぶい 質 感	1~2mmの砂粒、黒色で光る砂粒		
45		ナデ、縦円押型文	山形押型文、ナデ	灰 褐	にぶい 質 感	明黄褐色	0.5~2.5mmの砂粒	
46	a-4	ナデ、山形押型文	山形押型文、ナデ	明赤褐色	重 厚 感	0.5~6mmの砂粒		
47	b-5	横円押型文	ナデ	明赤褐色	重 厚 感	0.5~6mmの砂粒		
48	c-4 S-10	ナデ、縦円押型文、黒底	赤底のあとナデ	被 覆	にぶい 質 感	2mm以下の砂粒		
49		ナデ、横円押型文	ナデ	灰 褐 感	にぶい 質 感	2mm以下の砂粒、黒色で光る砂粒		
50	b-3	山形押型文	山形押型文、横ナデ	にぶい 質 感 朱 色	にぶい 質 感	3mm以下の砂粒		
51	b-4	ナデ、山形押型文	ナデ、山形押型文	別赤褐色	明赤褐色	1~4mmの砂粒		鐵錆痕
52	b-4	山形押型文	山形押型文	にぶい 質 感	橙	1~3mmの砂粒、黒色で光る砂粒		
53	d-3	山形押型文	山形押型文、ナデ	にぶい 質 感	0.5~1.5mmの砂粒、黒色で光る砂粒			鐵錆痕
54	b-4	山形押型文	山形押型文、横ナデ	にぶい 質 感	橙	0.5~1.5mmの砂粒、黒色で光る砂粒		
55	c-5	横円押型文	横円押型文、ナデ	にぶい 質 感	黒 褐	1~3mmの砂粒、黒色で光る砂粒		
56	d-5	横円押型文	横円押型文、ナデ	にぶい 質 感	0.5~2mmの砂粒、黒色で光る砂粒			
57	c-5	横円押型文	横円押型文、ナデ	にぶい 質 感	0.5~2mmの砂粒、黒色で光る砂粒			
58		横円押型文、穿孔	横円押型文	にぶい 質 感	0.5~3mmの砂粒			
59	b-5	横円押型文	横円押型文	橙	にぶい 質 感	0.5~2mmの砂粒、黒色で光る砂粒		
60		横円押型文	横円押型文、ナデ	無	無	1mmの砂粒		
61	c-5	横円押型文	横円押型文、ナデ	にぶい 質 感 朱 色	0.5~5mmの砂粒、黒色で光る砂粒			
62	b-4	横円押型文	ナデ	明赤褐色	1~3mmの砂粒、黑色で光る砂粒			
63	b-5	山形押型文	ナデ	明赤褐色	1.5mm以下の砂粒			
64	b-4	横円押型文	ナデ	西 黄 青 白 底	にぶい 質 感	1~3mmの砂粒、黒色で光る砂粒		
65		山形押型文	ナデ	にぶい 質 感	1~3mmの砂粒、黒色で光る砂粒			
66		横円押型文	横ナデ	明赤褐色	にぶい 質 感	0.5~3mmの砂粒		
67	b-5	移子目文、黒底	ナデ、黒底	橙	にぶい 質 感	1~3mmの砂粒、黒色で光る砂粒		
68	c-3	山形押型文	横ナデ	橙	0.2~2mmの砂粒、黒色で光る砂粒			鐵錆痕
69	c-4	山形押型文	ナデ	橙	0.5~2mmの砂粒、黒色で光る砂粒			鐵錆痕
70	b-5	山形押型文	横ナデ	にぶい 質 感	0.3~2mmの砂粒、黒色で光る砂粒			鐵錆痕
71	d-4	山形押型文	ナデ	明赤褐色	1~3mmの砂粒、黒色で光る砂粒			鐵錆痕
72	b-5	横円押型文	横ナデ	橙	0.5mm以下の砂粒、黒色で光る砂粒			鐵錆痕
73	b-5	横円押型文	ナデ、炭化物付着	明赤褐色	黑 褐	0.5~5mmの砂粒		
74	c-4	山形押型文	ナデ	明赤褐色	にぶい 質 感 明赤褐色	0.5~5mmの砂粒		鐵錆痕
75	d-5	山形押型文	ナデ	明赤褐色	1~5mmの砂粒、黒色で光る砂粒			鐵錆痕
76	c-6	山形押型文	ナデ	にぶい 質 感	1~3mmの砂粒			
77	b-4	山形押型文	ナデ、桑痕のあとナデ	橙	にぶい 質 感	2mm以下の砂粒、黒色で光る砂粒		鐵錆痕
78	d-3	山形押型文	ナデ	にぶい 質 感	1~3mmの砂粒			
79	d-4	山形押型文	ナデ	橙	1~2mmの砂粒、黒色で光る砂粒			
80	e-4	山形押型文	横ナデ	橙	1~6mmの砂粒、黒色で光る砂粒			
81		横円押型文	ナデ	にぶい 質 感	1~3mmの砂粒			
82	b-5	横円押型文	ナデ	にぶい 質 感	0.5~2mmの砂粒、黒色で光る砂粒			
83		横円押型文	ナデ	橘 灰	1~2.5mmの砂粒、黒色で光る砂粒			
84	b-6	横円押型文	ナデ	橙	明赤褐色	0.5~7mmの砂粒		鐵錆痕

縄文土器観察表(3)

同番号	出土地区	文様及び	調査		色調	胎土の特徴	備考
			外 面	内 面			
85	c - 5	楕円押型文		ナデ	明赤褐色 にぶい 赤	0.5 - 3 mmの砂粒 赤色	
86	c - 4 S 110	楕円押型文、穿孔		横ナデ	にぶい 赤	0.5 - 3.5 mmの砂粒。黒 色で光る砂粒	
87	c - 4	楕円押型文		ナデ	にぶい 赤	3 - 6 mmの砂粒 赤色	継縫痕
88	b - 4	楕円押型文		ナデ	澄	明赤褐色 0.5 - 1.5 mmの砂粒	継縫痕
89	b - 5	楕円押型文		ナデ	澄	0.5 - 1.5 mmの砂粒	
90	b - 4	楕円押型文		ナデ	明褐色 黒	3 mm以下の砂粒 1 mm以下の砂粒、黑色 で光る砂粒	継縫痕
91	b - 4	山形押型文		条痕のあと横ナデ	澄 にぶい 赤	1 mm以下の砂粒、黑色 で光る砂粒	継縫痕
92	c - 3	楕円押型文		横ナデ	澄	にぶい 赤	0.5 - 1 mmの砂粒
93	b - 2	楕円押型文		貝殻条痕のあと横ナデ	明赤褐色 にぶい 赤	0.2 - 1 mmの砂粒 0.3 - 1.5 mmの砂粒 黒色で光る砂粒	
94	c - 4 S 110	楕円押型文		貝殻条痕	明赤褐色 黒	0.5 - 1.5 mmの砂粒、黒 色で光る砂粒	継縫痕
95	b - 5	楕円押型文		ナデ	浅黄褐色 黒	0.5 - 3 mmの砂粒、黒 色で光る砂粒	
96	b - 4	楕円押型文、ナデ		ナデ	橙	0.5 - 1.5 mmの砂粒、黒 色で光る砂粒	
97	b - 4	ナデ、穿孔		ナデ	にぶい 黄 澄	0.5 - 1.5 mmの砂粒、黒 色で光る砂粒	継縫痕
98	b - 5	条痕(横)のあとナデ		条痕のあとナデ	澄	2 mm以下の砂粒	
99	b - 4	ナデ		ナデ	澄	5 mm以下の砂粒	
100	c - 6	ナデ、スス付着		ナデ	にぶい 黄 澄	5 mm以下の砂粒	継縫痕
101	c - 5	ナデ、スス付着		ナデ	にぶい 黄 澄	2 mm以下の砂粒	継縫痕
102	b - 3	ナデ、沈棒、道筋刻印文、横ナデ		ナデ	灰 黄	にぶい 黄 澄	0.5 - 1.5 mmの砂粒、黒 色で光る砂粒
103	c - 4	横ナデ、貝殻腹縫による押し引き文		貝殻ナデ	にぶい 黄 澄	1 - 2 mmの砂粒、黑色 で光る砂粒	
104	b - 4	横ナデ、貝殻腹縫刻印文		横ナデ	にぶい 黄 澄	0.5 - 3 mmの砂粒、黒 色で光る砂粒、黒色	
105	d - 3	横ナデ、貝殻腹縫刻印文(横、縦)押し引き文		横ナデ	にぶい 黄 澄	1 - 2 mmの砂粒、黑色 で光る砂粒	
106	b - 5	貝殻腹縫刻印文(斜)、スス付着		貝殻条痕のあとナデ	澄	0.5 - 4 mm砂粒、黑色 で光る砂粒	
107		刻み(鉤)、貝殻腹縫刻印文(縦)スス付着		横ナデ	にぶい 黄 澄	1 - 3 mmの砂粒、黑色 で光る砂粒	
108	b - 5	貝殻条痕、刻突文		横ナデ	灰 褐 黄	0.5 - 3 mmの砂粒、黒 色で光る砂粒	
109	S A 2 (縦)	貝殻腹縫刻印文(横)貝殻腹縫押し引き文		ヘラミガキ	にぶい 黄 澄	0.5 - 3 mmの砂粒、雲母	
110	c - 5 (縦)	貝殻腹縫刻印文(横)貝殻腹縫押し引き文		横ナデ	にぶい 黄 澄	3 mm以下の砂粒	
111	c - 4 d - 3	貝殻腹縫刻印文(横)、押し引き文		ナデ	灰 褐 黄	1 - 2 mmの砂粒、雲母	
112		貝殻腹縫刻印文(横)押し引き文		ナデ	にぶい 黄 澄	0.5 - 3 mmの砂粒	
113	b - 4	貝殻腹縫刻印文(横、縦)		横ナデ	灰 褐 黄	1 - 2 mmの砂粒、雲母	
114	b - 5	貝殻腹縫刻印文(前、後)ナデ、押し引き文		ナデ	にぶい 黄 澄	0.5 - 2 mmの砂粒、黒 色で光る砂粒、黒色	
115	b - 5	貝殻腹縫刻印文(横)貝殻腹縫押し引き文(スス付着)		横ナデ	にぶい 黄 澄	0.5 - 3 mmの砂粒、黒 色で光る砂粒、黒色	
116	b - 3	貝殻腹縫刻印文(横)、ロッキング		横ナデ	にぶい 黄 澄	2 mm以下の砂粒	
117	b - 5	貝殻腹縫刻印文(ロッキング)道筋刻印文(斜)		ナデ、炭化物付着	にぶい 黄 澄	0.5 - 2.5 mmの砂粒、黒 色で光る砂粒	
118	b - 5	貝殻腹縫刻印文による波形文		横ナデ	にぶい 黄 澄	1 - 2 mmの砂粒、雲母	
119	c - 5	貝殻腹縫刻印文による波形文		横ナデ	にぶい 黄 澄	1 - 2 mmの砂粒、雲母	
120	b - 5 d - 3	貝殻腹縫刻印文による波形文		ナデ	にぶい 黄 澄	1 - 2 mmの砂粒、雲母	
121	b - 4	貝殻腹縫刻印文(横、斜)、波形文		ナデ	にぶい 黄 澄	1 mmの砂粒、雲母	
122	b - 5	波形文、貝殻腹縫刻印文(横)横波形文		ナデ	灰 褐 黄	0.5 - 3 mmの砂粒、雲母	
123		貝殻腹縫刻印文(横)波形文		ナデ	にぶい 黄 澄	0.5 - 2 mmの砂粒、雲母	
124	c - 5	貝殻腹縫刻印文(横)、横波形文		ミガキ	灰 褐 黄	1 - 2 mmの砂粒、黒色 で光る砂粒、黒色	
125	b - 5	貝殻腹縫刻印文(横)、横波形文		ナデ	明赤褐色 赤	1 - 2 mmの砂粒	
126		ナデ、貝殻腹縫刻印文(横、縦)		ナデ	橙	0.5 - 3 mmの砂粒、黒 色で光る砂粒	

縄文土器観察表(4)

図番号	出 土 地 区	文 標 及 び 画 面	調 べ		色 調	地 特 徴	備 考
			内 面	外 面			
127	b - 5 S 112	貝紋複旋刻文(斜) 帯波文(斜) 縞波文	横ナデ	にぶい 面に波状	にぬい 場	0.5~5 mmの砂粒、黒 色で光る砂粒、黒色	
128	b - 3	貝紋複旋刻文(横) 縞波文	ナデ	程	灰黄褐色	1 mmの砂粒、黒色で光 る砂粒、黒色	
129	b - 5	貝紋複旋刻文(横) 縞波文	横ナデ、ナデ	程	にぶい 面	0.5~1.5 mmの砂粒、黒 色	
130	ナデ、延波縞文(横) 刺突文	ナデ	にぶい 面	明赤褐色	0.5~3 mmの砂粒		
131	貝紋複旋刻文(横)	ナデ	程	にぶい 面	1 mmの砂粒、黒色で光 る砂粒		
132	d - 4	貝紋複旋刻文(横)	ナデ	明赤褐色	灰黄褐色	0.5~1.5 mmの砂粒、黒 色で光る砂粒	
133		貝紋複旋刻文(横)	風化	にぶい 面	1~3 mmの砂粒、黑色		
134	b - 3	貝紋複旋刻文(横)	ナデ	にぶい 面	0.5~2 mmの砂粒、黒 色で光る砂粒		
135	刻み(斜) クシ状尖具による条痕(斜) のあと二本単位の波文(横) スズ付着	二本単位の沈縞文	黒	にぶい 面	1~3 mmの砂粒、黑色		
136	刻み(斜) クシ状尖具による条痕(斜) のあと二本単位の波文(横) スズ付着	二本単位の沈縞文	にぶい 面	灰 黑	0.2~1.5 mmの砂粒、黒 色で光る砂粒、黒色		
137	a - 2	透波刻文 クシ状尖具による条痕(斜) のあと二本単位の波文(横) スズ付着	二本単位の沈縞文	にぶい 面	1~3 mmの砂粒、黑色		
138	透波刻文 クシ状尖具による条痕(斜) のあと二本単位の波文(横) スズ付着	二本単位の沈縞文	にぶい 面	0.2~1.5 mmの砂粒、黒 色で光る砂粒、黑色			
139	透波刻文 クシ状尖具による条痕(斜) のあと二本単位の波文(横) スズ付着	二本単位の沈縞文	にぶい 面	0.2~1.5 mmの砂粒、黒 色で光る砂粒			
140	a - 2	刺突文 クシ状尖具による条痕(斜) のあと二本単位の波文(横) スズ付着	二本単位の沈縞文	程	にぶい 面	2 mm以下の砂粒、黑色	
141	a - 2	押注文 クシ状尖具による条痕(斜) のあと二本単位の波文(横) スズ付着	二本単位の沈縞文 条板	にぶい 面	2 mm以下の砂粒、黑色		
142		クシ状工具による条痕(斜) のあと二本単位の波文(横) スズ付着	二本単位の沈縞文	灰黄褐色	灰黄褐色	2 mm以下の砂粒、黑色	
143		クシ状工具による条痕(斜) のあと二本単位の波文(横) スズ付着	二本単位の沈縞文	灰黄褐色	2 mm以下の砂粒、黑色		
144		刻み(斜) 沈縞(横) 刺突 文字	透波刻文	灰黄褐色	2 mm以下の砂粒、黑色		
145	b - 4	タシ状工具による条痕(斜) のあと二本単位の波文(横) スズ付着	透波刻文、炭化物付着	にぶい 面	2 mm以下の砂粒、黑色		
146		タシ状工具による条痕(斜) のあと二本単位の波文(横) スズ付着	透波刻文	にぶい 面	2 mm以下の砂粒、黑色		
147	a - 2	タシ状工具による条痕(斜) のあと二本単位の波文(横) スズ付着	横ナデ、炭化物付着	にぶい 面	0.5~2 mmの砂粒、黒 色で光る砂粒		
148	c - 4 S C 7	タシ状工具による条痕(斜) のあと二本単位の波文(横) スズ付着	横ナデ、炭化物付着	にぶい 面	0.5~2 mmの砂粒、黑色		
149	a - 3	ナデ、条痕(横) 二本単位の沈縞文	ナデ、黒斑	灰 黑	2 mm以下の砂粒		
150	b - 3	タシ状工具による条痕(斜) のあと二本単位の波文(横) スズ付着	ナデ、横ナデ、炭化物付着	にぶい 面	0.3~2 mmの砂粒、黒 色で光る砂粒、黒色		
151		タシ状工具による条痕(斜) のあと二本単位の波文(横) スズ付着	ナデ	暗 黑	0.5~2 mmの砂粒、黒 色で光る砂粒		
152		タシ状工具による条痕(斜) のあと二本単位の波文(横) スズ付着	ナデ	黑 暗	1 mm以下の砂粒		
153		条痕(横) のあと二本単位の沈縞文(横)	ナデ	黑 暗	0.5~3 mmの砂粒、黒 色で光る砂粒		
154	a - 2	タシ状工具による条痕(横) のあと二本単位の波文(横) スズ付着	風化	にぶい 面	0.5~2 mmの砂粒、黒 色で光る砂粒		
155		タシ状工具による条痕(横) のあと二本単位の波文(横) スズ付着	沈縞、沈縞のあとナデ	明赤褐色	明赤褐色	0.5~2 mmの砂粒、黒 色	
156		タシ状工具による条痕(横) のあと二本単位の波文(横) スズ付着	ナデ	灰 暗	0.5~3 mmの砂粒、黒 色で光る砂粒		
157	S A 6	タシ状工具による条痕(横) のあと二本単位の波文(横) スズ付着	ナデ	暗 黑	1~3 mmの砂粒、黑色		
158	a - 1	タシ状工具による条痕(横) のあと二本単位の波文(横) 透波刻文(横)	横ナデ、炭化物付着	にぶい 面	1~4 mm以下の砂粒、黑色		
159		タシ状工具による条痕(横) のあと二本単位の波文(横) 透波刻文(横)	ナデ	にぶい 面	0 mmの砂粒、黑色		
160	c - 4 S C 7	タシ状工具による条痕(横) のあと二本単位の波文(横) 透波刻文(横)	風化	灰黄褐色	1~3 mmの砂粒、黑色		
161		タシ状工具による条痕(横) のあと二本単位の波文(横) 透波刻文(横)	ナデ	にぶい 面	2 mm以下の砂粒		
162	b - 4	タシ状工具による条痕(横) のあと二本単位の波文(横) 透波刻文(横)	ナデ	明 暗	1 mm以下の砂粒		
163	b - 4	タシ状工具による条痕(横) のあと二本単位の波文(横) 透波刻文(横) スズ付着	横ナデ	にぶい 面	2 mm以下の砂粒、黑色		
164	b - 4	タシ状工具による条痕(横) のあと二本単位の波文(横) 透波刻文(横) スズ付着	横ナデ	にぶい 面	2 mm以下の砂粒、黑色		
165		タシ状工具による条痕(横) のあと二本単位の波文(横) 透波刻文(横) スズ付着	ナデ	灰 暗	0.5~1 mmの砂粒		
166	b - 4	タシ状工具による条痕(横) のあと二本単位の波文(横) 透波刻文(横) スズ付着	ナデ	暗赤褐色	0.5 mmの砂粒		
167		タシ状工具による条痕(横)	横ナデ	程	にぶい 面	0.5~1 mmの砂粒	
168	a - 4	タシ状工具による条痕(横)	ナデ	にぶい 面	明赤褐色	0.5~3 mmの砂粒、黒 色で光る砂粒	

縄文土器觀察表(5)

国番号	出 土 地 区	文 様 及 び 圖 案	色 調			地 上 の 砂 粒	備 考	
			外 面	内 面	外 面	内 面		
169		クシ状工具による条痕(縫)、スス付着	ナデ	灰 褐色	灰 褐色	0.5~2 mmの砂粒		
170	S A 2	クシ状工具による条痕(縫)、スス付着	ナデ	灰 褐色	灰 褐色	0.5~2 mmの砂粒		
171	S A 4	クシ状工具による条痕(縫)、スス付着	横ナデ	に赤い 黄 褐色	に赤い 黄 褐色	2.5 mm以下の砂粒、黒 色で光る砂粒		
172		クシ状工具による条痕(縫)、スス付着	ナデ、炭化物付着	に赤い 黄 褐色	に赤い 黄 褐色	2.5 mm以下の砂粒、黒 色で光る砂粒		
173		クシ状工具による条痕(縫)、沈縄文(横) スス付着	ナデ	灰 褐色	灰 褐色	0.5~1 mmの砂粒		
174		クシ状工具による条痕(縫)、スス付着	ナデ、炭化物付着	に赤い 黄 褐色	に赤い 黄 褐色	1~2 mmの砂粒、黒色 で光る砂粒		
175		クシ状工具による条痕(縫)、スス付着	ナデ、炭化物付着	灰黄褐色	に赤い 黄 褐色	2 mm以下の砂粒、黒色 で光る砂粒		
176	S A 2	クシ状工具による条痕(縫)、スス付着	ナデ	灰黄褐色	に赤い 黄 褐色	2 mm以下の砂粒		
177	b - 3	条痕(縫)、沈縄文(縫) あると沈縄文	クシ状工具による条痕(縫)、沈縄文(横) あると沈縄文	に赤い 黄 褐色	に赤い 黄 褐色	3 mm以下の砂粒		
178		沈縄文(縫)、スス付着	ナデ	黑 褐色	明赤褐色	1~3 mmの砂粒		
179		クシ状工具による条痕(縫)のあと沈縄文(縫) スス付着	貝殻条痕(縫、横)、沈縄文(縫、縫)	に赤い 黄 褐色	灰 褐色	1.5 mm以下の砂粒、黒 色で光る砂粒		
180	b - 2	沈縄文(縫)、スス付着	ナデ	黑	明赤褐色	1~2 mmの砂粒		
181		沈縄文(縫、縫)、スス付着	ナデ	灰 黄 褐色	に赤い 黄 褐色	2 mm以下の砂粒、黒色 で光る砂粒		
182		沈縄文(縫)	ナデ、黒斑	に赤い 黄 褐色	に赤い 黄 褐色	2 mm以下の砂粒		
183	b - 2	クシ状工具による条痕(縫)のあと沈縄文(縫) スス付着	横ナデ	灰 褐色	灰 褐色	1 mm程の砂粒、黒色で 光る砂粒		
184	c - 3	条痕のあと二本単位の沈縄文(横)	ナデ	灰 褐色	に赤い 黄 褐色	2 mm以下の砂粒		
185		沈縄文(縫)	ナデ	灰 褐色	に赤い 黄 褐色	2 mm以下の砂粒		
186		沈縄文(縫)	横ナデ	灰 褐色	灰 褐色	1 mm以下の砂粒		
187	b - 3	沈縄文(縫、縫)	ナデ、黒斑	に赤い 黄 褐色	に赤い 黄 褐色	3.5 mm以下の砂粒		
188	b - 4	条板(放射状)、スス付着	ナデ	に赤い 黄 褐色	に赤い 黄 褐色	3 mm以下の砂粒、黒色 で光る砂粒		
189	a - 2	剥突文、附み、沈縄文(縫)剥目突部、スス付 着	沈縄文(縫)、ナデ	に赤い 黄 褐色	赤 褐色	0.5~2 mmの砂粒、黑 色で光る砂粒		
190		剥目突部、沈縄文(縫)、スス付着	ナデ	に赤い 黄 褐色	赤 褐色	0.5~2 mmの砂粒、黑 色で光る砂粒		
191		沈縄文(縫)	ナデ	灰	白 褐色	1 mm以下の砂粒、黒色 で光る砂粒		
192	a - 3	連続剥突文、沈縄文(縫)剥目突部、スス付着	沈縄文(縫)、ナデ	灰 白	灰 褐色	1.5~4 mmの砂粒、黒 色で光る砂粒、黑色		
193	b - 4	連続剥突文、沈縄文(縫)剥目突部、スス付着	沈縄文(縫)、ナデ	灰 白	灰 褐色	1 mm以下の砂粒、黒色 で光る砂粒、黑色		
194	S A 2	連続剥突文、横ナデ、スス付着	連続剥突文、沈縄文(縫)、ナデ	灰 褐色	灰 褐色	0.5 mm程の砂粒、黒色 で光る砂粒、黑色		
195	a - 3	沈縄文(縫)、スス付着	沈縄文(縫)、ナデ、黒斑	灰 褐色	に赤い 黄 褐色	2 mm以下の砂粒		
196	S A 2	縄文(縫、縫)	ナデ、炭化物付着	浅 黄	灰 褐色	1 mm程の黒色で光る砂 粒、黑色		
197		縄文(縫)	ナデ	灰黄褐色	灰 褐色	2 mm以下の砂粒、黒色 で光る砂粒		
198		剥突文、沈縄文(縫)、沈縄文	ナデ	横 灰	に赤い 黄 褐色	0.5~1 mmの砂粒		
199	S A 3	横ナデ、条痕のあとナデ	沈縄文、ナデ	橙	に赤い 黄 褐色	1 mm以下の砂粒		
200		ナデ、スス付着	沈縄文、ナデ	明赤褐色	橙	2 mm以下の砂粒		
201		ナデ	沈縄文、ナデ、炭化物付 着	橙	灰 褐色	1 mm程の砂粒		
202		剥突文、ナデ	貝殻条痕のあとナデ	黑	黑	3 mm以下の砂粒		
203		ナデ	ナデ	灰 褐色	灰 褐色	0.5~3 mmの砂粒、黒 色で光る砂粒		
204	S A 3	ナデ、スス付着	条痕のあとナデ	に赤い 黄 褐色	明赤褐色	1~3 mmの砂粒		
205		ナデ、貝殻条痕による条痕(縫)のあと凹 縫文(縫)、スス付着	貝殻条痕のあとナデ	橙	明赤褐色	1 mm程の砂粒		
206	c - 3	ナデ、沈縄文(縫)	ナデ	に赤い 黄 褐色	0.5~2 mmの砂粒、黑 色で光る砂粒			
207	S A 9	横ナデ、貼付突部	横ナデ、貝殻条痕	褐 灰	褐 灰	3 mm以下の砂粒、黑色 で光る砂粒		
208		横ナデ、貼付突部	横ナデ	黑	黑	2 mm以下の砂粒、黑色 で光る砂粒		
209		横ナデ、貼付突部、貝殻条痕(縫)	横ナデ	に赤い 黄 褐色	2 mm以下の砂粒			
210	c - 4	ナデ、貼付突部、貝殻条痕(縫)	ナデ	黑	褐 灰	5 mm以下の砂粒、黑色 で光る砂粒		

縄文土器観察表(6)

図番号	出 土 地 区	文 様 及 び		調 査		地 質	地 下 の 特 徴	備 考
		外 面	内 面	外 面	内 面			
211	c - 3	横ナデ、貼付突起、スス付着	横ナデ、条痕	にぶい 皮	にぶい 皮	2~4 mmの砂粒、黒色 で光る砂粒		
212		ナデ、貼付突起、孔列文	ナデ	にぶい 皮	にぶい 皮	3 mm以下の砂粒、黒色 で光る砂粒		
213		ナデ、貼付突起、孔列文	ナデ	にぶい 皮	にぶい 皮	3 mm以下の砂粒、黒色 で光る砂粒		
214		ナデ、貼付突起、孔列文、スス付着	ナデ(穿孔?)	にぶい 皮	にぶい 皮	3 mm以下の砂粒、黒色 で光る砂粒		
215		割入(縫)横ナデ、スス付着	ナデ	にぶい 皮	にぶい 皮	1~2 mmの砂粒、黒色 で光る砂粒		
216	S A 9	横ナデ、条痕(縫)、貼付突起、スス付着	横ナデ	にぶい 皮	にぶい 皮	3 mm以下の砂粒、黒色 で光る砂粒		
217		横ナデ、貼付突起	横ナデ	にぶい 皮	にぶい 皮	3 mm以下の砂粒、黒色 で光る砂粒		
218		剥突文、貼付突起、ナデ	ナデ	横	横	0.5~2 mmの砂粒、黒色 で光る砂粒		
219		組織痕	貝殻条痕のあとナデ	にぶい 皮	黒	1 mm以下の砂粒、黒く 光る砂粒		
220	S A 6	組織痕	ナデ	にぶい 皮	横	1 mm以下の砂粒		
221	b - 3	組織痕	貝殻条痕、ナデ	横	明赤褐	0.5~2 mmの砂粒		
222	d - 3	ナデ、穿孔	条痕のあとナデ	黒	褐	3 mm以下の砂粒、黒色 で光る砂粒		
223	b - 4	条痕(縫)のあとナデ、スス付着	ナデ	にぶい 皮	灰青褐	1~6 mmの砂粒、黒色 で光る砂粒		
224		ナデ	ナデ	にぶい 皮	褐	1~2 mmの砂粒、黒色 で光る砂粒		
225	c - 4 S A 10	ナデ、スス付着	ナデ	浅青褐	にぶい 皮	0.5~5 mmの砂粒		
226	a - 2	ナデ	ナデ、スス付着	褐	にぶい 皮	0.5~3 mmの砂粒、黒 色で光る砂粒		
227	S A 1	横ナデ、貼付突起	横ナデ	横	にぶい 皮	3 mm以下の砂粒、黒色 で光る砂粒		
228	S A 2	横ナデ、貼付突起、スス付着	貝殻条痕	灰	褐	1~6 mmの砂粒、黒色 で光る砂粒		
229		貝殻条痕(縫)のあとナデ	貝殻条痕	褐	褐	1.5 mm以下の砂粒、黒 色で光る砂粒		
230		ナデ、貼付突起	ナデ	にぶい 皮	黑	2.5 mm以下の砂粒、黒 色で光る砂粒		
231		ナデ、条痕(縫)のあとナデ、スス付着	ナデ	にぶい 皮	褐	1~2 mmの砂粒、黒色 で光る砂粒		
232		条痕(縫)のあとナデ	ナデ	にぶい 皮	褐	1~3 mmの砂粒、黒色 で光る砂粒		
233		横ナデ、貝殻脱離剥離文(縫)、スス付着	横ナデ	にぶい 皮	褐	1~2 mmの砂粒、黒色 で光る砂粒		
234	c - 3	沈縞文(波状)のあとナデ、スス付着	ナデ、炭化物付着	にぶい 皮	褐	2 mm以下の砂粒		
235	c - 3	沈縞文(波状)、スス付着	ナデ	褐	褐	2 mm以下の砂粒		
236		条痕(縫)のあとナデ、沈縞文(斜)、スス 付着	ナデ	にぶい 皮	淡	3 mm以下の砂粒		
237		沈縞文(横)、ナデ	ナデ	にぶい 皮	褐	3 mm以下の砂粒		
238		沈縞文(格子状)、スス付着	横ナデ	にぶい 皮	褐	2.5 mm以下の砂粒、黒 色で光る砂粒		
239	S A 2	条痕(縫)、スス付着	ナデ、炭化物付着	黑	褐	2 mm以下の砂粒		
240		条痕(縫)、ナデ	ナデ	明赤褐	褐	0.5~4 mmの砂粒、黑 色で光る砂粒		
241		貝殻条痕(縫)	ナデ	明赤褐	褐	0.5~2 mmの砂粒		
242		貝殻条痕(斜)のあとナデ、スス付着	貝殻条痕、炭化物付着	にぶい 皮	褐	1~2 mmの砂粒		
243		貝殻条痕(縫)のあとナデ	貝殻条痕	灰	褐	1~2 mmの砂粒		
244		貝殻条痕(横)、スス付着	条痕	横	赤	0.5~2 mmの砂粒、黒 色で光る砂粒		
245		条痕(横)のあとナデ	ナデ	にぶい 皮	褐	1 mm程の砂粒		
246	b - 4	貝殻条痕(横)	貝殻条痕	明	褐	0.5~2 mmの砂粒、黒 色で光る砂粒		
247	b - 3	条痕(縫)	ナデ	灰	黄	1~2 mmの砂粒		

第2節 弥生時代の遺構と遺物

弥生時代の遺構は、竪穴住居址10軒が検出された。全て方形を基調としたプランであるが、張り出し部を持つものが3軒あり、4軒が切り合う形で見られた。遺物は、住居址内及び第Ⅱ層(包含層)より土器・石器が出土しているが、中でもSA2の石包丁1、磨石2、石皿2、SA6の石包丁3などが注目される。そのほか、磨製石鏃・杓子状土製品なども出土している。土器の詳細については、観察表を作成した。参照されたい。

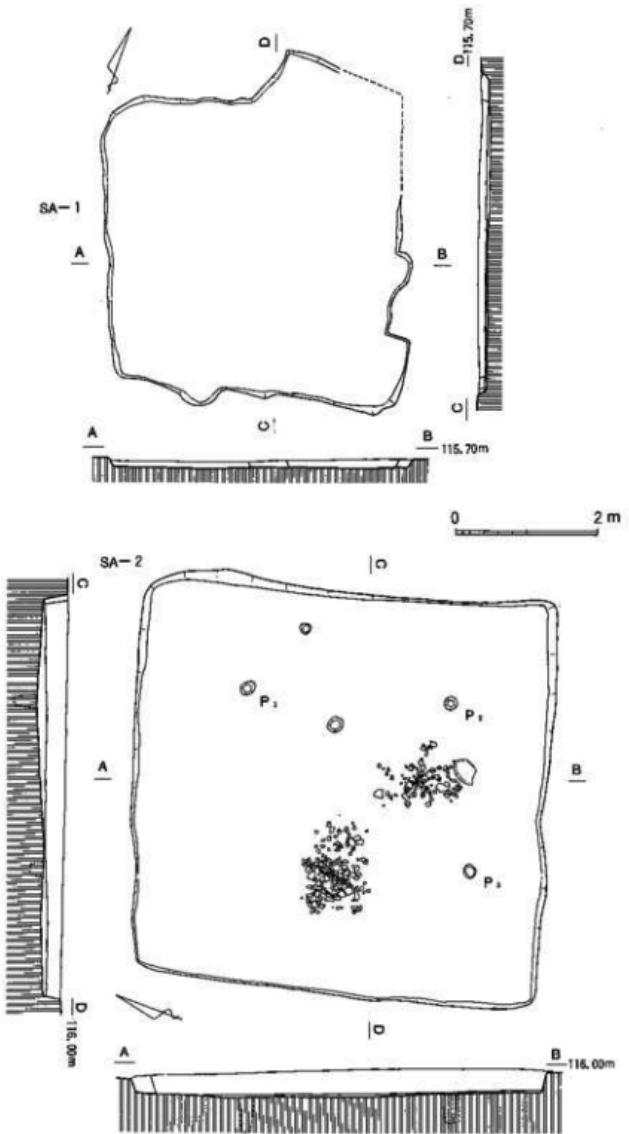
SA1 (第20図)

b-4区に検出された。長軸4.89m、短軸4.3mの方形プランであるが、北東及び南東隅に張り出しを持つ(北東隅は一部擾乱を受けている)。柱穴は検出されなかった。検出面から床までの深さは14cmで遺物も少ない(第21図)。1は複合口縁壺である。内傾した拡張部には8条の櫛波状文が施される。流れ込む形で石錐が出土している(第42図6)。

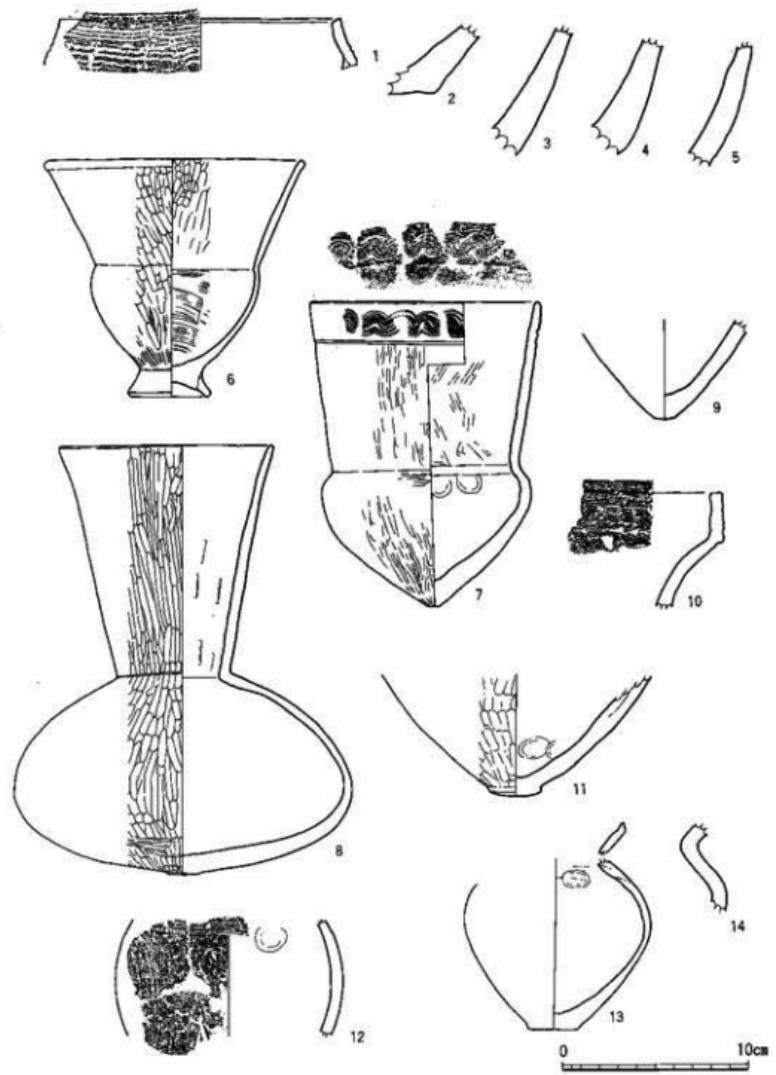
SA2 (第20図)

a-3・4・b-3・4区にかけて検出された。長軸5.85m、短軸5.72mの方形プランであり、深さは34cmを計る。4本柱であるが、北西のものは木根による擾乱で検出されなかった。上屋に間連すると思われる炭化材が数ヶ所に見られた。床上には、砂岩の剥片が二カ所にまとまって見られ、一方では母材である砂岩から剥がれる状態が見られる。これらの剥片には使用痕等は見られず、何らかの石器の作成途中であろうと思われる。

遺物は、埋土の下層から上層まで見られた(第21~24図)。6は脚付壺でほぼ完形である。球形で小ぶりの胴部と直線的に立ち上がる頸部から口縁部には丁寧なミガキ調整がなされる。薄手の作りである。7は長頸壺で、口縁部に櫛波状文が施される。頸部と胴部はミガキ調整で、底部は尖底に近い平底である。8は床直上で出土した完形の長頸壺で、内部の底付近に炭化物の塊が見られた。タマネギ形の胴部に乳房状の底部が付く。12は無頸壺で、口縁部下に櫛波状文と胴部に弧状櫛描きが見られる。13は短頸壺で丁寧にナデ調整された内外の器面には、光沢を持つ黒塗り様のものが見られる。16の胴上部には、スヌの付着と風化のためはっきりしないが線刻状のものが見られる。壺型土器には口縁部が外反しながら長く延びるものと、く字形に短く外反するものがある。頸部は明瞭な稜があるものとないものがある。胴上部が最大径となるが、19は口径が最大径となる。底部は平底と若干上げ底気味のものが見られる。器面はナデあるいはハケ調整である。30は手づくりの杓子状土製品である。石器は石包丁、磨石、石皿が出土している(第23図)。1は凝灰質頁岩製の石包丁で両側に切り込んだ抉りを持つ。丁寧な研磨が見られるが、長期間使用のためか両面ともに剥離が著しい。2は砂岩の磨石である。二カ所に敲打痕を持つ。3は尾鈴山酸性岩である。5・6は砂岩の石皿である。他に石匙が流れ込む形で出土している(第42図11)。

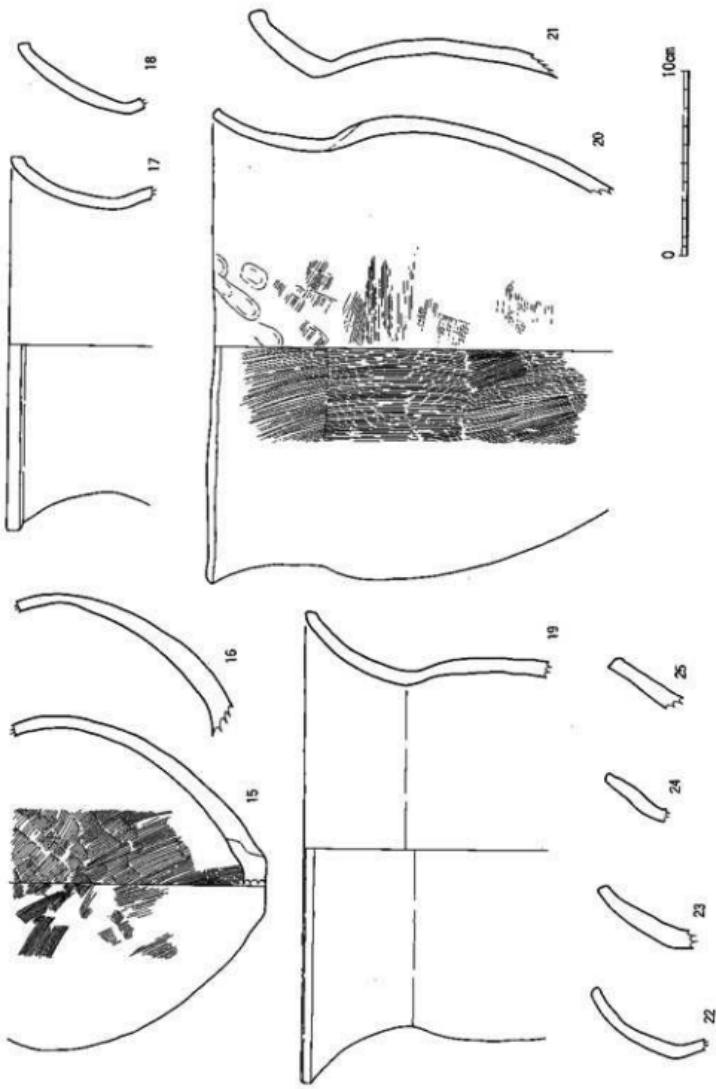


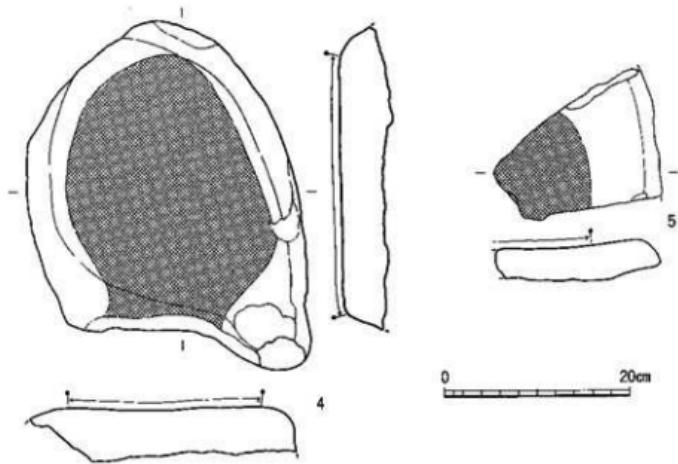
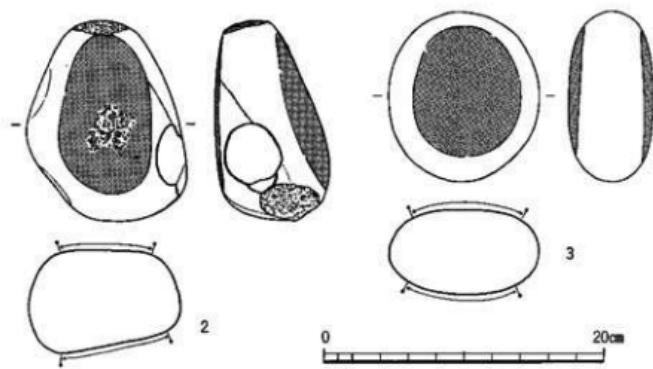
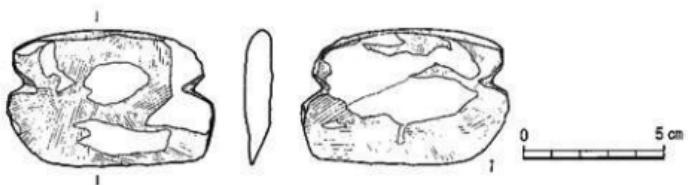
第20図 SA-1・SA-2 実測図 (1/80)



第21図 SA-1・SA-2 出土土器実測図 (1/3) (1~5→SA-1)
(6~14→SA-2)

第22圖 SA-2 出土器物測圖 (1 / 3)

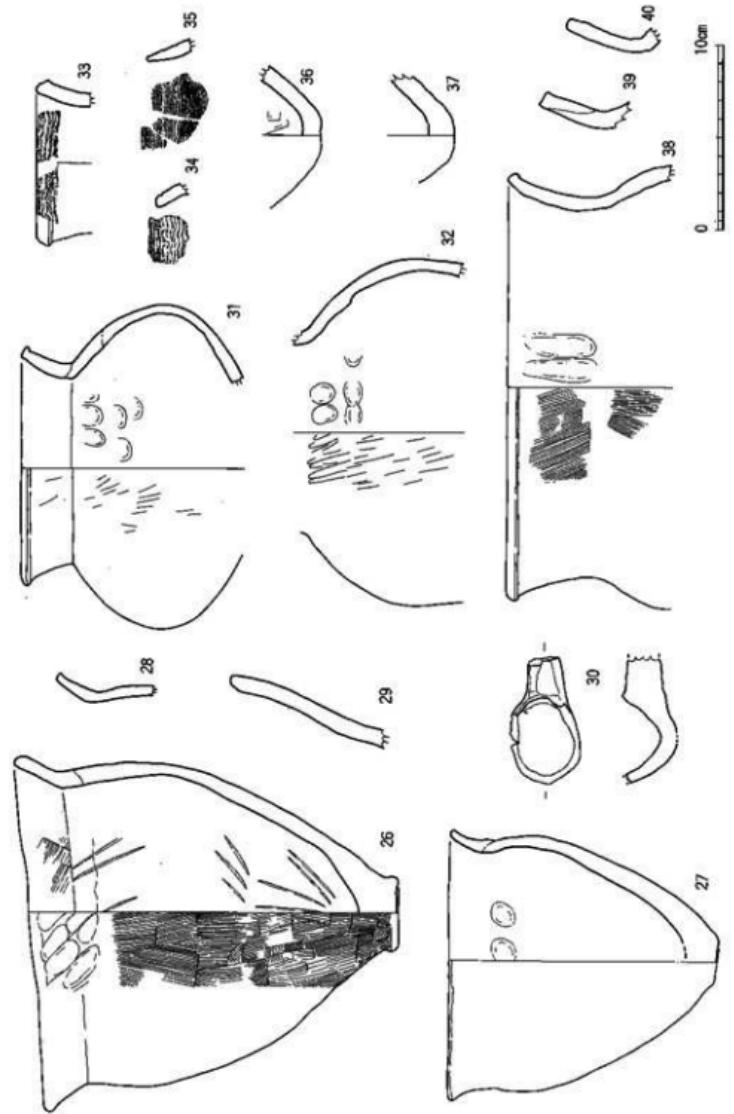


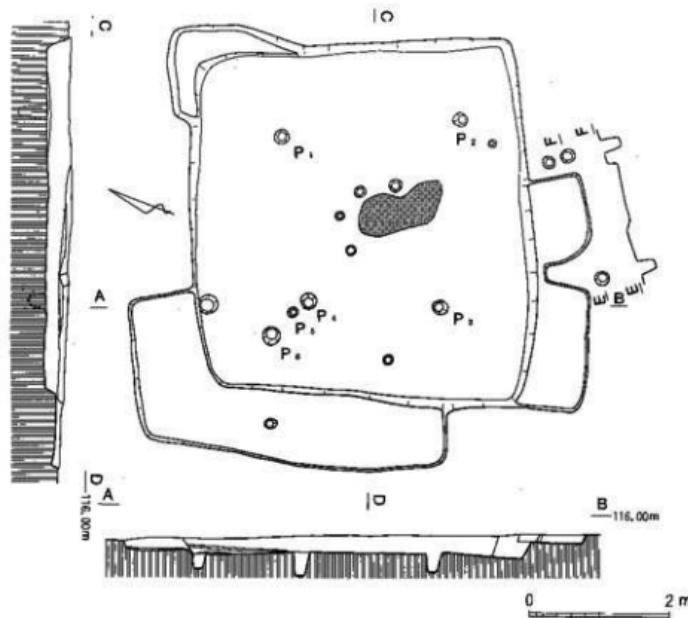


第23図 SA-2 出土石器実測図 (1→1/2, 2・3→1/4, 4・5→1/6)

(26~30→SA-2, 31~40→SA-3)

第24図 SA-2・SA-3 出土器実測図 (1/3)





第25図 SA-3 実測図 (1/80)

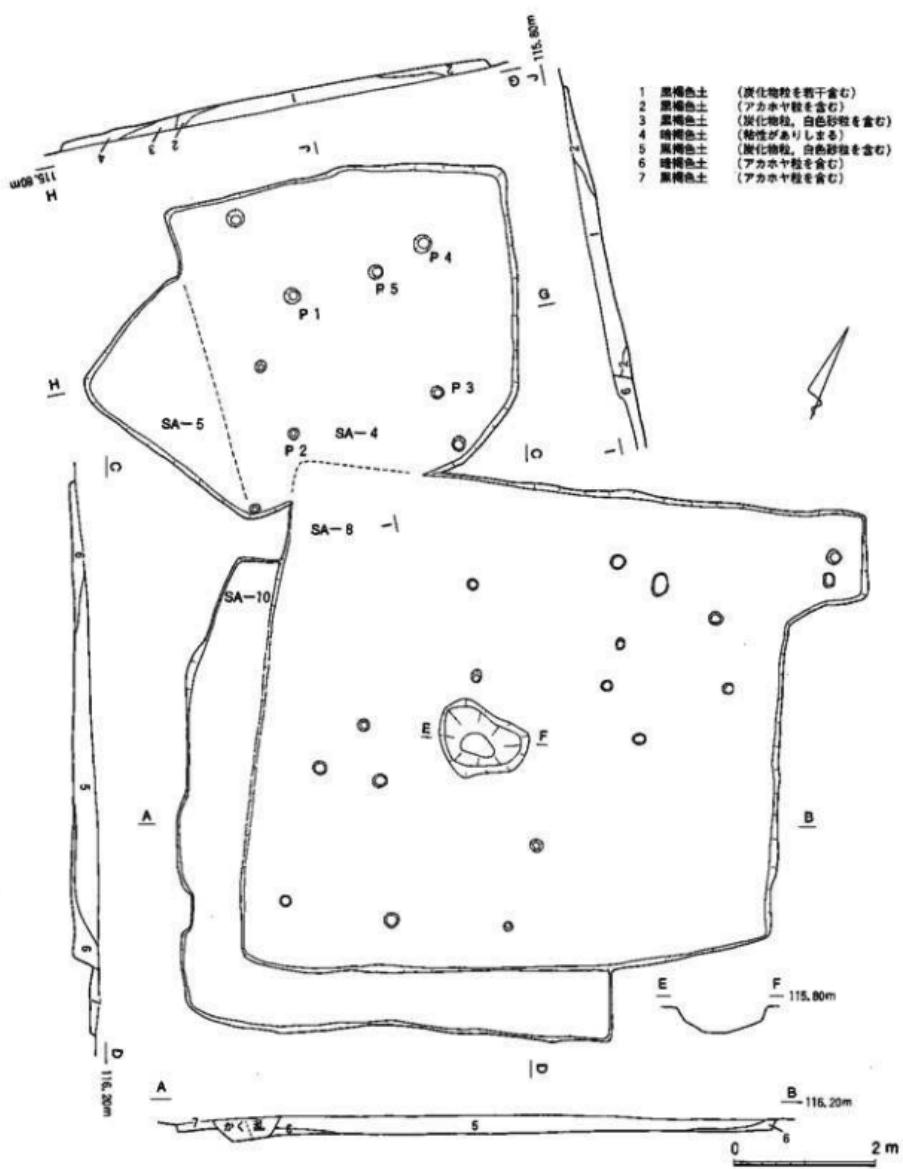
SA 3 (第25図)

b-3区で検出された。方形基調の張り出し部をもつ竪穴住居址である。主空間の長軸4.88m、短軸4.64mで深さ37cmを計り、張り出し部を含めると長軸6.55m、短軸6.30mとなる。主柱はP1~4で、他の柱穴は後世のものと思われるが、埠土に明瞭な差は見られず、住居に伴う補助的な柱が含まれる可能性もある。中央部やや南寄りに床の焼けた痕跡が見られた。南壁中央の張り出し部は、その両側にピットが見られ、入口であった可能性がある。主空間は第IV層を床とするが、張り出し部はアカホヤ層中で床となる。

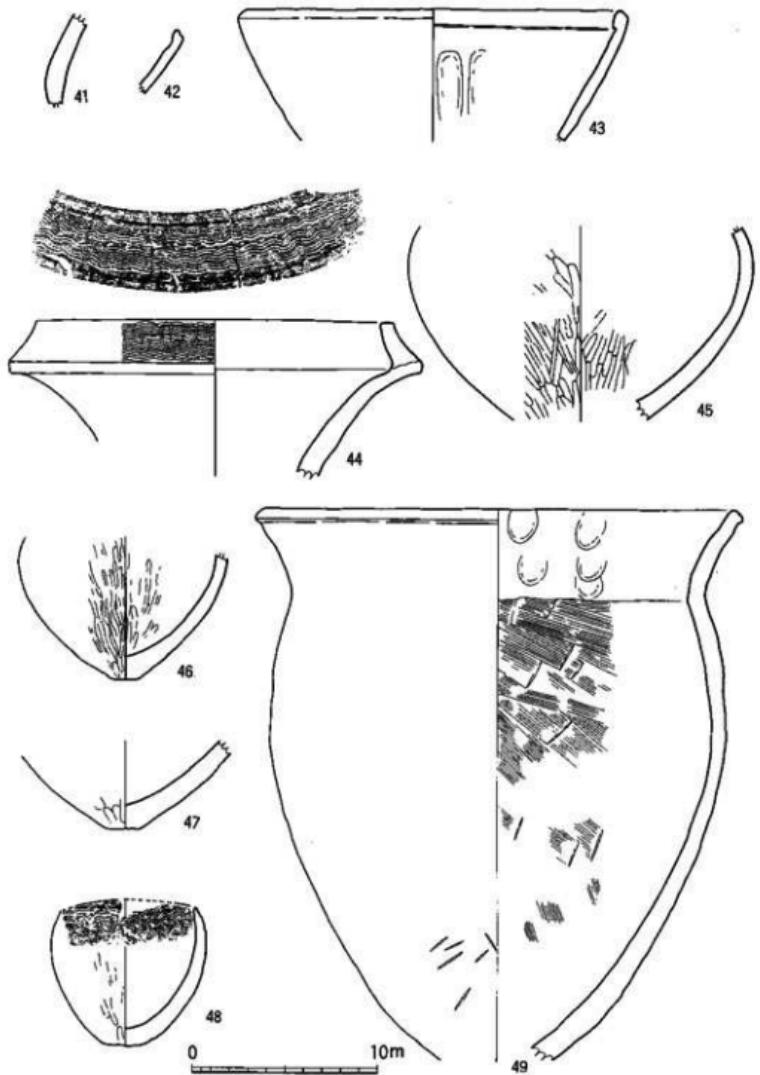
土器は少なく、小片での出土であった(第24図)。32は頸部がく字形に屈曲する短頸壺で、ミガキ調整と内器面に指頭痕が見られる。33~35の壺には横描波状文が施される。38は滑らかに外反しながら延びる壺の口縁部で、内器面に指でなで上げた痕が残る。

SA 4・5・8・10 (第26図)

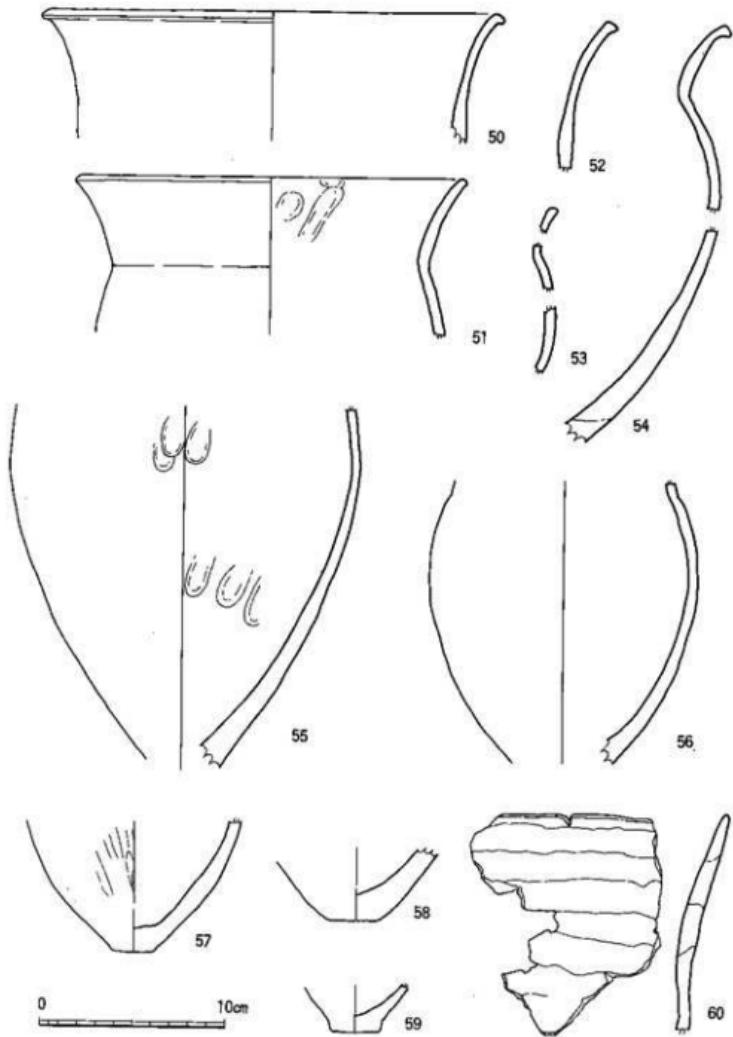
4軒が切り合う形でb-3・4、c-3・4区に検出された。SA 4は推定で4.5m前後の方形住居址で、4本柱と思われるがP4・5の関係がはっきりしない。SA 5・SA 8は、土層断面の観察でSA 5→SA 4→SA 8の切り合い関係が確認されたが、床面には明瞭な差がなく



第26図 SA-4・SA-5・SA-8・SA-10 実測図 (1/80)



第27図 SA-4・SA-8 出土土器実測図 (1 / 3) (41~43→SA-4)
 (44~49→SA-8)



第28図 SA-8 出土土器実測図 (1 / 3)

それらの境界はいま一つはっきりしない。SA-8は長軸7.40m、短軸6.95mとかなり大規模な住居址で、北東隅に張り出し部を持つ。中央部に土坑を持ち、その埋土は炭化物粒を多少含む黒褐色土の単純層であった。ピット18を検出したが、主柱穴は判別できなかった。SA-10は推定で長軸6.60m、短軸6.05mの方形住居址である。SA-8との切り合い関係は、西壁側では木棟による擾乱のためはっきりしなかったが、南壁側でSA-8が新しいことを確認した。

遺物はSA-4とSA-8から出土している(第27~29図)。43はやや内湾しつつ口縁部内面に段を持つ鉢で、内器面に指でなで上げた痕が残る。44は複合口縁壺で、内傾した拡張部に櫛描波状文を施す。壺形土器はミガキ調整で平底である。壺形土器は全て口径あるいは胴上部が最大径となる。口縁部端は、丸みを帯びるもの(53)、とがるもの(49)、垂れ下がり気味のもの(50・54)が見られる。60は粘土の輪積み痕を残す粗雑な作りの壺で、他のものと様相を異にする。古墳時代前期のものと思われ、住居址外から流れ込んだものであろう。他に砂岩の磨石が出土している(第27図)。

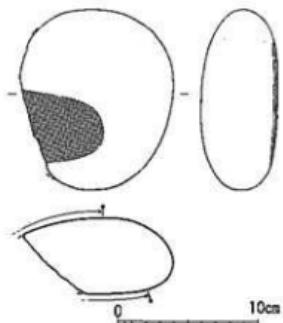
SA-6 (第30図)

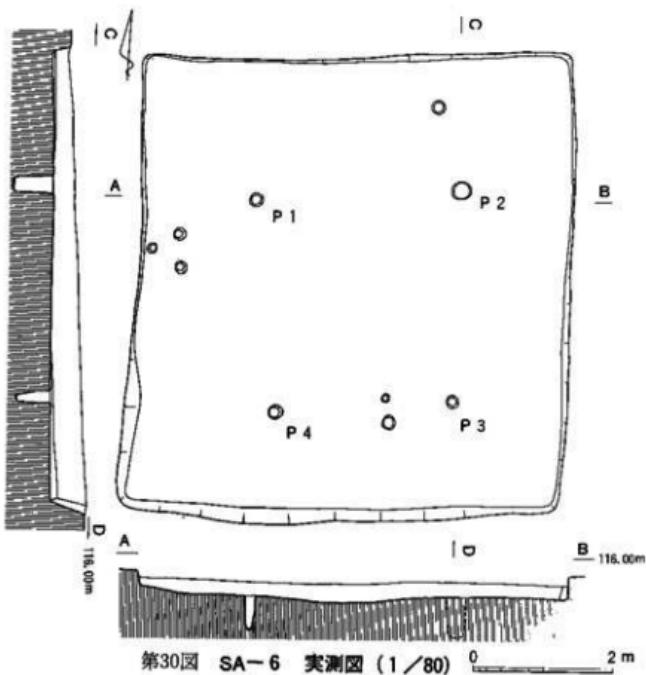
a-1・2、b-1・2区にかけて検出された。長軸6.58m、短軸6.18mで深さ50cmを計る方形の住居址である。主柱穴はP1~4である。焼土等は見られない。

遺物は床直上のものは少なく、埋土の中程から上層にかけて小片で見られた(第31~33図)。63は壺の底部で、円盤状の大きめの平底である。65は床上に倒れ込む形で出土した。外反する口縁部にあまり張らない胴部を持つ壺で完形である。ナデおよびハケ調整である。70は上げ底、71は左右に張り出す平底の壺で共に底部から胴部にかけて指痕が残る。72は高杯の脚部で丁寧なナデとミガキが見られる。75は鉢でごく浅い櫛描波状文が施される。77は縦状の突帯でハ字形の刻みが施される。石器は石包丁、磨石、砥石(?)が出土している(第32図)。1はカマボコ形で両面からの二孔穿孔である。刃部は直線的で、片面には位置がずれ途中で止めた穿孔痕が見られる。2は長方形で湾曲した刃部を持つ。二孔穿孔と抉りの両者が見られる。3は欠損品であるが長方形で抉りを持つ。両面の剥離が著しい。石材は1・2が緑色凝灰岩で、3は頁岩である。4は摺理面で割れた欠損品であるが側面に磨痕と若干のくぼみが見られ、砥石の可能性がある。下端部の剥離状の痕は、砂岩特有の摺理と風化のためと思われる。5は砂岩の磨石である。

SA-7

a-2区で検出された。A・B区間の道路で切られて 第29図
おり、調査区には一部がかかるのみである。柱穴1を検 SA-8 出土石器実測図 (1/4)





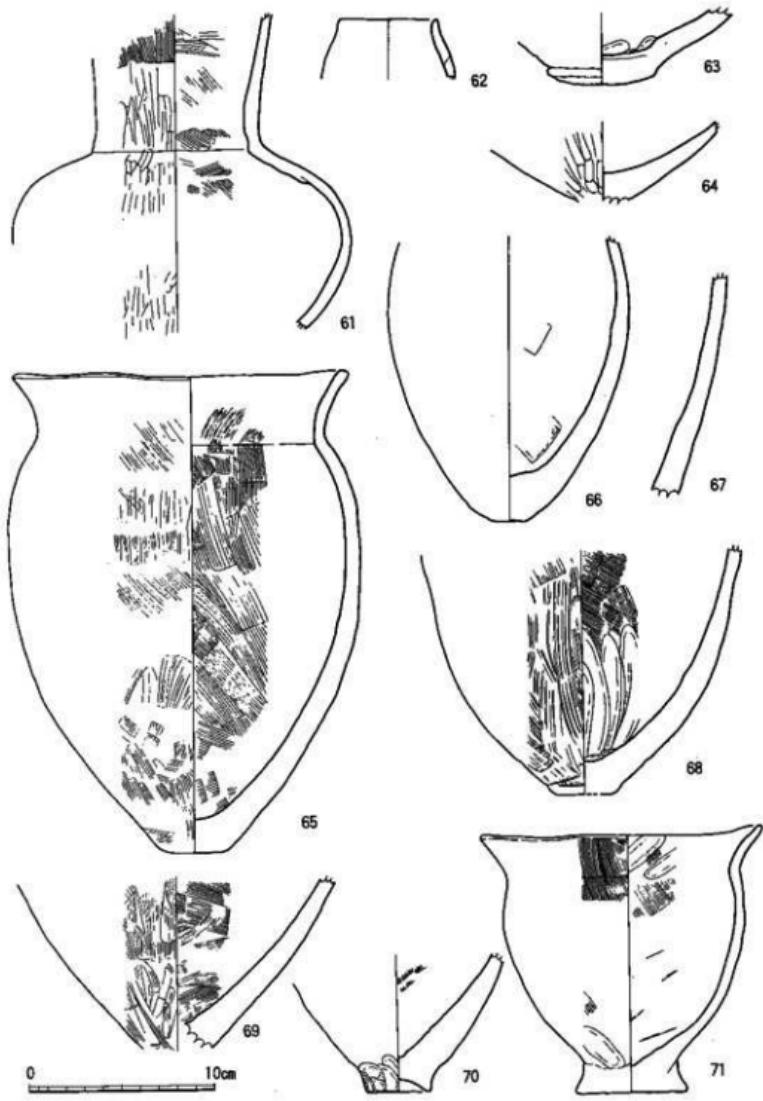
第30図 SA-6 実測図 (1/80) 0 2m

出したが検出面からの深さは数cmで、遺物は78の高壺の脚部が一点のみ出土した(第32図)。若干脛らみを持ち上下に壺部とさらに広がる脚下部が付くと思われる。

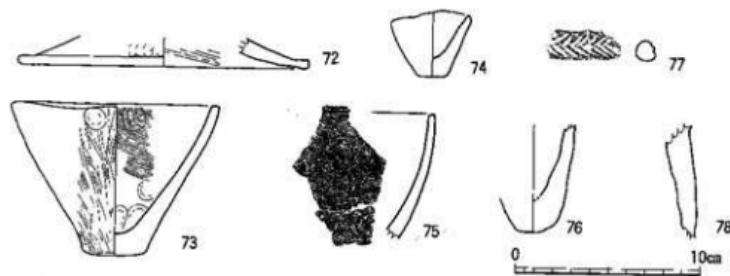
SA 9 (第34図)

c-2・3、d-2・3区で検出された。付近にはアカホヤの堆積は見られず、表土下に第IV層が表れた。土色での確認検出が困難で、土器類の集中的出土と降雨後の乾き具合の違いで確認した。長軸6.12m、短軸5.72mで深さ36cmを計る。4本柱の方形住居址である。中央部西寄りの床面が焼けて赤く変色していた。検出した住居址のうち最も尾根に近い傾斜地に位置し、床面も約30cmのレベル差を以て傾斜していた。

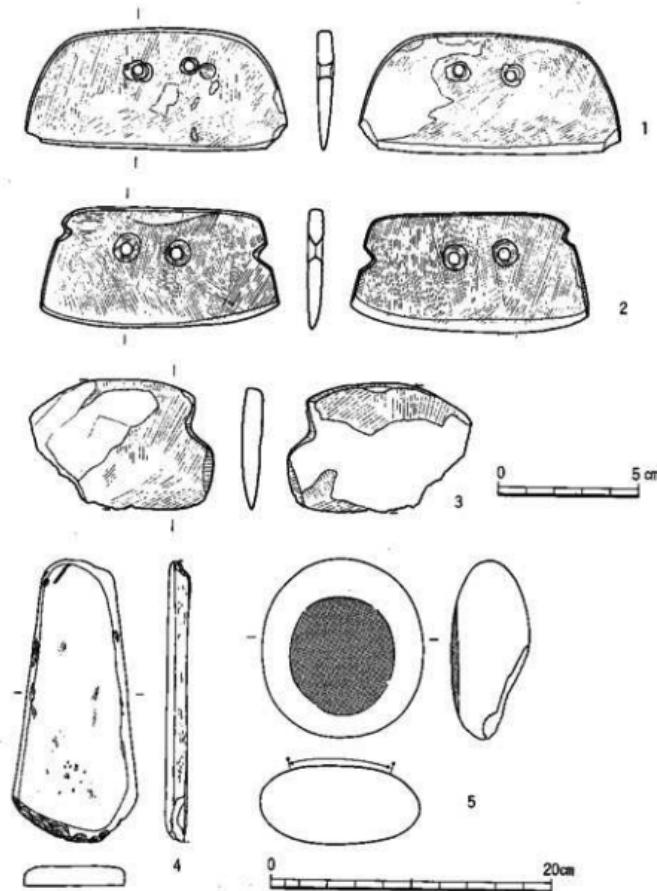
遺物は、埋土中程から上層で出土している(第35図)。壺は口径あるいは胴上部が最大径となるもので、頸部に稜をもつもの(80~82)と緩やかに延びるもの(83)がある。底部は平底あるいは若干上げ底気味の平底である。86は一度屈曲し外反しながら延びる高壺の壺部で、ナデ調整である。87は横方向のハケ目が見られる脚部でどの器種に付くのかは不明である。88は丁寧なミガキが見られる鉢で、円盤状の底部を持つ。



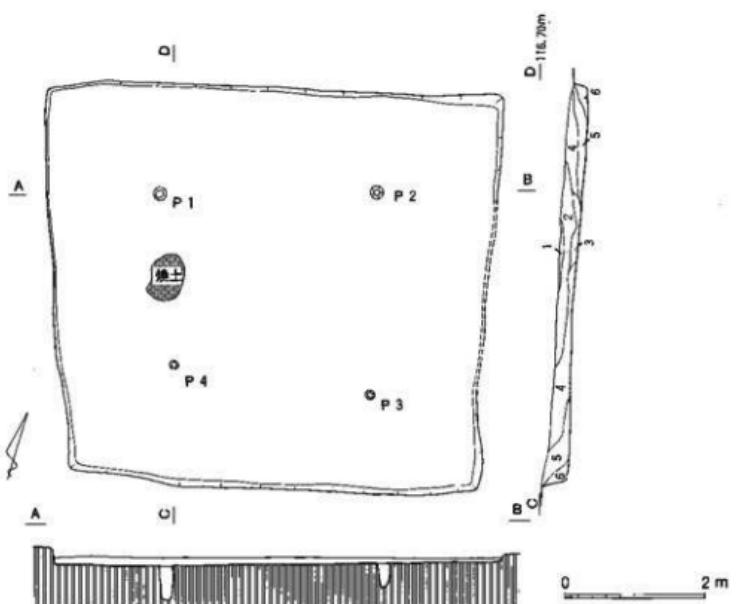
第31図 SA-6 出土土器実測図 (1 / 3)



第32図 SA-6・SA-7 出土土器実測図 (1/3) (72~77→SA-6)
78→SA-7)



第33図 SA-6 出土石器実測図 (1~3→1/2, 4·5→1/4)



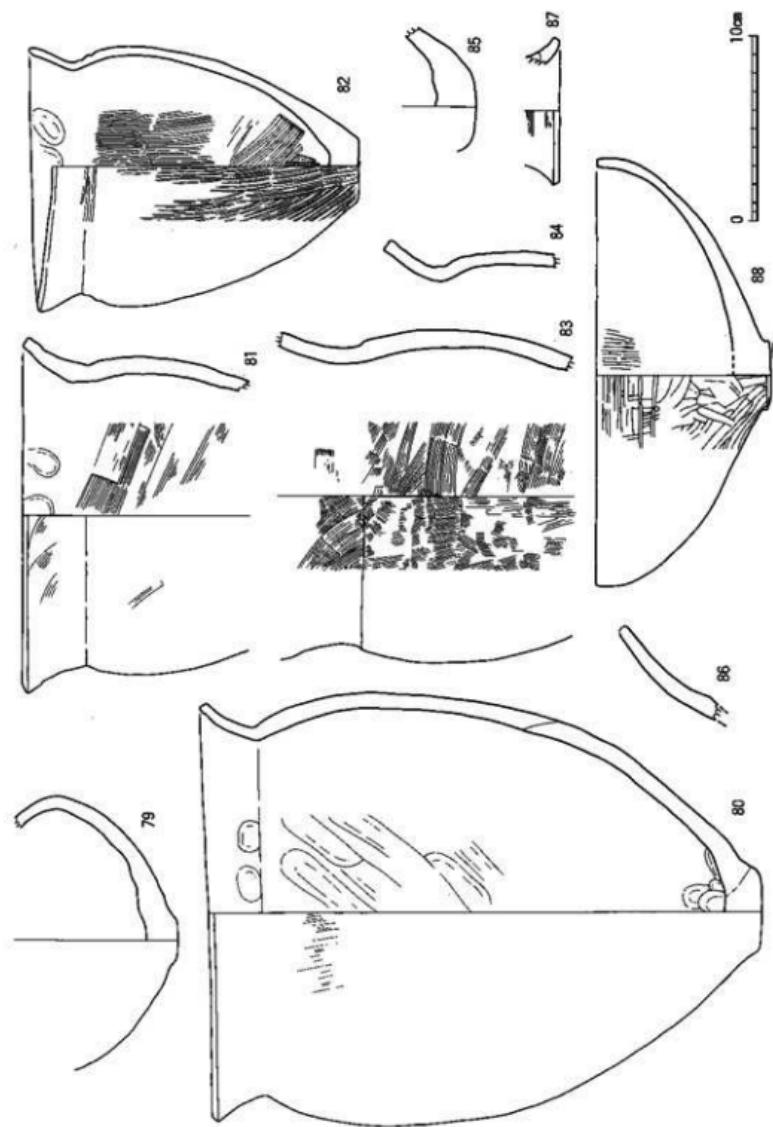
第34図 SA-9 実測図 (1/80)

弥生時代住居址一覧表

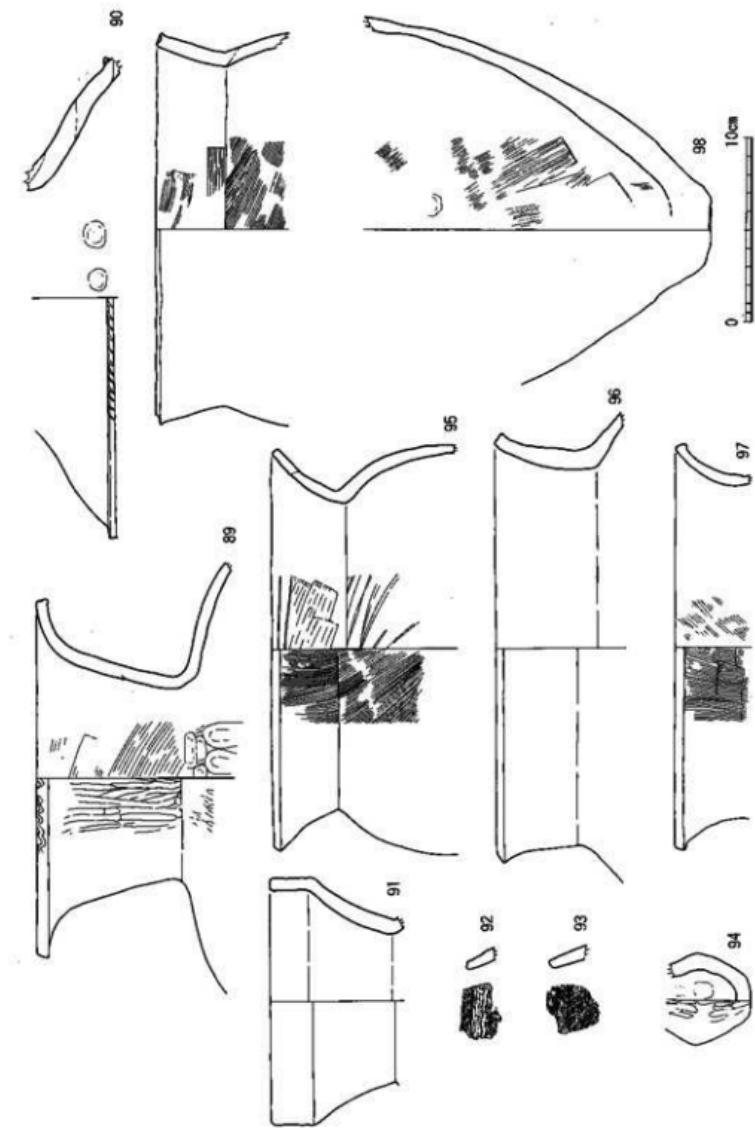
() 内数値は推定

住居番号	平面形	主柱数	規模		床面積 (m ²)	出土遺跡・備考
			長軸×短軸×深さ(m)	横		
S A 1	方 形 張り出し有	—	4.89×4.30×0.14	(17.2)		
S A 2	方 形	4	5.85×5.72×0.34	32.1	円筒状土製品、石包丁 磨石2、石皿2	
S A 3	方 形 張り出し有	4	6.55×6.30×0.37 4.88×4.64×0.37	30.9 22.6	焼土	
S A 4	方 形	4	(4.50)×(4.45)×0.25	(19.1)		
S A 5	方 形	—	(3.40)×—×(0.13)	—		
S A 6	方 形	4	6.58×6.18×0.50	38.4	石包丁3、磨石、砥石	
S A 7	方 形	—	—×—×	—		
S A 8	方 形 張り出し有	—	7.40×6.95×0.35	51.0	土壤	
S A 9	方 形	4	6.12×5.72×0.36	34.1	焼土	
S A 10	方 形	—	(6.60)×(6.05)×(0.12)	(38.7)		

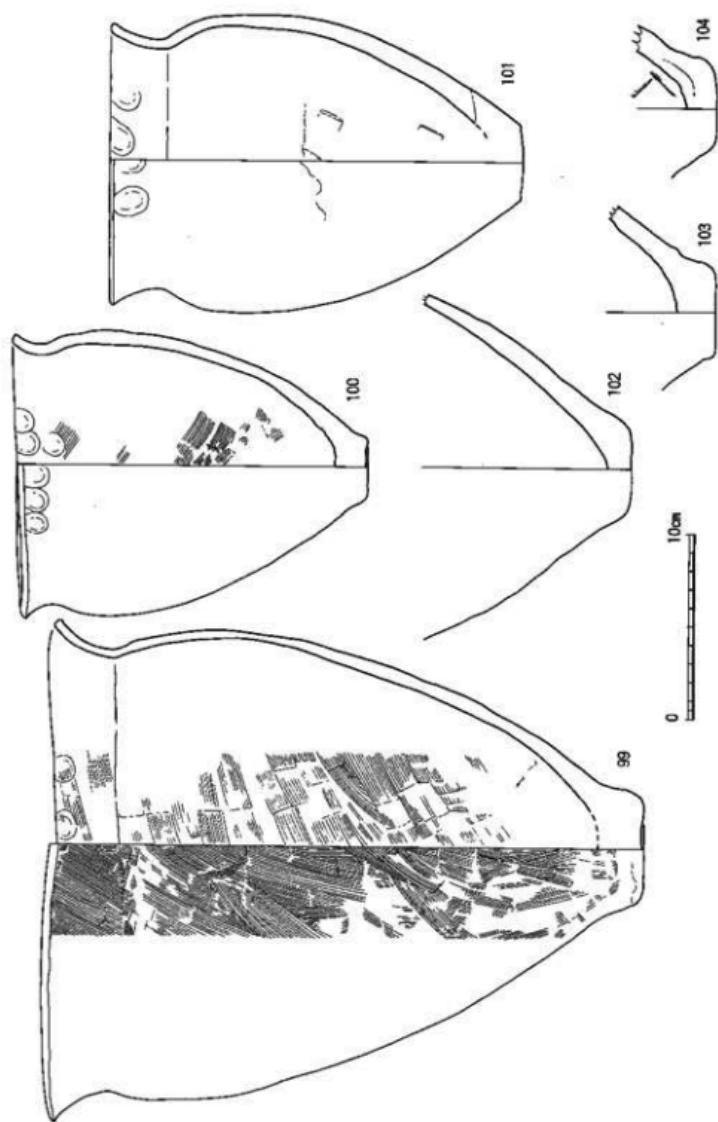
第35図 SA-9 出土器物測図 (1/3)

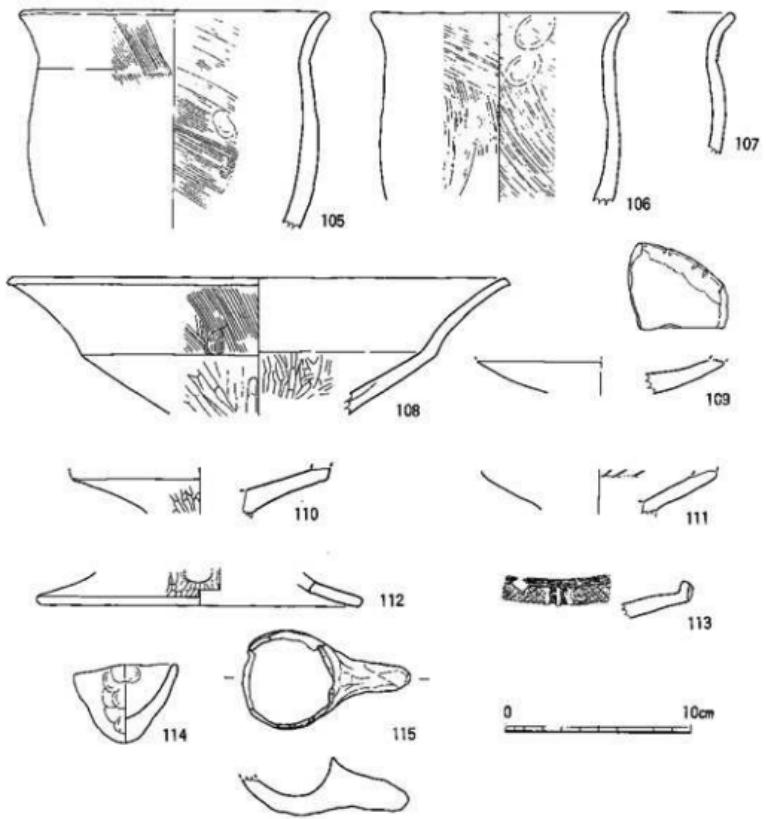


第36圖 遺構外出土弦生土器測量圖(1)(1/3)



第37圖 通津出土弦生土器素測圖(2) (1 / 3)

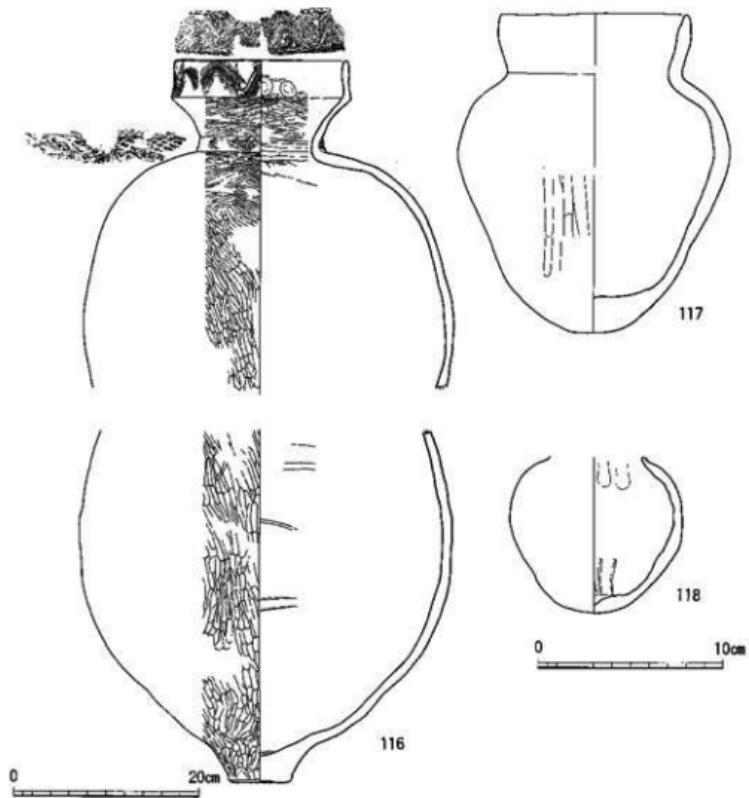




第38図 遺構外出土弥生土器実測図(3) (1 / 3)

遺構外出土の遺物（第36~40図）

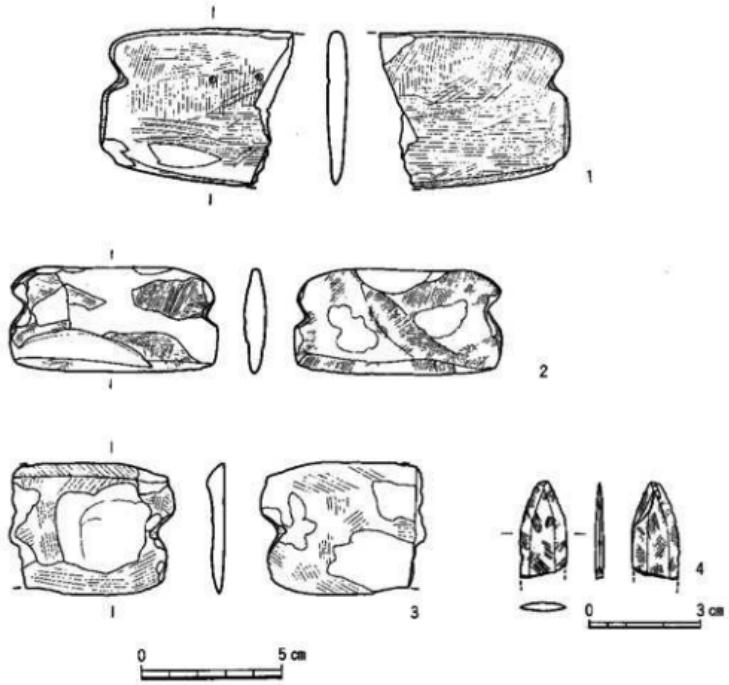
89は胴部から頸部にかけて屈曲したプロポーションと大きく外湾する口縁を持ち、口唇部には鋸歯文が施される。ミガキ、ハケ目調整である。90は肩部に刻目突帯を持つ。92・93は無頸壺で櫛描波状文を持つ。変形土器は頸部がく字形に屈曲するもの（95）、口縁部があまり外反しないもの（96）、頭部のくびれが明瞭でなく胴部があまり張らないもの（106・107）、口唇部がく字形にくぼむものの（98）などが見られる。底部は平底と若干の上げ底が見られる。高壺は壺部が屈曲後大きく外反するものが見られ（108）、屈曲部で割れたものの中には刻みが見られる（109・111）。脚部には円形の透かし孔が見られる（112）。113は、櫛描波状文上に2本の縦の粘土紐が貼り付



第39図 B区出土弥生土器実測図 (116→1/6, 117・118→1/3)

けられる。器台と考えるが装飾高壺の可能性もある。B区からは壺形土器3点が出土している。116は大型の複合口縁壺で、拡張部に横波状文、頸部に刻目突帯が見られる。器面は丁寧なミガキ調整である。117・118は丸底に近い平底である。

石器には石包丁と磨製石鎌が見られた。1・2は緑色凝灰岩、3は弱い熱変成を受けた頁岩である。1の片面には穿孔と思わせる痕跡が見られる。2・3は剥離が著しい。4は緑色凝灰岩を丁寧に研磨し細身の柳葉形に仕上げている。



第40図 造構外出土石器実測図 (1~3→1/2, 4→2/3)

弥生土器観察表(1)

番号	出土地点	器種分化	法量 (m)		調査・手法		はか		色 横		地土の特徴
			口径	底径	高さ		外 面	内 面	外面	内面	
1 S A 1	東・口縁部	(14.1)	-	-	-	横描波状文	横ナデ		褐	褐	1.5mm程の砂粒 にぶい
2 *	東・底基	-	-	-	-	ナデ	斜ハケ日、スス付着		灰	灰	4mm程の砂粒 にぶい
3 *	* -	-	-	-	-	ナデ	横ナデ、ハケ日		灰	灰	2~4mmの砂粒 にぶい
4 *	* -	-	-	-	-	ミガキ	ナデ		灰	灰	2~5mmの砂粒 にぶい
5 *	* -	-	-	-	-	ナデ	指押さえ		灰	灰	5mm程の砂粒 にぶい
6 S A Z	東・口縁部	13.7 (4.1)	12.0	横ナデ、鉛・鋸ミガキ、ケズリ	厚ミガキ、横ハケ日、 鉛ミガキ、スス付着	厚ミガキ、横ハケ日、 鉛ミガキ、スス付着	厚ミガキ、黒色で光る 砂粒少	白	白	白	1~4mmの砂粒多 にぶい
7 *	* -	+	12.0	0.7	16.6	横描波状文、厚ミガキ、スス付 着	横ナデ、炭化物付着	ナデ、鉛ミガキ、黒色で光る 砂粒少	灰	灰	3mm以下の砂粒多 にぶい
8 *	* - 完形	11.2	1.7	23.3	継ミガキ	-	横ナデ、炭化物付着	青黄	灰	白	1~2mmの砂粒、黒色で光る 砂粒少
9 *	* - 底基	-	1.0	-	-	ケズリ後ナデ、底面ナデ	ナデ	にぶい 砂粒少	灰	黄	5mm以下の中色で光る砂粒少 1~4mmの砂粒
10 *	* - 口縁部	-	-	-	-	横描波状文、横ナデ、ナデ、継 ハケ日	横ナデ、指押さえ	浅黄	浅黄	浅黄	1~6mmの砂粒 にぶい
11 *	* - 底基	-	2.8	-	-	縦ミガキ後一部横ナデ、底面ナ デ、スス付着	ナデ、指押さえ、スス 付着	黄	黄	黄	2~5mmの砂粒 にぶい
12 *	* - 口縁～底基	-	-	-	-	横描波状文、ナデ、ケズリ	ナデ、指押さえ	灰	灰	灰	微細~4mmの砂粒 にぶい
13 *	* - 口縁～底基	-	2.6	(11.2)	-	ナデ、吊垂り	ナデ、指押さえ、黒塗 り	黑	黑	黑	西黄
14 *	* - 底基	-	-	-	-	スス付着	ナデ、横ナデ	浅黄	浅黄	浅黄	0.5~4mmの砂粒 にぶい
15 *	* - 底基	-	(2.6)	-	-	ハケ日後ナデ、スス付着	鉛ハケ日、スス付着	灰	灰	灰	0.5mm以下の黑色で光る砂粒 1~3mmの砂粒
16 *	* -	-	-	-	-	ナデ、スス付着、縫跡か?	ナデ	暗赤	暗赤	暗赤	4mm程の砂粒 にぶい
17 *	* - 口縁～底基	(19.9)	-	-	-	ナデ、スス付着	ナデ	灰	灰	灰	4~8mmの砂粒 にぶい
18 *	* -	+	-	-	-	横ナデ、ナデ	横ナデ、ナデ	灰	灰	灰	微細~5mmの砂粒 にぶい
19 *	* - 口縁～底基	(25.2)	-	-	-	ナデ、スス付着	ナデ	灰	灰	灰	5mm程の砂粒 明灰
20 *	* -	+	24.9	-	-	横ナデ、鉛ハケ日、スス多量付 着	ナデ、鉛・横ハケ日後 ナデ	灰	灰	灰	1mm以下の黑色で光る砂粒 2~3mmの砂粒 にぶい
21 *	* -	+	-	-	-	横ナデ	ナデ	灰	灰	灰	2~8mmの砂粒 にぶい
22 *	* - 口縁～底基	-	-	-	-	横ナデ	横ナデ	灰	黄	黄	3~4mmの砂粒 にぶい
23 *	* - 口縁部	-	-	-	-	横ナデ	横ナデ	灰	灰	灰	3~8mmの砂粒 にぶい
24 *	* -	+	-	-	-	横ナデ	横ナデ	灰	灰	灰	1.5mm程の砂粒 にぶい
25 *	* -	-	-	-	-	ナデ、スス多量付着	ヨコナデ、横ハケ日	灰	灰	灰	3~4mmの砂粒 にぶい
26 *	東・口縁部完形	18.7	3.5	20.8	-	ナデ、ハケ日、指押さえ、スス 付着	ナデ(土具の焼却痕)	黄	黄	黄	3~8mmの小砾 にぶい
27 *	* - 半完形	(14.2)	2.5	14.5	-	ナデ、ケズリ、スス付着	ナデ	灰	灰	灰	1~6mmの砂粒 にぶい
28 *	* - 口縁部	-	-	-	-	ナデ、ハケ日、スス付着	ナデ	浅黄	浅黄	浅黄	2mm程の砂粒 にぶい
29 *	鉛・口縁～底基	-	-	-	-	ナデ	斜ハケ日、ナデ	灰	白	白	2~6mmの小砾 にぶい
30 *	杓子灰土製品	-	-	-	-	手づくね	-	灰	灰	灰	微細~4mmの砂粒 にぶい
31 S A 3	東・口縁～底基	11.9	-	-	-	ミガキ	ミガキ、ナデ、指押 さえ	灰	灰	灰	2mm以下の砂粒少 にぶい
32 *	* - 底基	-	-	-	-	ミガキ、スス付着	ナデ、指押さえ	灰	灰	灰	4mm以下の砂粒少 にぶい
33 *	* - 口縁部	(7.5)	-	-	-	横描波状文、横ナデ	横ナデ	灰	灰	灰	3mm以下の砂粒少 にぶい
34 *	* -	+	-	-	-	横描波状文、横ナデ	横ナデ	灰	灰	灰	5mm以下の砂粒少 にぶい
35 *	* -	+	-	-	-	横描波状文、ナデ、ミガキ	横ナデ	灰	灰	灰	3mm以下の砂粒少 にぶい
36 *	* - 底基	-	1.4	-	-	ナデ(工具端部痕)	ナデ	灰	灰	灰	3mm以下の砂粒少 にぶい
37 *	* -	+	-	2.1	-	ケズリ、ナデ	ナデ、スス付着	灰	灰	灰	2mm以下の砂粒多 にぶい
38 *	東・口縁～底基	22.4	-	-	-	横ナデ、ナデ、スス付着	ナデ、指押さえ	灰	灰	灰	3mm以下の砂粒少 にぶい
39 *	* -	+	-	-	-	ナデ、スス付着	鉛・横ハケ日	灰	灰	灰	3mm以下の砂粒少 にぶい
40 S A 3	東・口縁部	-	-	-	-	ナデ、斜ハケ日、スス付着	ナデ	灰	灰	灰	5mm以下の砂粒少 にぶい
41 S A 4	東・底基	-	-	-	-	横ミガキ、スス付着	横ミガキ	灰	灰	灰	1mm程の黑色で光る砂粒 2~4mmの砂粒
42 *	鉛・口縁部	-	-	-	-	横ナデ、スス付着	ナデ	灰	灰	灰	1~2mmの砂粒 にぶい

※ 部位については崩壊のみは記載していない。

弥生土器觀察表(2)

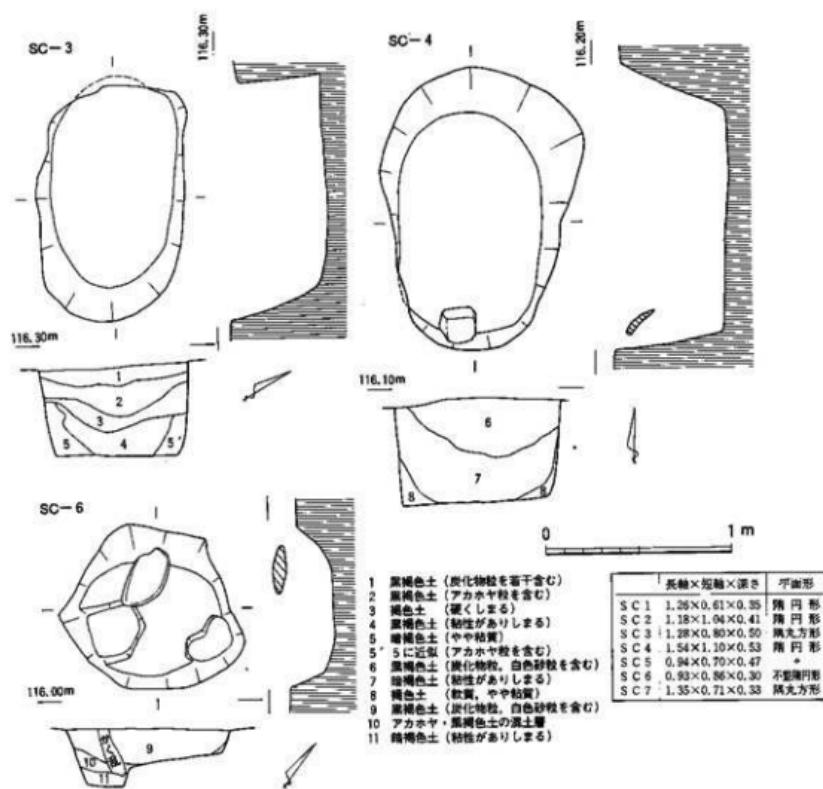
番号	出土 地點	器種部位	法量 (cm) 口径 底径 器高	調整・手法はか		色調 外側 内面	胎土の特徴			
				外 面	内 面					
43	S A 4	林・口縁部	(20.2)	— —	ナデ。スス付着	横ナデ	褐 にぶい 黒	1~2mmの砂粒		
44	S A 8	臺・口縁・底部	17.9	— —	横接縫状文、横ナデ。ナデ	横ナデ	黑 0.5~3mmの砂粒	1mm厚の黒色で光る砂粒		
45	+	—	—	— —	縦ミガキ、スス付着	縦ミガキ、スス付着	褐 にぶい 黒	1mm厚の黒色で光る砂粒 2~5mmの砂粒		
46	+	—・茎・底部	—	1.4	—	縦ミガキ	縦ミガキ	褐 にぶい 黒	0.5~3mmの砂粒	
47	+	—	—	1.6	—	縦ミガキ	ナデ	褐 にぶい 黒	1~2mmの砂粒	
48	+	—・ほほ形	(7.2)	1.7	7.8	横接縫状文、ナデ	ナデ、スス付着	黄 にぶい 黒	0.5~4mmの砂粒	
49	+	臺・口縁・底部	(25.2)	— —	横ナデ。ナデ。スス多量付着	ナデ、耐ハケ目、指お えき	褐 にぶい 黒	3mm以下の砂粒少		
50	+	—・口縁部	(24.0)	— —	横ナデ。ナデ。スス付着	横ナデ。ナデ	褐 にぶい 黒	1~3mmの砂粒		
51	+	—	(20.5)	— —	横ナデ。ナデ。スス付着	横ナデ	褐 にぶい 黒	0.5~2mmの砂粒		
52	+	—	—	— —	横ナデ。ナデ。スス付着	横ナデ	褐 にぶい 黒	1~3mmの砂粒		
53	+	—・口縁・底部	— —	— —	横ナデ。横斜ハケ目 指おえき、スス付着	横斜ハケ目、ナデ、指お えき	褐 にぶい 黒	2~5mmの砂粒		
54	+	—	—	— —	横ナデ。横斜ミガキ。ケズリ スス多量付着	横斜ミガキ スス付着	褐 にぶい 黒	1~5mmの砂粒多		
55	+	—	—	— —	ナデ。スス多量付着	ナデ、スス付着	褐 にぶい 黒	5mm以下の砂粒少		
56	+	—・茎・脚部	— —	— —	ナデ。スス付着	ナデ、スス付着	褐 にぶい 黒	2~6mmの砂粒		
57	+	—・耐・底部	—	2.2	—	縦ミガキ、ナデ。スス付着	ナデ	褐 にぶい 黒	投黄程 1~3mmの砂粒多	
58	+	—・底	—	2.4	—	縦ミガキ、スス付着	ナデ	褐 にぶい 黒	1~4mmの砂粒多	
59	+	—	(3.7)	— —	ナデ	ナデ	褐 にぶい 黒	0.5~2mmの砂粒		
60	+	—・口縁・底部	— —	— —	ナデ。スス付着、輪滑板	ナデ、スス付着	褐 にぶい 黒	0.5~3mmの砂粒		
61	S A 6	臺・茎・脚部	— —	— —	縦ハケ目、縦ミガキ。スス付着 えき	縦ハケ目、ナデ、指お えき	褐 にぶい 黒	1~7mmの砂粒		
62	+	—・口縁部	(5.2)	— —	横ナデ	横ナデ	浅黃性 にぶい	0.5~2mmの砂粒		
63	+	—・底	—	5.7	— —	ナデ。スス付着	ナデ、指おえき、爪 底、赤色斜面付着?	浅黃程 にぶい	0.5mm以下の黒色で光る砂粒 1.5~4mmの砂粒	
64	+	—	—	— —	縦ミガキ	ナデ	褐 にぶい 黒	1mm以下の黒色で光る砂粒 1~4mmの砂粒		
65	+	臺・足 形	17.5	3.8	26.0	ナデ。スス付着	ナデ、耐斜ハケ目。ス ス付着	浅黃程 にぶい	1~5mmの砂粒	
66	+	—・茎・底部	—	1.7	— —	ナデ(工具端部削)。スス付着	ナデ(工具端部削)	褐 灰白 にぶい	3~5mmの小砂多	
67	+	—	—	— —	— —	耐・縦ハケ目。スス付着	ナデ、スス付着	褐 にぶい 黒	1mm以下の黒色で光る砂粒 1~1.5mmの砂粒	
68	+	—・耐・底部	(3.0)	— —	ナデ。スス付着	耐ハケ目。ケズリ。ス ス付着	褐 にぶい 黒	1mmの黒色で光る砂粒 2~4mmの砂粒		
69	+	—	—	— —	ミガキ。ハケ目	耐ハケ目	褐 にぶい 黒	2~5mmの砂粒多		
70	+	—・底	—	3.2	—	ナデ。指おえき、スス付着	耐ハケ目、ナデ。スス 付着	褐 にぶい 黒	0.5mm以下の黒色で光る砂粒 2~4mmの砂粒	
71	+	—・ほほ形	(14.9)	(5.8)	14.2	ナデ。縦ハケ目。指おえき。ス ス付着	耐ハケ目、ナデ スス付着、指おえき	褐 にぶい 黒	1mmの黒色で光る砂粒 2~5mmの砂粒	
72	+	高坏・脚部	—	(15.0)	— —	ミガキ。ナデ	ナデ。ミガキ	褐 にぶい 黒	1mmの黒色で光る砂粒 2~5mmの砂粒	
73	+	—・口縁・底部	—	10.5	3.3	8.3	ナデ。ケズリ。指おえき	耐ハケ目。指おえき	褐 にぶい 黒	1~3mmの黒色で光る砂粒。 砂粒
74	+	—・ほほ形	4.0	1.6	3.6	ナデ	ナデ	褐 にぶい 黒	1~3mmの砂粒	
75	+	—・口縁・底部	— —	— —	— —	ナデ。横滑文。スス付着	横ナデ。ナデ	灰 にぶい 黒	3~5mmの小砂	
76	+	—・底	—	1.3	— —	ナデ	ナデ	褐 にぶい 黒	0.5~3mmの砂粒	
77	+	—・突	—	— —	— —	ナデ。剣み	—	褐 にぶい 黒	1~4mmの砂粒	
78	S A 7	高坏・脚部	— —	— —	ナデ	ナデ	褐 にぶい 黒	2~5mmの黒色で光る砂粒		
79	S A 9	臺・茎・脚部	—	2.4	—	ナデ。スス付着	ナデ。スス付着	褐 にぶい 黒	2~5mmの黒色で光る砂粒。 砂粒	
80	S A 9	臺・山形形	22.1	4.2	30.2	横ナデ。縦ハケ目。スス付着 えき	横ナデ。耐ハケ目。スス付着 えき	褐 にぶい 黒	1~3mmの黒色で光る砂粒 2~5mmの砂粒	
81	+	—・口縁・底部	(18.2)	— —	— —	ナデ。ケズリ。スス付着	ナデ。指おえき 耐ハケ目。スス付着	褐 にぶい 黒	2mm以下の砂粒少	
82	+	—・口縁・底部	(13.9)	3.4	17.8	ナデ。ケズリ	ナデ。指おえき。耐 ハケ目	褐 にぶい 黒	2~5mmの砂粒多	
83	+	—・底	—	— —	— —	剣・縦ハケ目。スス付着	ナデ。耐ハケ目。ス ス付着	褐 にぶい 黒	2~5mmの砂粒	
84	+	—・口縁・底部	— —	— —	— —	横ナデ。耐・縦ハケ目。スス 付着	耐ハケ目。スス付着	褐 にぶい 黒	2mm以下の砂粒少	

表 60は上略表

弥生土器観察表(3)

番号	出土 地點	器種部位	寸法 (cm)		調査・手法ほか		色調		粘土の特徴	
			口径	底径	器高	外面	内面	外面		
85	S A 9	壺・底部	—	3.5	—	ナデ。スス付着	ナデ。スス付着	淡黄灰	1mm以下の黒色で光る砂粒 2~5mmの砂粒	
86	+	高輪・坏部	—	—	—	ナデ	ナデ	淡黄	1~2mmの黒色で光る砂粒 2mm以下の砂粒少	
87	+	脚 部	(7.6)	—	横ハケ目	ナデ	浅黄	2mm以下の砂粒少		
88	+	骨口縁・底部	(22.1)	3.8	9.4	横ナデ。縦・横ミガキ。スス付 着	縦ミガキ。スス付着	淡黄	1mm以下の黒色で光る砂粒 2~3mmの砂粒	
89	b ~ 3	骨口縁・底部	(19.0)	—	—	口唇部に刻文。ミガキ	斜ハケ目。滑おさえ	淡黄	0.5~2mmの砂粒	
90	c ~ 3	+	脚 部	—	—	ナデ。ハケ目。刻み目突起	ナデ。滑おさえ	淡黄	3mm以下の黒色で光る砂粒。 砂粒少	
91	c ~ 3	+	LJ脚部	(12.1)	—	ナデ	ナデ	深黄	3~5mmの砂粒 砂粒少	
92	b ~ 3	+	+	—	—	横ナデ。彫縫波状文	横ナデ	灰	2mmの砂粒	
93	+	+	—	—	—	横ナデ。彫縫波状文	横ナデ	淡黄	1~3mmの砂粒	
94	+	脚・底部	—	2.2	—	ミガキ	ナデ	淡黄	0.5~4mmの砂粒	
95	c ~ 1	骨口縁・脚部	(21.2)	—	—	横ナデ。縦・斜ハケ目。スス付 着	横ナデ。斜ハケ目	淡黄	0.5~2mmの砂粒	
96	c ~ 3	+	骨口縁・底部	(22.2)	—	横ナデ。スス付着	横ナデ	淡黄	3~5mmの砂粒	
97	c ~ 3	+	口縁部	(21.5)	—	横ナデ。斜ハケ目	斜ハケ目。ナデ	淡黄	0.5~2mmの砂粒少	
98	+	骨口縁・底部	(20.0)	3.7	—	ナデ。ケズリ	横・斜ハケ目。ナデ スス付着	淡黄	1~2mmの黒色で光る砂粒 2~4mmの砂粒	
99	c ~ 3	+	日出定期	26.4	5.6	32.5	横ナデ。斜ハケ目。スス付着 人	淡黄	1~2mmの黒色で光る砂粒 2~4mmの砂粒	
100	c ~ 3	d ~ 3	+	+	14.5	3.1	19.3	横ナデ。ナデ。滑おさえ。スス付 着	淡黄	1~3mmの黒色で光る砂粒。 砂粒少
101	c ~ 1	+	+	(14.4)	4.0	22.3	ナデ。滑おさえ。ケズリ。スス付 着	淡黄	1~3mmの黒色で光る砂粒 2~6mmの砂粒	
102	c ~ 3	+	脚・底部	—	(4.5)	—	ケズリ後でいねいなナデ。スス 付着	淡黄	1~2mmの黒色で光る砂粒 2~4mmの砂粒	
103	c ~ 3	+	+	—	4.9	—	ケズリ。ナデ	深黄。不明	1~2mmの黒色で光る砂粒 2~5mmの砂粒	
104	c ~ 3	+	+	—	4.1	—	ナデ	ナデ	1~2mmの黒色で光る砂粒 2~5mmの砂粒	
105	c ~ 3	+	骨口縁・脚部	(16.4)	—	—	ナデ。斜ハケ目。スス付着	淡黄	1~2mmの黒色で光る砂粒 2~5mmの砂粒	
106	c ~ 3	+	+	(13.4)	—	—	ナデ。斜・縦ハケ目。スス付着	淡黄	1~2mmの黒色で光る砂粒 0.5~1mmの砂粒	
107	+	口縁部	—	—	—	横ナデ。ナデ	ナデ。斜ハケ目	淡黄	0.5~4mmの砂粒	
108	c ~ 1	高坏・坏部	(26.7)	—	—	横ナデ。縦ハケ目。縦ミガキ	横ミガキ	淡黄	3mm以下の砂粒多	
109	+	+	+	—	—	ナデ	ナデ。横続面に刻み	淡黄	1~3mmの黒色で光る砂粒少 1~3mmの砂粒多	
110	+	+	+	—	—	ナデ。横ナデ。縦ミガキ	ナデ	淡黄	1~3mmの黒色で光る砂粒 砂粒少	
111	c ~ 3	+	坏 部	—	—	ナデ	ナデ。横続面に刻み	淡黄	2mm以下の黒色で光る砂粒 2~3mmの砂粒	
112	+	脚 部	(17.1)	—	—	横ミガキ。麻孔	ヨコナデ	淡黄	0.5mmの黒色で光る砂粒 1~2mmの砂粒少	
113	器 台	—	—	—	—	横ナデ。彫縫波状文上に縦の突 起。縦ミガキ	ヨコナデ。縦ミガキ	淡黄	1mm以下の黒色で光る砂粒少 1~4mmの砂粒	
114	骨口縁・底部	—	—	—	手づくね	—	浅黄	6mm以下の砂粒多		
115	B 動子土器製品	—	—	—	手づくね	—	淡黄	1mm以下の黒色で光る砂粒 2~2.5mmの砂粒		
116	B	壺・口縁・底部	(17.7)	6.8	—	横ナデ。彫縫波状文。刻み目突 起。縦・斜・縦ミガキ	横ナデ。滑おさえ。横 ミガキ。ヘラ状工具痕	淡黄	2mmの黒色で光る砂粒 2~7mmの砂粒	
117	+	+	+	(9.7)	2.4	17.3	ナデ。縦ミガキ。スス付着	横ナデ。スス付着	淡黄	2~3mmの黒色で光る砂粒 2~5mmの砂粒多
118	+	+	脚 部	—	4.3	—	ナデ。スス付着	横ナデ。ヘラ状工具痕	淡黄 にぬい 滑	0.5~3mmの黒色で光る砂粒。 砂粒少

第3節 時期不明確な遺構と遺物



第41図 土坑実測図(2) (1/30)

土坑（第41図）

アカホヤ上面で7基の土坑を検出した。平面形は橢丸方形・椭円形で袋状になるものは見られない。S C 4・S C 6には25cm大の偏平な河原石が埋土上層に置かれていた。いずれの土坑からも遺物の出土は見られず、時期・性格ともに不明である。

石器（第42~47図）

石器は遺構内外から数多く出土しているが、弥生時代の堅穴住居址に縄文時代の石器が流れ込んで出土し、また、包含層中にレベル差なく混入しており明確な時期を決定する要素に乏しい。

尖頭状石器

第Ⅳ層から砾群に伴って出土している。やや縦長の二等辺三角形状を呈する。チャート製。

石錐

6はS A 1から、7は砾群中からの出土で主要剥離面を残す。チャート製。8は第Ⅱ層からの出土で頁岩製。9はB区の表土中から出土している。チャート製。

石匙

S A 2堆土から出土している。やや湾曲した刃部は細かい加工が見られ、一部摺理面・主要剥離面を残す。流紋岩製。

スクレイパー

12は自然面を有する長方形剝片の一側面に加工を施す。流紋岩製。13は自然面を有する厚手の剝片の側面に加工を施す。頁岩製。14は打面を有する半月形の剝片に若干の加工を施す。安山岩製。15は自然面を有する剝片の一部に加工を施す。頁岩製。24・25は片面に自然面を残す剝片の周囲を粗く打ち欠いたものである。硬質の砂岩製。26・27も同じく円形のスクレイパーであるが、大型で周囲の加工も大まかな仕上げである。砂岩製。12~15・24・25は砾群中からの、26・27は第Ⅱ層からの出土である。

使用痕を有する剝片

石材には流紋岩16、頁岩(17・20~22)、安山岩(18・19)が用いられ、全てに主要剥離面が見られる。16・17・20・21には打面が残り、16・18には自然面が残る。使用部位では、剝片の一側面のもの(16~18)と、両側面あるいは二カ所のもの(19~22)がある。16はS A 6堆土から、17は第Ⅱ層から、他は砾群中からの出土である。

石斧

28は長方形の剝片の周囲を粗く成形したものである。砂岩製。29は欠損品であるが、長方形の剝片を両側面から打ち欠き、グリップ状に成形している。砂岩製。共に第Ⅱ層からの出土である。30はB区から出土した磨製石斧である。丁寧に全体を研磨しているが、上端部には敲打の痕が見られ、また刃部には刃こぼれが見られる。

櫛器

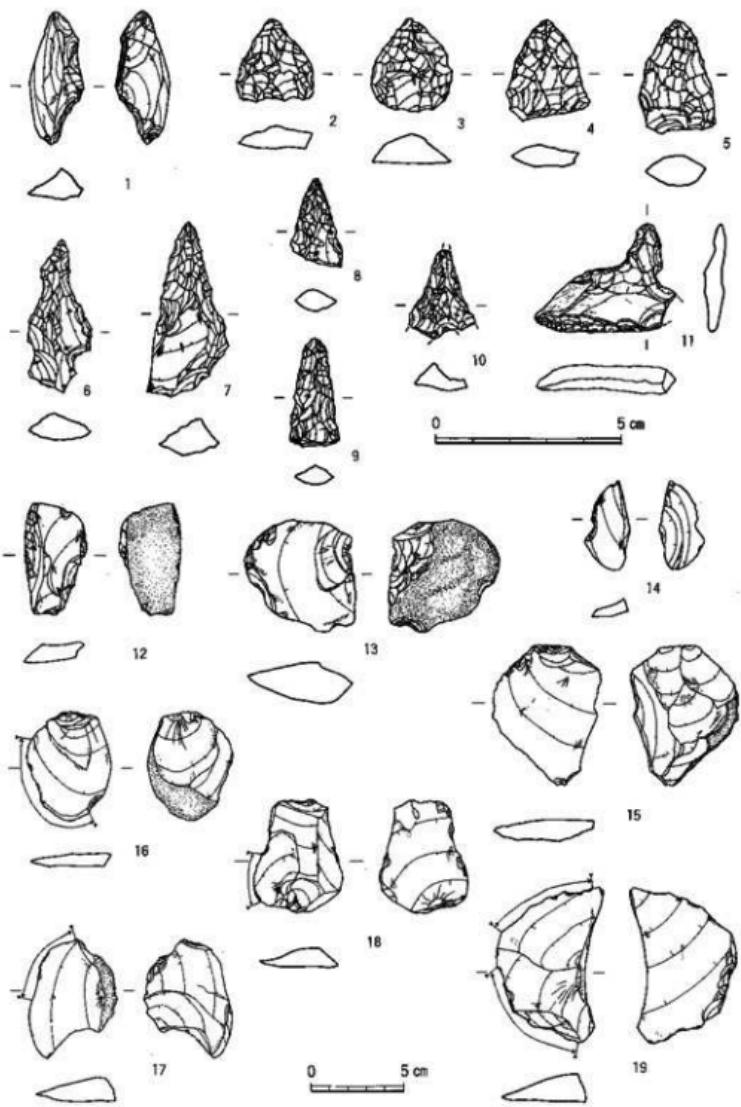
人頭大の砂岩を割って得られた剝片の、自然面を残しながら全周あるいは一部を粗く打ち欠き成形している(34~37)。全て第Ⅱ層からの出土である。

石核

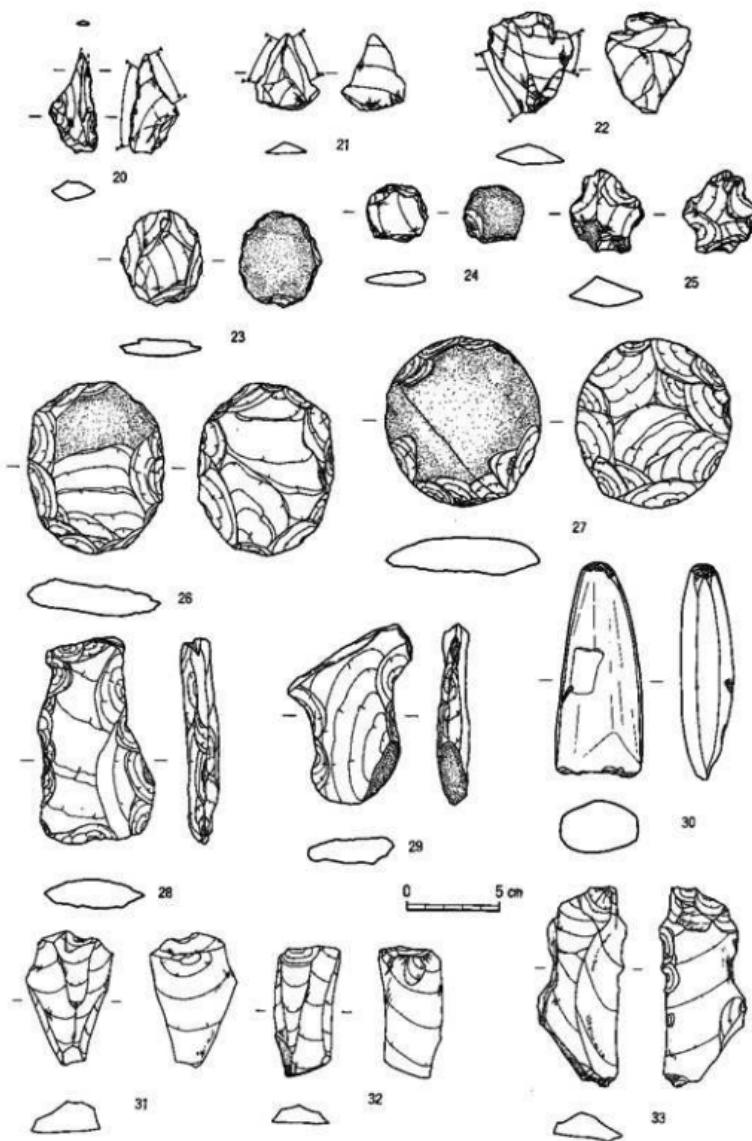
38は数回の打撃で打面を形成し、そこから剝片を取っている。39は打面を転移させながら剝片を取っている。38・39は流紋岩である。

石錐

石錐は8点出土した。全て砂岩で長軸を打ち欠いている。40は砾群中から、47はB区から、他

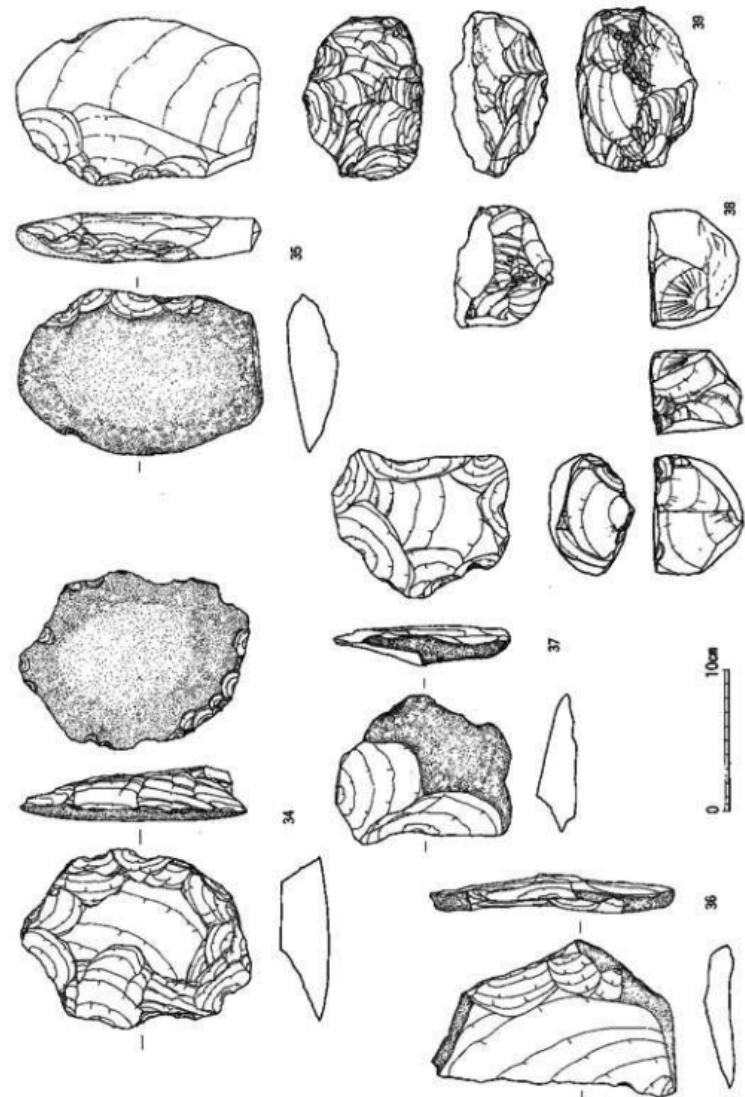


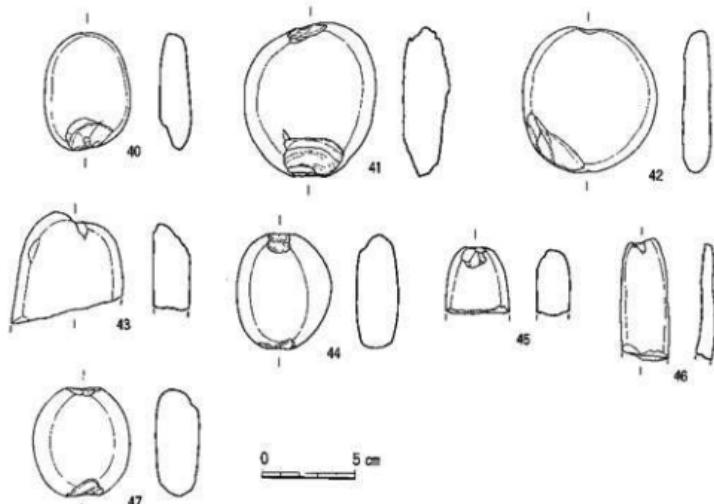
第42図 石器実測図(1) (1~11→2/3, 12~19→1/3)



第43図 石器実測図(2) (1 / 3)

第44図 石器実測図(3) (1 / 4)





第45図 石器実測図(4) (1/3)

は第Ⅱ層から出土している。42は風化のため打ち欠きの痕がはっきりしない。46の石材は砂岩であるが弱い熱変成を受けている。

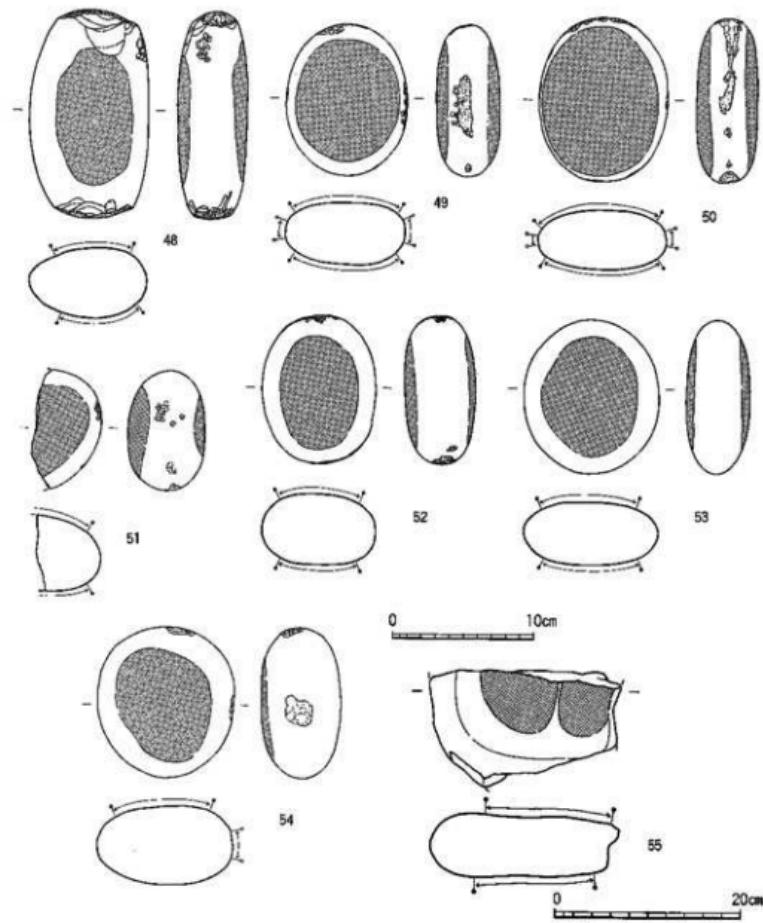
磨石・石皿

磨石は尾鈴山酸性岩と砂岩の二種類が見られた。前者は50~54である。48~52・54は側面に蔽打痕を持つ。48~50は礫群中から、51~53は第Ⅱ層から、54はB区からの出土である。55の石皿は砂岩で、両面に使用痕が見られる。第Ⅱ層から出土している。

石鎚

石鎚は最も多く出土した石器で、第Ⅱ層、住居址埋土、礫群中から66点出土している。黒塙石8点（そのうち姫島産は1点）、安山岩2点、頁岩2点、砂岩1点で他はチャート製である。このうちチャート製石鎚には特異なものが1点見られた。早期の礫群中からの出土で、二等辺三角形の基部を抉った形状であるが、石鎚作成に通常見られる打ち欠きや研磨等の技法は見られず、刃部にあたる両側面だけを磨っている。このため刃部は鋭利に尖らず、石鎚とすることにも若干の疑問は残る。

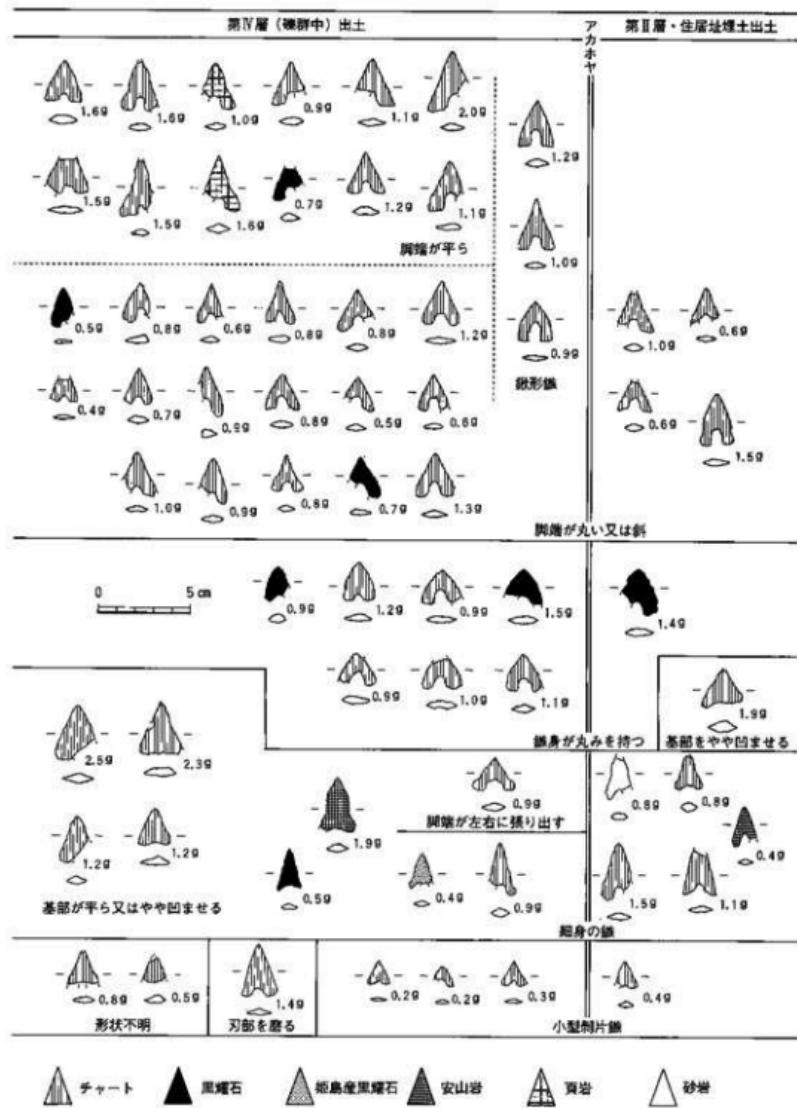
石鎚についてはその属性のうち形態（特に先端部）、大きさ、重量が特に重要な意味を持つと考えられる。しかし、矢柄を装着した全体のバランスについては不明であるため、いま一つ原像に迫りえない。ここでは形態・大きさ・石材を示す分類図を作成した（第47図）。この分類基準は極めて主観的・感覚的なものである。



第46図 石器実測図(5) (48~54→1/4, 55→1/6)

その他の石器

10は第Ⅱ層からの出土で、全体に細かい加工を施しト字形に仕上げる。チャート製。23は一部自然面を残しながら、周囲を粗く打ち欠いている。S A 9 埋土から出土している。ホルンフェルス製。31・32は一定方向から剥片を取っている。31は流紋岩、32は頁岩である。33は泥質ホルンフェルスで先端部に若干の加工を施す。



第47図 石器分類図（数値は重量）（1／3）

第IV章 まとめ

内野々遺跡は、小規模な沖積地に臨む低丘陵の縁に立地し、縄文時代から古墳時代まで断続的に営まれた集落である。縄文時代については、住居址の検出はみなかったものの、礫群・集石遺構の検出、大量な土器の出土はそこ人々の生活があったことを推し量るにあまりあるものである。今回の調査は、この地域の歴史もまた歴史の一隅を垣間見るとともに、県内他地域と県北、さらには瀬戸内地方をも含めた広範囲な人々の交流を想起させるものであった。以下、縄文時代・弥生時代の遺構と遺物について簡略ではあるがまとめを述べる。

縄文時代について

第IV層より縄文早期の礫群と集石遺構23基が検出された。この夥しい量の礫群は平坦面に見られ1,000m²以上にも及ぶ。使用されている礫は砂岩・頁岩・チャート類が主で、付近の耳川、あるいは田代川で採集したものであろう。礫群は傾斜地であるB区には見られず、生活面と考えられる平坦地に広がっており、単に廃棄礫という認識では説明がつけにくい。このことは高鍋町大戸ノ口第2遺跡においても指摘されている¹¹⁾。集石遺構は礫群同レベル及び下層に検出された。集石遺構の用途については、屋外炉あるいは民族例に見られる石蒸料理などが推定されており、いずれも調理施設としての認識がなされている¹²⁾。田野町天神河内第1遺跡では集石遺構の礫に残存していた脂肪酸分析の結果、アカハラ・モズ・キジなどの野鳥やイノシシ・シカなどの動物類に由来する脂肪酸が確認されている¹³⁾。現段階では集石遺構を調理施設として捉えておくことは妥当であろう。内野々遺跡で検出された集石遺構には、第III章で概観したようにいくつかの形態が存在した。ここで注目されるのは、礫群よりも下位で検出されたS I 15-19が全て掘り込みを持ち配石が見られたということである。礫群同レベルで検出されたものには、掘り込みは見られても明確な配石が伴っていない。このことは、時期の降下に伴う簡略化傾向として捉えられ、また、この簡略化は調理機能の土器への依存度の高まりと無関係ではないだろう。しかし、集石遺構は継続して使用され、また、本遺跡では検出されていないが後期の集石遺構も各地で報告されている¹⁴⁾ことを考えるならば、調理施設としての集石遺構の使用に日常・非日常という使い分けを想定することも可能であろう。

出土した縄文土器は、早期のものが最も多く前平式、下剥峰式、早水台式などが見られた。押型文土器は外反しあじめた口縁部に横位と縱位の施文が混在するもの、粗雑化した縱位の押型文が施されるものなど田村式に移行する時期と考えられる。また、押型文土器や無文土器の中に鐵維の混入が確認されたことは注目される。

県内で出土した希薄だった前期・中期の土器も見られた。森C・D式土器は西・中九州を中心に分布し前期末に比定される。船元II式土器の出土は、瀬戸内地方との直接的あるいは間接的な交流を示すものである。船元式土器、あるいはその影響を受け在地化したキャリバー形の土器は天

神河内第1遺跡、大戸ノ口第2遺跡、北方町笠下遺跡⁽⁵⁾などに見られる。

後・晩期のものは少量ではあるが、西平式土器、三万田式土器の出土が見られた。組織痕を有する土器も見られる。突帯文土器には刻みが見られず、刻目突帯文土器出現の前段階であろうと思われる。孔列文土器の出土も注目される。

石器には石鏃、石匙、石錐、石錐、磨石、石皿などが見られた。石鏃には姫島産黒耀石が見られた。磨石には尾鈴山酸性岩類が多く用いられている。この石材は天神河内第1遺跡、須木村大年谷遺跡、高崎町海藏寺遺跡、南郷町崩野遺跡、串間市下弓田遺跡など広く県内に分布することが確認されつつある⁽⁶⁾。

弥生時代について

弥生時代の住居址は10軒検出された。S A 1、S A 3、S A 8は張り出し部を持つ。S A 1は櫛描波状文を施す複合口縁壺が見られた。S A 3には櫛描波状文を持つ無頸壺や、丸底気味の平底となる壺底部、胴上部が最大径となり口縁部が外反しながら延びる壺がみられる。S A 8は検出住居址中最大のものである。櫛描波状文を施す複合口縁壺が見られ、壺形土器の底部は丸底に近づきながらも平底を呈す。壺形土器は頭部から口縁部にかけて滑らかに外反しながら延びるものが多く、胴上部に最大径を持つ。底部は平底である。これらは全て後期終末と考えられる。なお、S A 8は4軒の切り合いを見せるが、その切り合い関係はS A 5 → S A 4 → S A 8、S A 10 → S A 8となる。S A 5・S A 10からは圓化できる遺物は出土していないが付近に見られた遺物から、また、S A 4については出土した壺の様相から、S A 8と大きく時期を異にするとは考えにくく、後期後半から終末の間で捉えておきたい。S A 6・S A 9は壺形土器の底部に平底を残し、壺形土器には上げ底と平底が見られる。頭部には明瞭な稜は見られず、胴上部に最大径を持つ。両者ともに後期終末と考える。S A 6からは異なる3タイプの石包丁が出土しており注目される⁽⁷⁾。

S A 2は床上に核になる砂岩と、そこから剥ぎ取られた剥片（5～10cm大、3～5mm厚）がかたまって見られた。何らかの石器作成に関するものと思われるが、そのような薄手の砂岩剥片を用いた石器は出土しておらず、その用途は未だ不明である。6の脚付壺は丁寧に磨かれており、その器形は脚を除けば小型丸底壺といつても差し支えない。8はタマネギ形の胴部を持つ長頸壺で、乳房状の底部を呈す。宮崎学園都市前原南遺跡⁽⁸⁾においても古墳時代初頭とされた住居址から同様の底部を持つ長頸壺が出土している。10の櫛描波状文を施す複合口縁壺や26・27の若干上げ底の残る壺形土器など後期終末的要素を残しながらも、6・8の存在を考慮するならばS A 2は古墳時代初頭に位置づけるのが妥当であろう。

S A 7はやや膨らみを持つ高杯脚部が出土しているが、1点のみの出土であり遺構の残りも良好とは言えない。判断を下すことは危険であるが、後期終末から古墳時代初頭の幅の中で捉えておきたい。

検出された住居址からは、縄文以降の内野々遺跡がごく限られた時期のみ営まれた集落として見えてくるが、89の壺形土器は屈曲する頸部と大きく外湾する口縁部から、検出住居址よりも遅る時期と考えられる。S A 8 に流れ込んで出土した60の壺形土器は古墳時代前期のものと思われ、また、遺跡範囲内で須恵器が表採されていることなどから、周囲に当該時期の遺構が存在した可能性もある。

おわりに

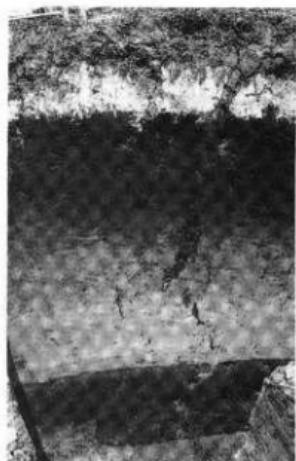
近年、地域開発事業は活発に行われている。その影で姿を消してゆく遺跡も少なくない。内野々遺跡を調査する契機となった林業試験場建設は、林産業を中心とするこの地域にとって歓迎されることである。一方では、夏の酷暑の中汗を流しながら発掘調査に参加・協力下さった地元の方々がいる。このことは、地域開発事業と埋蔵文化財保護、言い換えれば新しい歴史を作っていくこうとする行為と自分たちの歴史を守ろうとする行為である。その間にいる我々調査員は何をすべきなのか。貴重な情報を長い年月にわたり保存し続けた遺跡に接し、現場や遺物整理の段階でその全てを汲み取ることができたであろうか。少なくとも知りえた情報の全てを社会に還元してゆくことが、我々の担うべき役割である気がしてならない。こうした自戒を抱きつつ、今後明らかになるであろう様々な情報を公表してゆきたい。

註

- (1) 「大戸ノ口第2遺跡」 高鍋町教育委員会 1991
- (2) 高鍋町水谷原遺跡において、調査担当者は調理施設としての集石遺構以外に焼却供給源としての用途を想定している。『水谷原遺跡』 宮崎県教育委員会 1988
- (3) 「天神河内第1遺跡」 宮崎県教育委員会 1991
- (4) 例えば
「九野第2遺跡」 田野町教育委員会 1990
「崩野遺跡」 I・II 南郷町教育委員会 1990・1991
- (5) 「笠下遺跡」 北方町教育委員会 1991
- (6) 宍戸章氏の御教示による。
- (7) 都農町新別府下原遺跡のA-1区1号住居から異なる2種の石包丁が出土し弥生時代後期終末に比定されている。『新別府下原遺跡』 都農町教育委員会 1990
- (8) 「前原南遺跡」『宮崎学園都市遺跡発掘調査報告書』第4集 宮崎県教育委員会 1988
そのほか、日向市百町原地区遺跡、都農町新別府下原遺跡、宮崎市源藤遺跡にも類似した底部をもつものが見られ、弥生時代後期終末に比定されている。
『百町原地区遺跡』 日向市教育委員会 1989
『源藤遺跡』 宮崎市教育委員会 1987



遺跡全景



基本層序

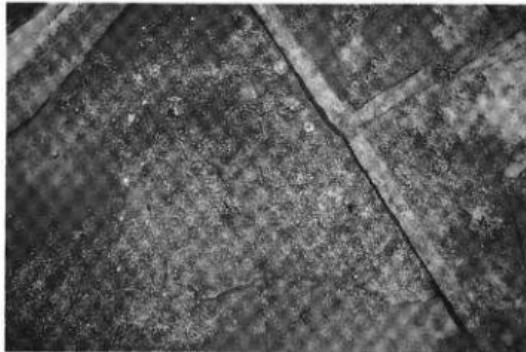


構群検出状況

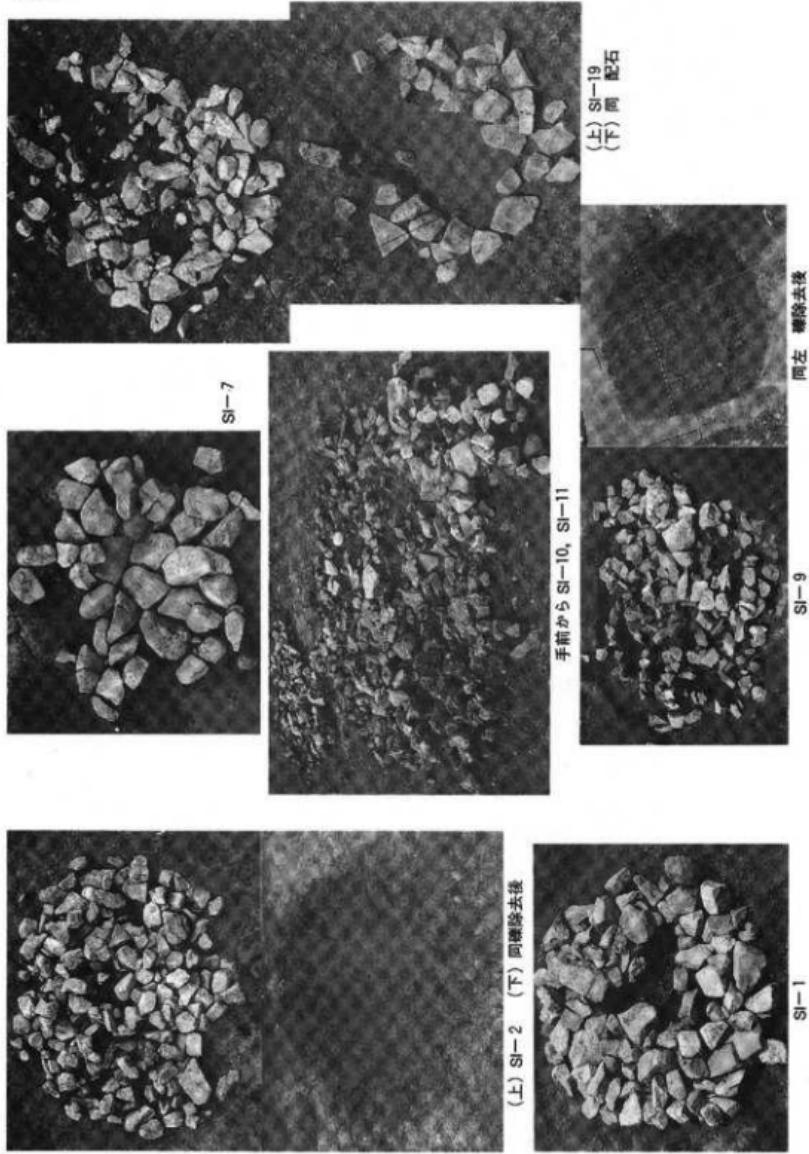


基本層序（中央は SI-23断面）

同上



図版 2



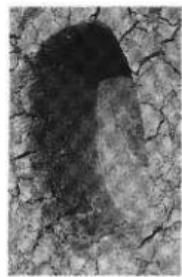
図版3



スクレイバー出土状況



SC-13 断面



SC-11



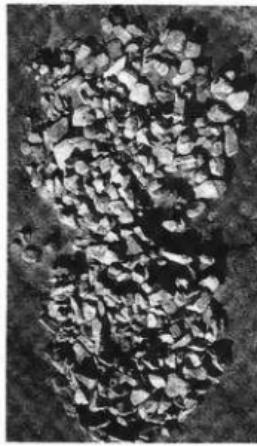
SC-22



SC-15
石作業



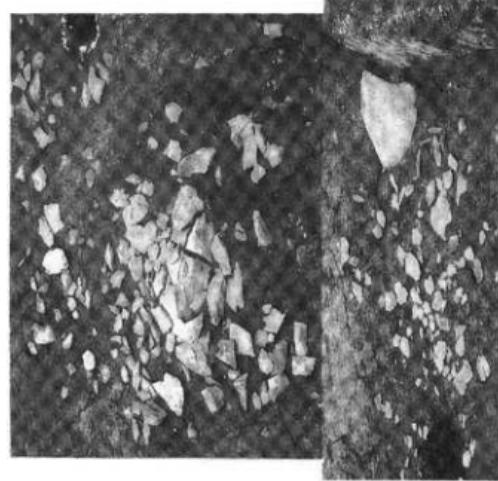
(上) 左から SC-15, SC-16,
(下) 配石 SC-16, SC-15



図版 4



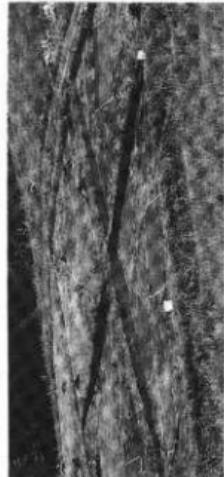
SA-2 完整状況



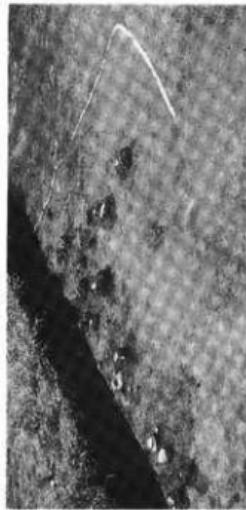
SA-2 破片検出状況



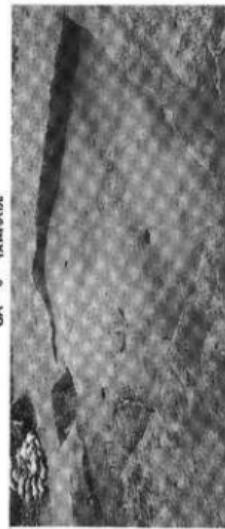
SA-9のみ未題
口



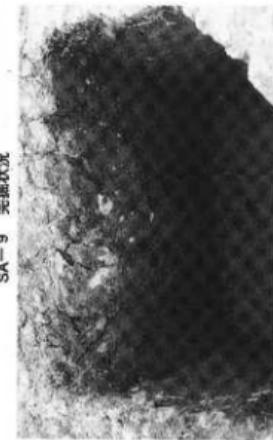
住居址 検出状況



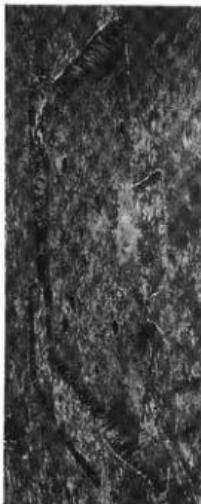
SA-9 植出状況



SA-9 完整状況



SC-3 断面



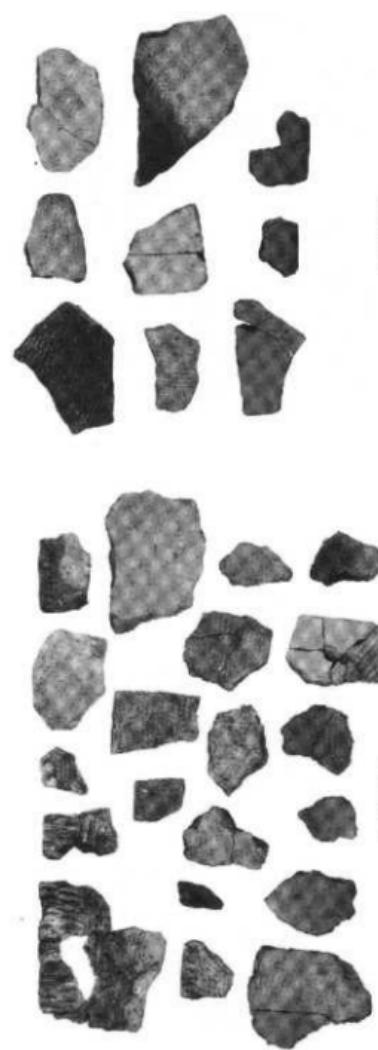
SA-3



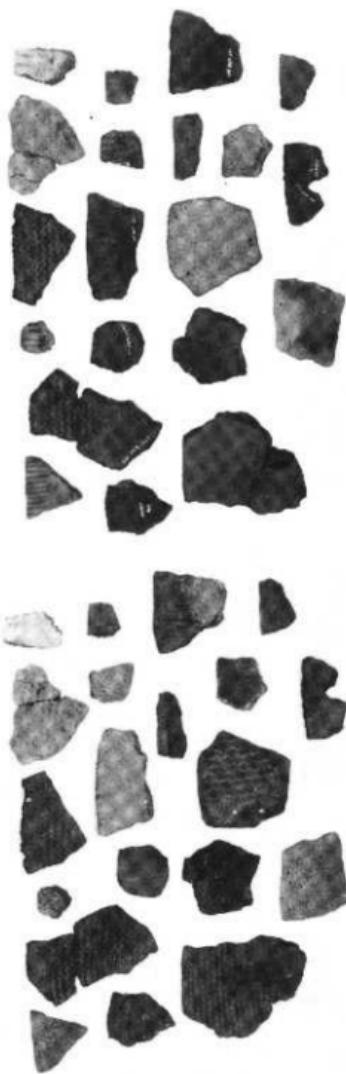
SA-7



SC-6



I期土器(1)

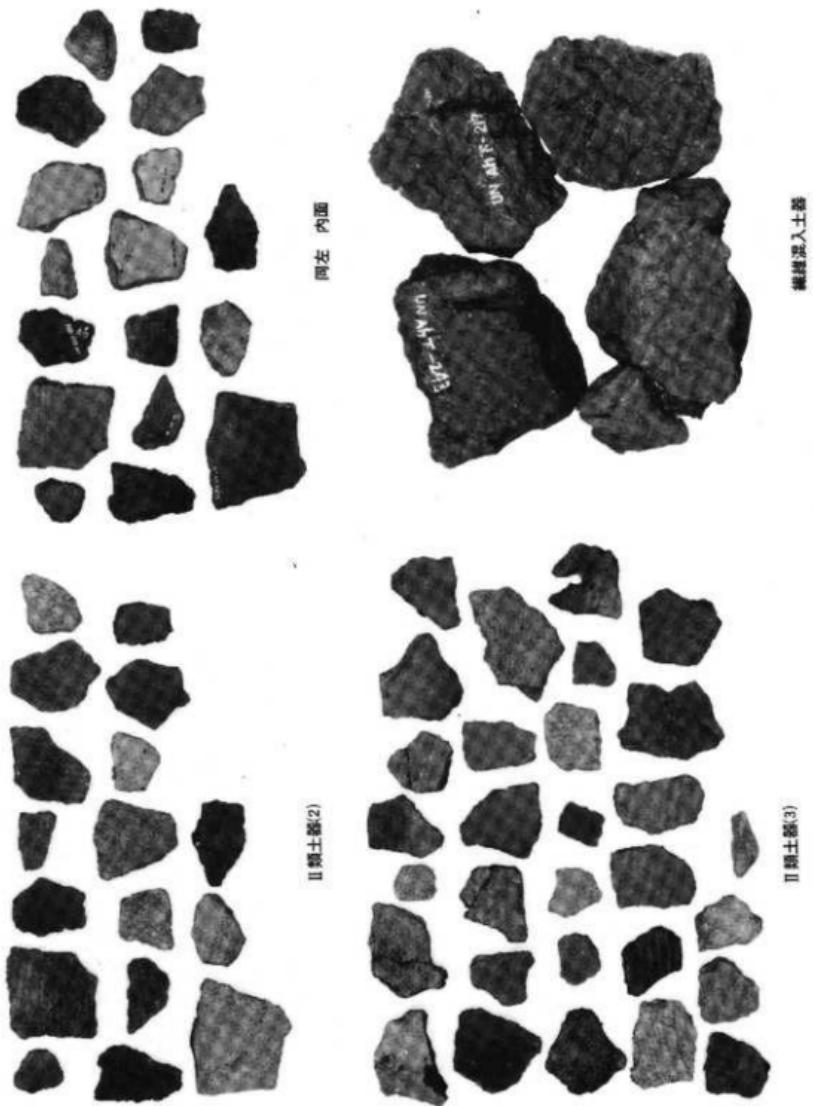


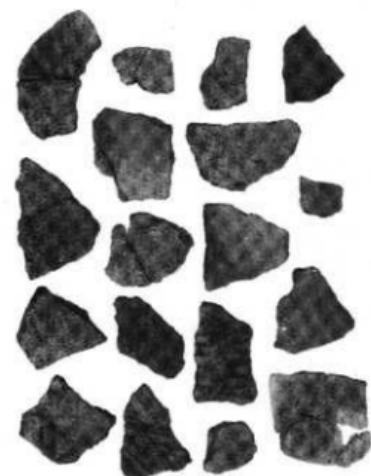
I期土器(2)

同左 内面

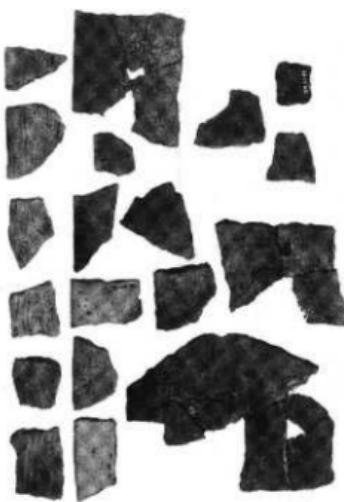
II期土器(1)

図版 7

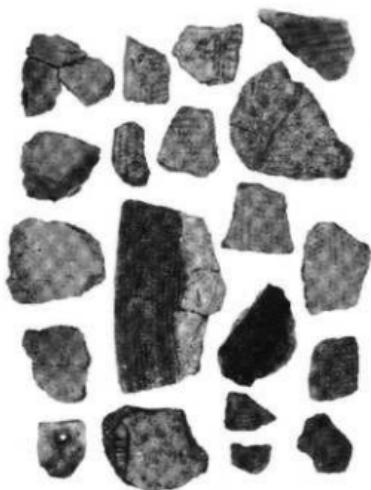




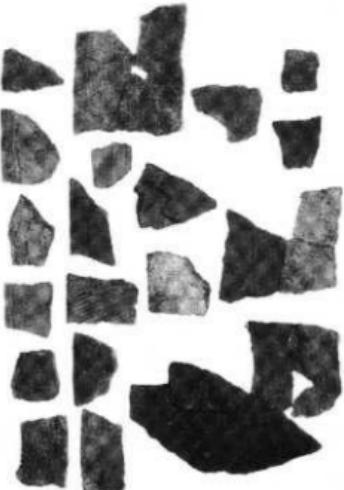
IV 瓦器(2)



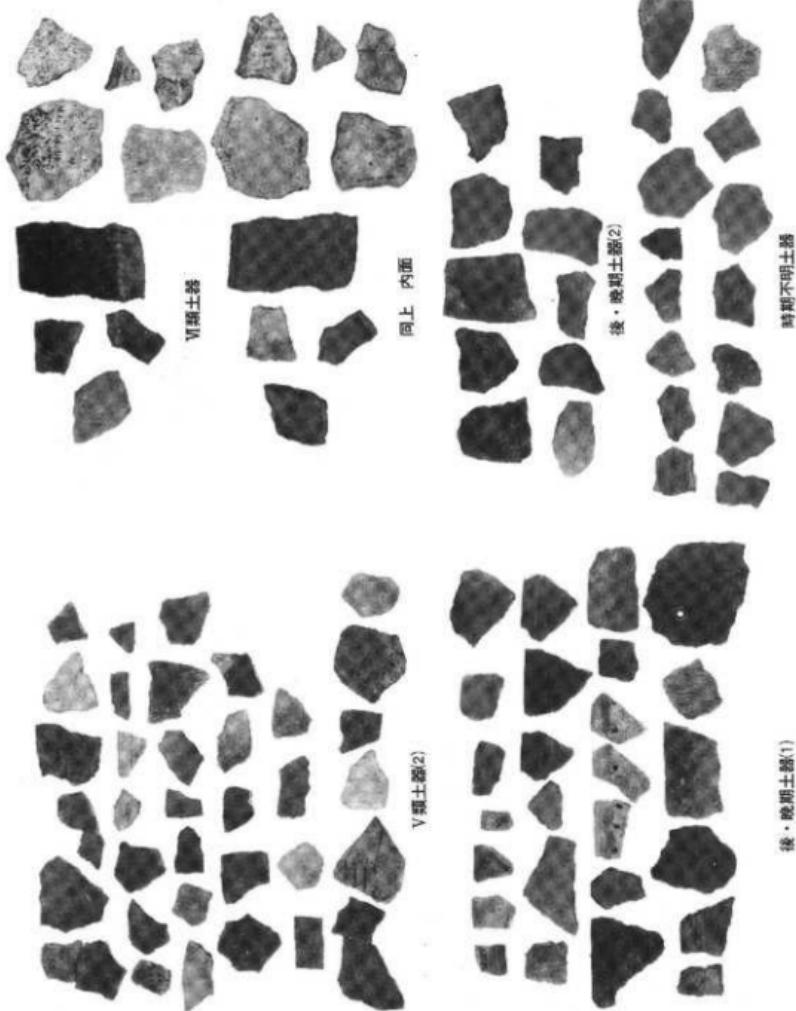
同左 内面

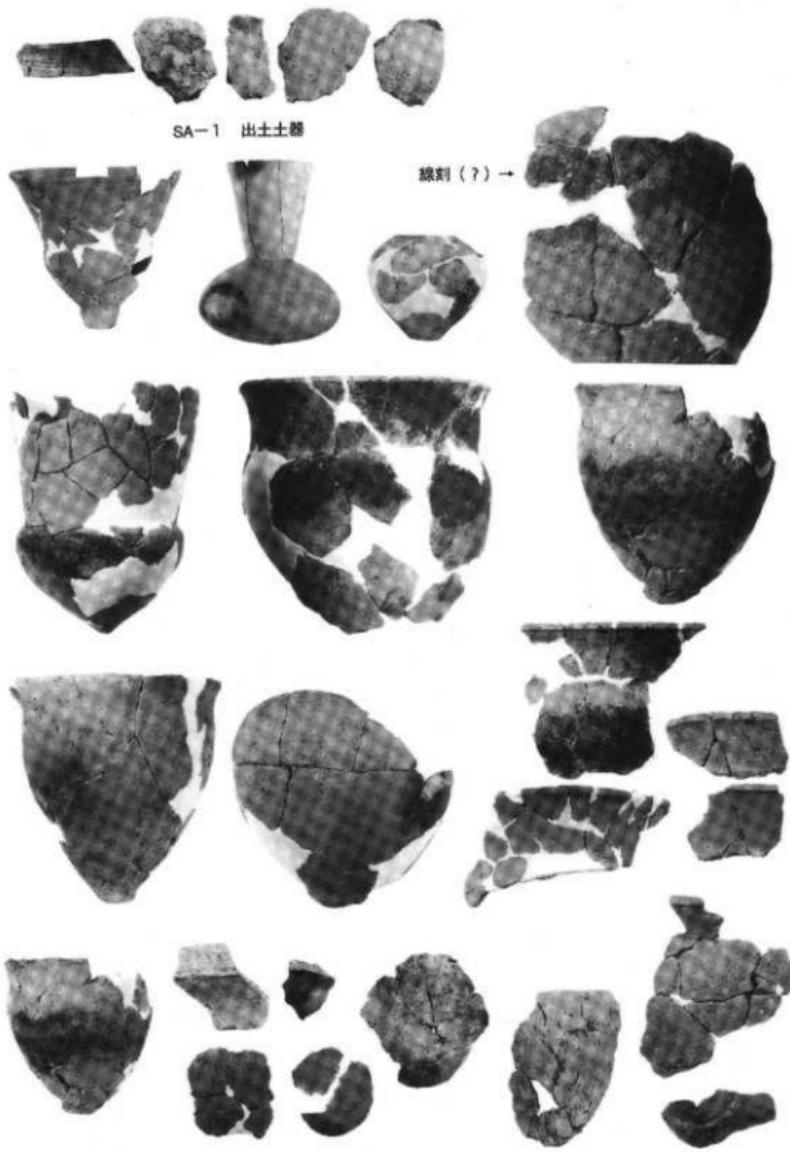


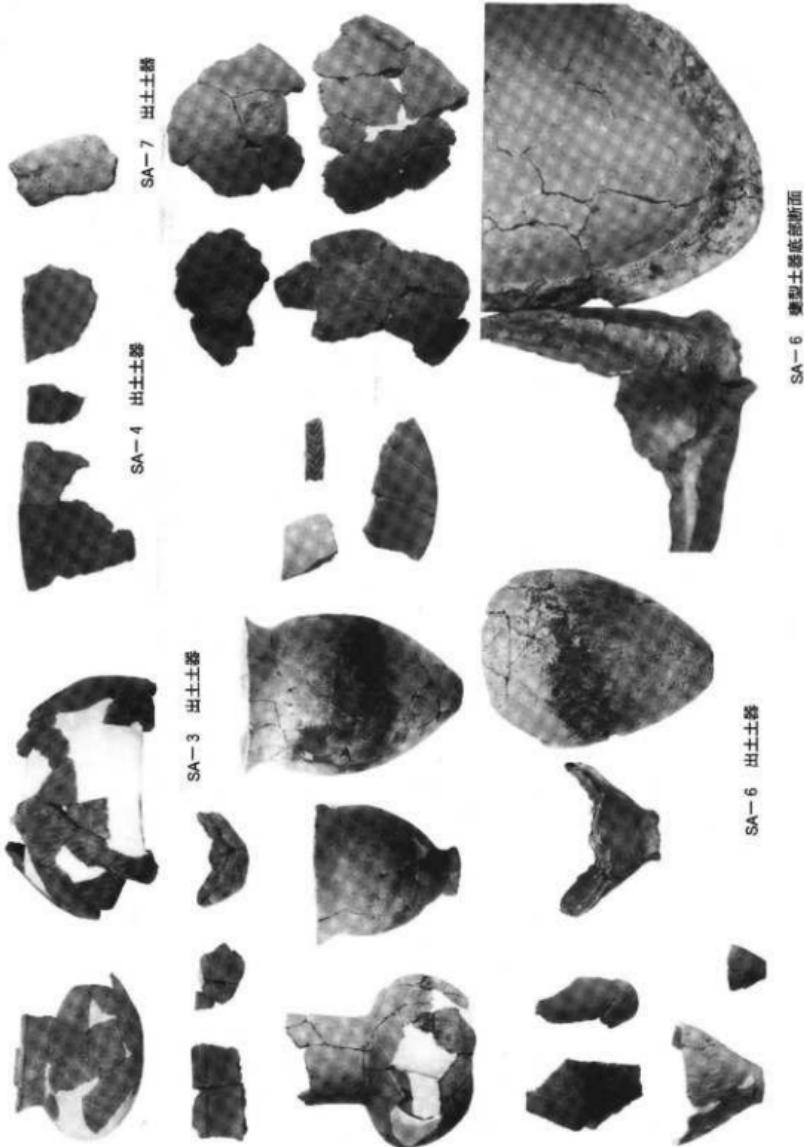
III 瓦器・IV 瓦器(1)



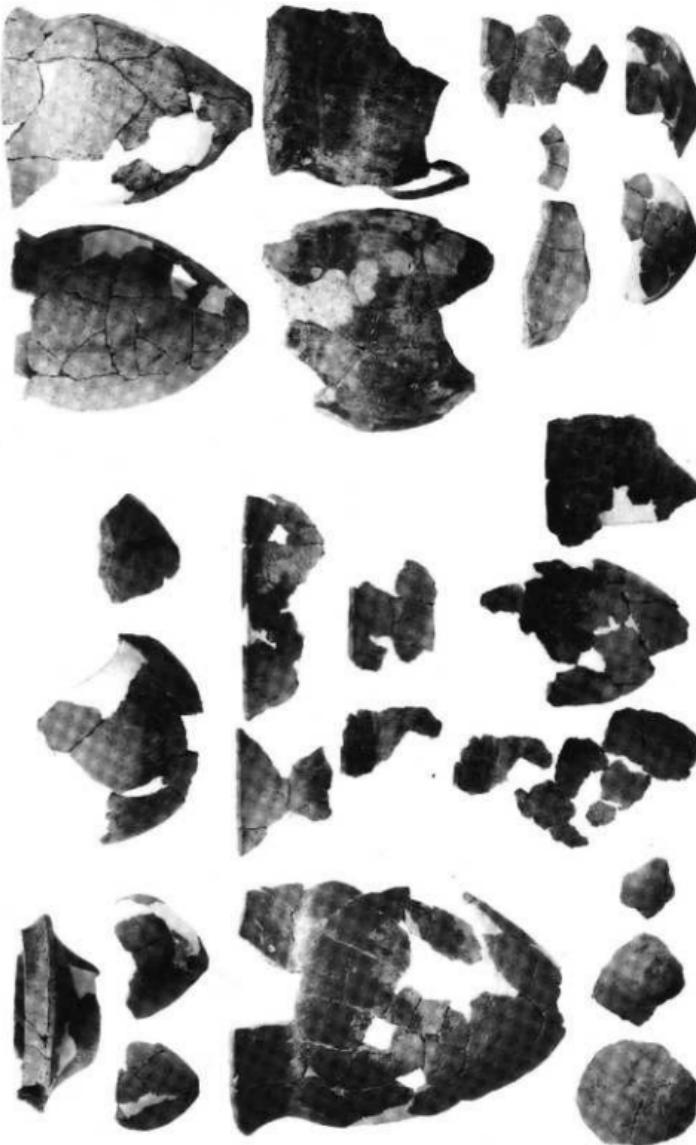
V 瓦器(1)





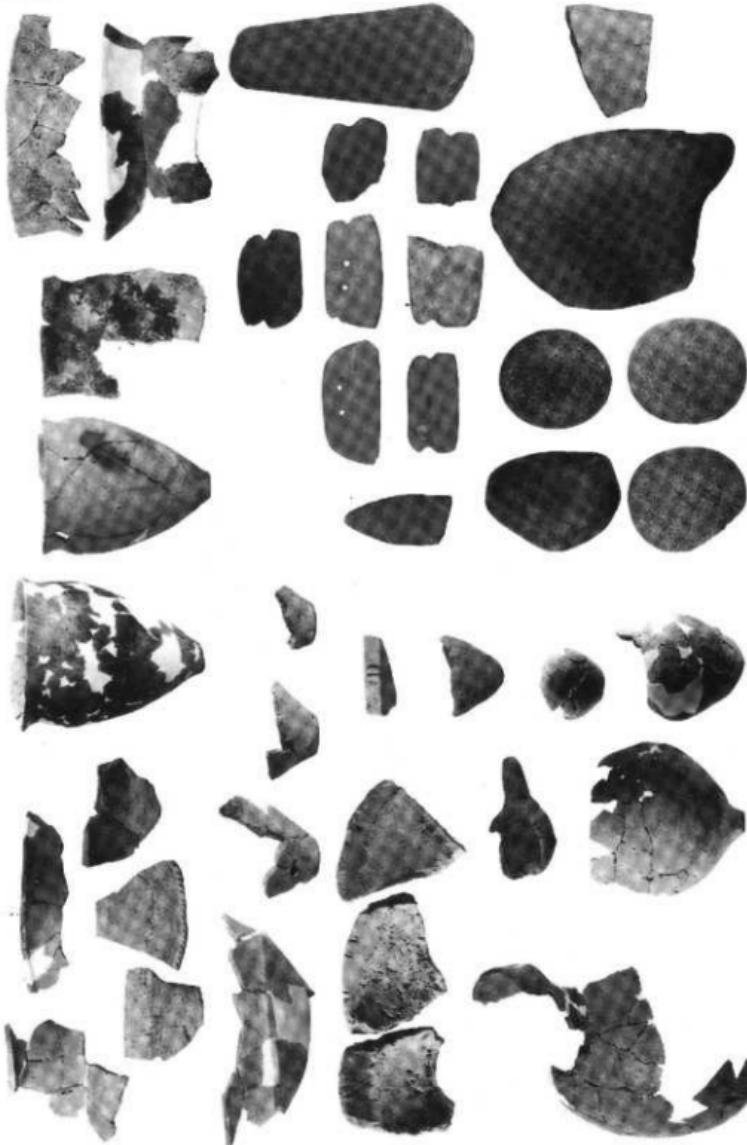


圖版 12



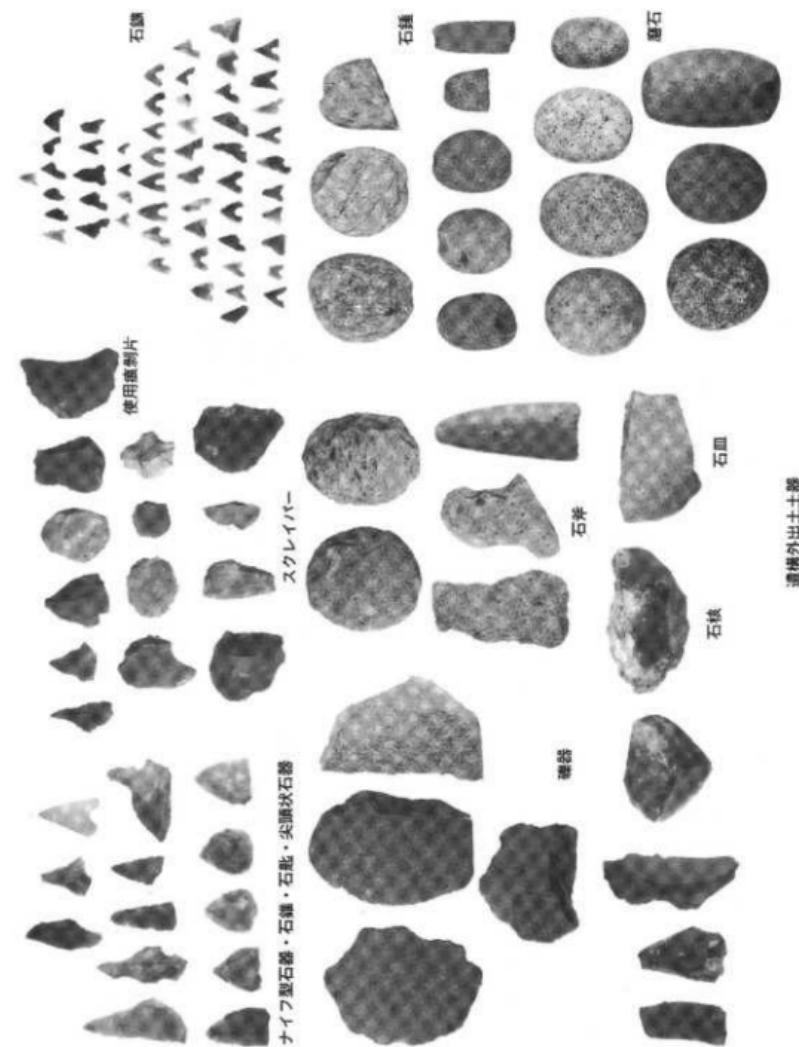
SA-9 出土土器

SA-8 出土土器



住居址出土及び発生時代石器

遺構外及びB区出土土器



松谷曉子（東京大学総合研究資料館）

住居址床面から出土した長頸瓶底部に付着していた炭化物の識別を依頼された。筆者がこれまで行ってきた研究の一部に、実体顕微鏡下で外形から判断できる種子が残っていない場合に、走査型電子顕微鏡での観察によって植物の種類を識別しようと試みてきた。未解決の試料も残っているが、類例が増えるのを待って判断できた場合もある。最近経験した例では、古墳時代の土器の中に入っていた炭化物からイネ穂やキビ穂の破片に類似した細胞構造が検出された（松谷1991a）こともあり、内野々遺跡から出土した炭化物からも何等かの植物構造が検出されないかどうか、走査型電子顕微鏡による観察を試みた。

実体顕微鏡での観察では、外形から推察できる粒状物の存在は明瞭ではない。しかし、粉状ではなく、植物らしき存在が残っているように感じられる。そこで、少量を残してA・B・Cの三試料に分割し、アルミニウムの試料台に接着し、白金蒸着後、走査型電子顕微鏡（東京大学総合研究資料館所蔵の日立S-700型）での観察を行った。

その結果、三試料とも所々に多数の平行線状の構造が認められた（写真1a-1c, 2a, 3a-3b, 4a-4b）。その下層に多角形の細胞が認められる場合もある（写真3a-3b, 4b）。

このような構造は炭化玄米粒、とくに塊状で出土したものを分離した場合に推察される構造（写真5-6a）の中に類似のものが認められるようと思われる。塊から分離した場合には様々な面で分離し、従って露出する内部の構造も様々である。比較のために示した写真は、古墳時代の神奈川県海老名本郷遺跡から出土した炭化イネ粒である。この遺跡から出土した炭化塊の中には穂の付着した粒も多く認められるが、穂の付いていない粒も多く認められる（松谷1991b）。その中の一部に、粒表面の下層に多数の平行線からなる細胞（横細胞に相当すると考えられる）が観察されるが、さらにその下には多角形の細胞が認められ、内野々遺跡の炭化物で観察される細胞の形態と類似しているようと思われる。内野々遺跡の炭化物の存在した時代は、弥生後期終末～古墳時代初頭のことなので、イネの存在は十分に可能で、従ってイネ粒の可能性は考えうる。ただし、外形からわかるような粒状物が残っていないので、玄米だとしても、ある程度細かく碎かれた状態と考えられる。

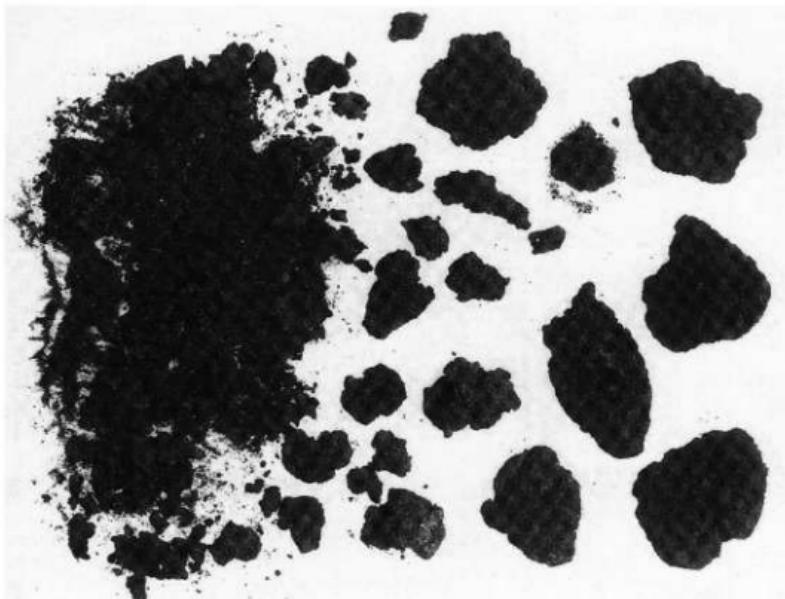
土器内面に付着した炭化物で、外形から炭化米かと思われた炭化物が、イネではなくマメ科の子葉ではないかという報告（佐藤1983）がある。半分に割れた出土マメにも平行線の列んだ細胞が観察されるが、平行線の間隔やその下層の細胞の形態が異なるようと思われる。しかし、イネやマメ以外の植物種子にも類似の構造が存在する可能性も否定できないので、イネとの断定は差し控えておきたい。将来の類例を持つことが必要であろう。

《文献》

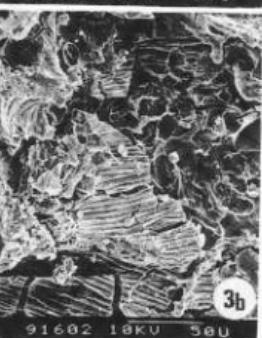
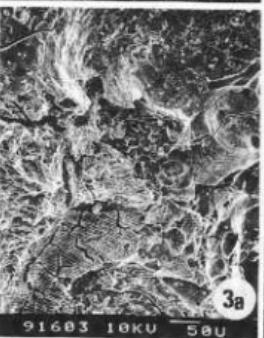
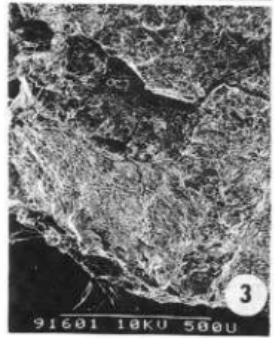
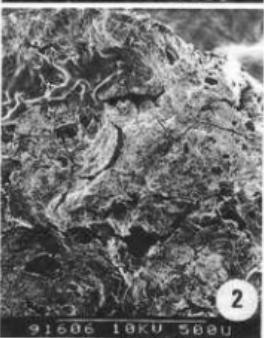
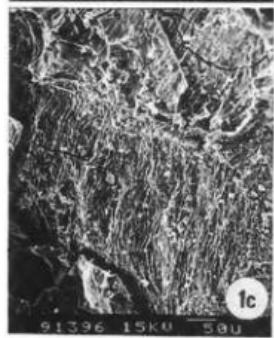
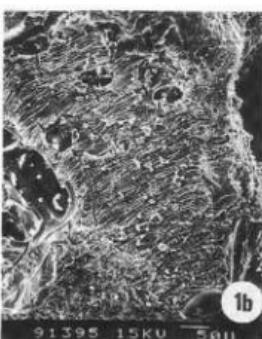
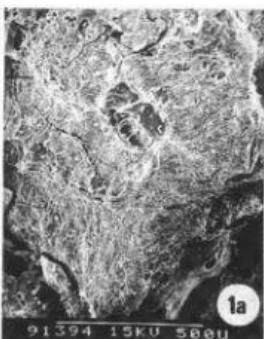
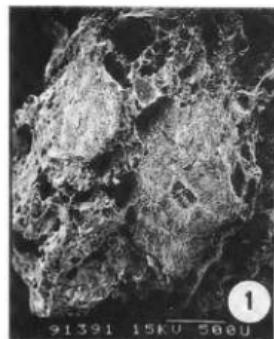
- 松谷曉子 1991 a 「武田遺跡群出土の植物遺残の識別」『武田Ⅳ-1990年度武田遺跡群発掘調査の成果』(財)勝田市文化・スポーツ振興公社文化財調査報告5集 109-113 p
- 松谷曉子 1991 b 「海老名本郷遺跡出土炭化植物遺残の識別」『海老名本郷遺跡』
- 本郷遺跡調査団 288-293 p 図版102-107
- 佐藤敏也 1983 「西岩田遺跡出土土器内面に付着する炭化物分析結果」『西岩田-近畿自動車道天理-吹田線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査概要報告書』304-305 p

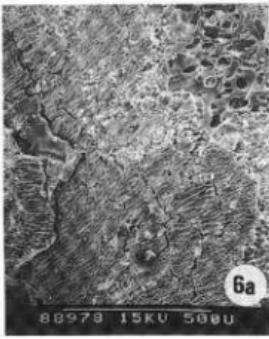
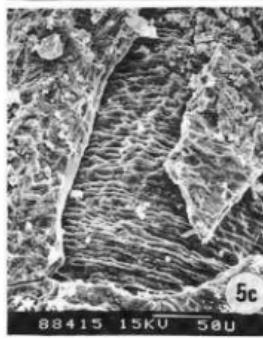
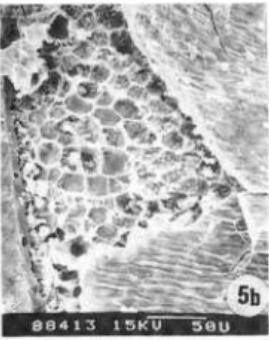
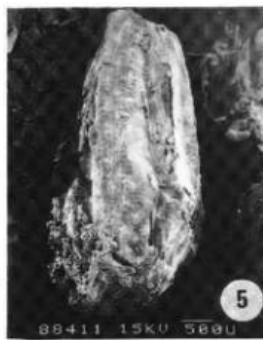
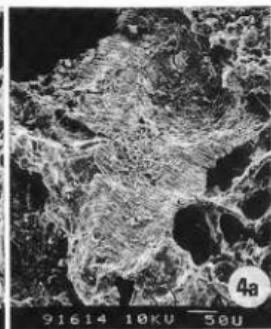
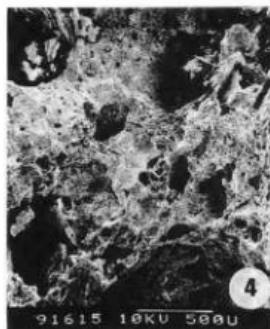
《写真説明》

- | | |
|-----------------------------------------|--------------------|
| 1 内野々遺跡出土炭化物塊の一部 A | 1 a 写真 1 右下部分の拡大 |
| 1 b 写真 1 a 右上部分の拡大 | 1 c 写真 1 a 左下部分の拡大 |
| 2 内野々遺跡出土炭化物の別破片 B | 2 a 写真 2 中央部の拡大 |
| 3 内野々遺跡出土炭化物の別破片 | |
| 3 a 写真 3 右下およびその右部分 (写真 3 には写っていない) の拡大 | 4 内野々遺跡出土炭化物の別破片 C |
| 3 b 写真 3 a 中央部の拡大 | 4 b 写真 4 a 中央部の拡大 |
| 4 a 写真 4 中央部の拡大 | 5 a 写真 5 拡大 |
| 5 本郷遺跡出土炭化米 A | 5 b 写真 5 a 左上部の拡大 |
| 5 b 写真 5 a 右中央部の拡大 | 5 c 写真 5 a 左上部の拡大 |
| 6 本郷遺跡出土炭化米 B | 6 a 写真 6 中央部の拡大 |



SA-2 出土長頸壺内炭化物 (実大)





内野々遺跡

林業試験場建設に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

1992. 3

編集行 宮崎県教育委員会
〒880 宮崎市橋通東1丁目9-10

印刷 (株) 富士写真印刷
〒880-02 宮崎郡佐土原町大字下那珂
字浮橋7418-2